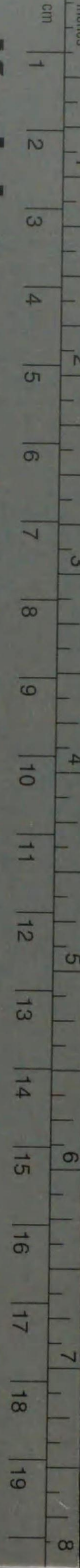


Kodak Gray Scale



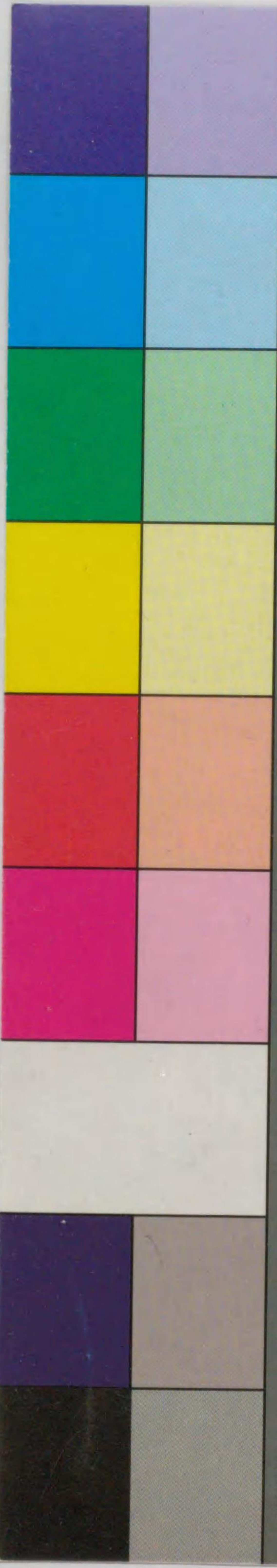
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



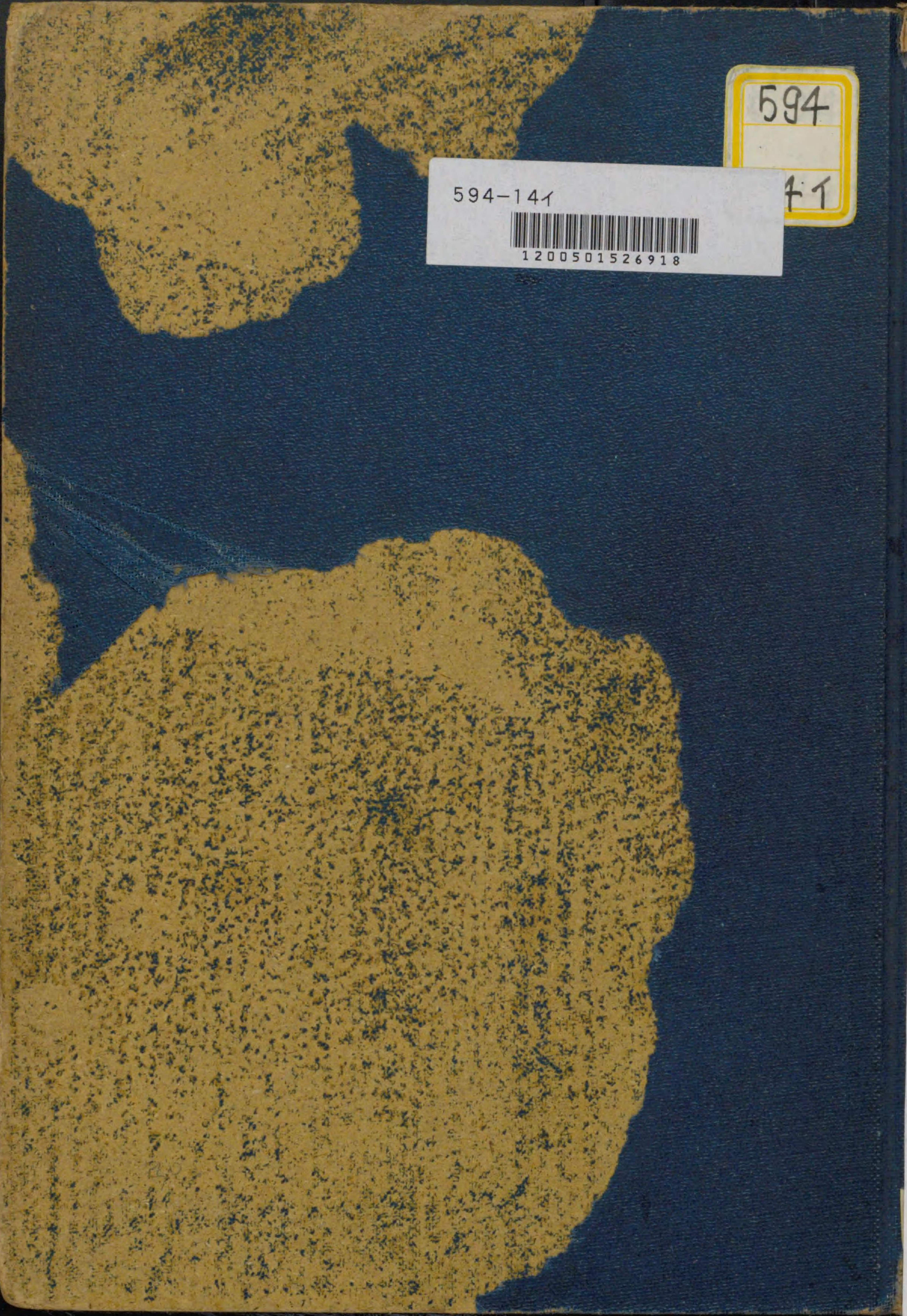
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



594
f1

594-141
1200501526918



639

佐伯有義校訂標注



大國史

卷五

朝日新聞社藏版



日本後紀

卷上

裝畫・田中咄哉州



日本國史



594

141

日本後紀

解説

一、書名

日本後紀は、續日本紀に次ぎて、桓武天皇延暦十一年正月より平城・嵯峨兩天皇を歴て、淳和天皇天長十年二月に至るまで、御四代四十二年間の事を記載せり。續日本紀は、日本紀に續きたる史書なれば、續日本紀と名づけられしが、本史は續日本紀に次ぎたるものなれば、續々日本紀と號すべきも、さる名稱もいかゞなれば、漢書に對する後漢書などの例を思ひて、日本後紀と名づけられしにやあらむ。書名を選ぶことは容易ならぬことなれば、種々の議ありしなるべけれど、文献の徵すべきものなれば知るに由なし。其の卷數の四十卷なることは序文にも明かに見え、諸書にも四十卷と記せるに、拾芥抄上末には日本後紀三十卷と見え、惟賢比丘筆記にも三十卷とあれど、冊は冊の誤なりと知るべし。

本史の編修せられしは、仁明天皇承和七年十二月九日なり、初めて此の書編修の勅命ありしは、嵯峨天皇弘仁十年なるが、此の御代には未だ完成せず、淳和天皇の御代にも相繼ぎて撰修せしめ給ひしかど、同じく成らず、仁明天皇御即位の後屢、勅あり、更に撰者を任命して督勵し給ひ、承和七年に至りて漸く功成り奏上せり、弘仁十年勅命ありしより此に至るまで前後二十二年に及べり、さて初めて此の書編修の勅命ありしことは、序文に

弘仁十年、太上天皇勅大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣緒嗣、參議從四位上行皇后宮大夫兼伊勢守藤原朝臣貞嗣、參議左衛門督從四位下兼守右大辨行近江守良岑朝臣安世等、監修撰集、

と見えたり、されど其の月日を記さざれば、何月なりしか詳ならねど、此に見ゆる四名の任官叙位の年月を推考するに、冬嗣は此の年(弘仁十年)大納言正三位にて左近衛大將按察使を兼ね、緒嗣は正三位中納言にて兼民部卿、安世は參議左衛門督從四位下兼右大辨近江守にて序文とよく合へるが、貞嗣は此の年三月一日に始めて參

議に任せられたり、されば四人に此の勅命ありしは、恐くは三月一日以後なりしなるべし、かくて嵯峨天皇には同十四年四月御讓位あり、淳和天皇即位し給ひしが、

監修撰集、未了之間、三臣相尋、薨逝、緒嗣獨存、

とあるが如く、未だ之を完成するに至らずして三人は薨去せり、貞嗣は弘仁十五年、即ち天長元年正月に、冬嗣は同三年七月に、安世は同七年七月に薨じたり、かく四人の中三人まで薨去ありしかば、其の補缺を任命せざれば事業進行せざるを以て、更に緒嗣を總裁とし、其の以外の人々をば任命せられたり、其の事は序文に、

後太上天皇詔、副左近衛大將從三位兼守權大納言行民部卿清原真人夏野、中納言從三位兼行中務卿直世王、參議正四位下守右近衛大將兼行春宮大夫藤原朝臣吉野、參議從四位上守刑部卿小野朝臣岑守、從五位下勳七等行大外記兼紀傳博士坂上忌寸今繼、從五位下行大外記嶋田朝臣清田等、續令修緝、

とあり、副とは夏野以下を緒嗣の副とせられしなり、此の勅命ありし年月は並に詳ならざれど、緒嗣をば總裁とし、夏野以下を其の輔佐とせられしより推測するに、曩に總裁たりし冬嗣の薨後、天長三年七月以後なりしこといふまでもなかるべし、次に夏野以下の叙位任官の年月を検するに、夏野の權大納言に任せられしは同五年

三月左近衛大將民部卿如故、直世王の中納言に任じ、從三位に叙せられしは七年六月、吉野の參議に任せられしは同五年五月、正四位下に叙せられしは七年八月、岑守の參議に任せられしは弘仁十三年三月、從四位上に叙せられしは天長三年正月にて同七年四月卒去せり、以上公卿補任に據る、今繼の大外記從五位下に叙任せられしは天長元年、外記補任に據る、清田の大外記に任せられしは同四年にて、從五位下に叙せられしは同六年正月、文德實錄卷七、齊衡二年九月甲子紀清田傳に據る、以上、以上の叙任に依て考ふるに、天長三年冬嗣薨去ありしかば、緒嗣を其の後任とし、岑守、今繼等を同時に任命し、其他は漸次に補缺せられしかば、或は七年七月安世薨去の後、同時に任命ありしなるべし、然るに淳和天皇には同十年二月御讓位あらせられ、「屬之讓祚、日不暇給」と序文に見ゆるが如く、其の期間僅に三年に足らざりしかば、此の御代にも完成に至らざりき、次で仁明天皇御即位あらせられしが、仁孝自然、聿修鴻業、聖綸重疊、筆削遲延」とあるが如く、先帝の思召を遵奉せられ、先朝より關係せし人々に從事せしめ、屢、勅を下して御督促あらせられしが、意の如く進まず、撰者直世王は承和元年正月に、夏野は四年十月に薨じたりしかば、更に左大臣藤原緒嗣、右大臣源常中納言藤原吉野中納言藤原良房參議朝野鹿取に監修せしめ、前和泉守

布瑠高庭大外記山田古嗣等をして、其の事を詮次せしめられたり、此の年月も詳ならざれど、夏野の薨せしは承和四年十月なれば、其の以後なるべし、されば緒嗣以下の更に勅命を奉じたる際には、大體の編修は既に訖り、整理中に屬せしを奮勵して事に當り、七年十月に至りて淨寫功成り奏上せしものなるべし、本史は之を續日本紀に比較すれば、年數は約其の半に過ぎざれど、桓武天皇の後の半期より、平城嵯峨、淳和三天皇并せて御四代四十餘年に涉り、卷數は四十卷に上り、内容に於ては續日本紀に彷彿たるものなれば、編修に多年を要したるも故なきにあらず、法家文書目錄に據るに、

天長格抄卅卷

撰日本後紀之次、所抄出之例也、起桓武天皇延曆十一年正月丙辰迄、于後太上天皇十年二月乙亥云々、

と見えて、天長格抄卅卷は、全く後紀編修につきて編纂せられしものなり、其の他事抄九卷、(自延曆廿三年盡弘仁二年)次事抄五卷、(自弘仁三年盡天長元年)の如きも、或は同時に編纂せしものかと思はる、されば國史の編修に就きては、材料の蒐集を始め、其の準備に多大の勞力を要せしかば、いかに努力すとも、短日月に成功すべき

ものにあらざることを知り、古人の勞苦を察すべきなり。

三、撰者

本書の勅撰に關係したる人々は、弘仁十年に勅命を蒙りしは、

大納言藤原冬嗣

中納言藤原緒嗣

參議藤原貞嗣

同 良岑安世

の四名、次に淳和天皇の御代に勅命を蒙りしは、緒嗣の外に

權大納言清原夏野

中納言直世王

參議藤原吉野

同 小野岑守

大外記坂上今繼

同 嶋田清田

の六名、次に仁明天皇の御代に勅命を蒙りしは、緒嗣並に吉野の外に、

右大臣源常

中納言藤原良房

參議朝野鹿取

前和泉守布瑠高庭

大外記山田古嗣

の五名なりき、以上の中參議以上の顯職に在りし人々は、此に其の傳を贅せず、其の他の人々に就きて知り得る所を述べむに、

坂上今繼は、外記補任天長元年の條に、紀傳博士大外記從五位下勳七等坂上忌寸今繼、九月廿三日兼任止紀傳博士と見え、それより同五年に至るまで大外記たり、坂上忌寸は、姓氏錄右京諸蕃に、坂上大宿禰後漢靈帝男延王之後也とある、坂上大宿禰の同族なり、

嶋田清田は、文德實錄卷七に其の傳を載せ、齊衡二年九月甲子、散位從五位上嶋田朝臣清田卒、清田者、正六位上村作之子也、少入學、略涉經史、奉文章生試、遂及科第、後爲大學少屬、遷爲大宰少典、還爲內藏少屬、弘仁十四年、改臣姓爲朝臣、天長元年爲少外記、

三年兼爲勘解由判官、四年轉爲大外記、兼爲下野權掾、天長六年正月叙從五位下、承和二年爲宮内少輔、四年遷爲治部少輔、六年九月出爲伊賀守、仁壽元年十一月叙從五位上、卒時年七十七、とあり、されば此の書の成りし承和七年の前年九月に伊賀守として赴任し、其の以後は此の事に關係せざりしなるべし、

布瑠高庭は、後紀卷十二、延曆廿四年二月庚戌の條に、文章生從八位上布留宿禰高庭解を修め官に申して、石上神宮の神寶運遷を停止せむことを望み請ふ由見えたり、布留宿禰は姓氏錄大和皇別に、天足彦國押人命七世孫、米餅搗大使主命之後也、男木事命、男市川臣、大鷦鷯天皇御世、達倭賀布都努斯神社於石上郷布瑠村高庭之地、以市川臣爲神主、云々、天武天皇御世、依社地名、改布瑠宿禰姓、とあれば、其の家世々石上神宮の神職たりしなり、

山田古嗣は、文德實錄卷五に傳あり、仁壽三年十二月丁丑、相模權介從五位上山田宿禰古嗣卒、古嗣右京人也、越後介外從五位下勳六等益人之長子也、爲人廉謹、而寡言辭、幼歲喪母、敬事從母、天性篤孝、嘗讀書傳、至於樹欲靜而風不止、子欲養而親不待、流涕不禁、卷帙爲之沾濡、弘仁十二年丁父憂、哀毀過禮、天長三年爲陸奥按察使記事、五年爲少内記、六年遷爲少外記、九年轉爲大外記、公卿大臣以備顧問、推薦文士、多見納用、故人

仰之、承和十三年出爲阿波介、政績有聲、阿波美馬兩郡常罹旱災、古嗣殊廻方略、築陂蓄水、賴其灌溉、人用溫給、後爲相模介、病卒於官、時年五十六、とあり、大日本史卷一百十五にも其の傳を載せたり、古嗣は天長十年此の書編修の勅命ありし前年に少外記より大外記に進みたれば、恐らくは最初より編修に關係せしなるべく、而して奏上に至るまで其の事に預りしかば、撰者中の重要なりし人なるべし、殊に公卿大臣以備顧問とあるに據れば、編修に就きても此の人の意見を大に用ひられしなるべし、

四、傳 來

本史は全部四十卷なるが、其の現存するものは卷五以下僅に十卷にして、其の他の三十卷は悉く散逸せり、此は實に口惜しきことなるが、いかにして、何時の頃に亡びしか、文獻の徵すべきものなければ、詳に知り難けれど、試みに少しく述べむと欲す、本史は國家の重要な史籍なれば、皇室を始め奉り樞要の地位にある人々の家に藏せられしことは、下文に引ける諸書にても明かなるが、其の完備せしは何時の頃までなるかと考ふるに、先づ第一に是が證とすべきは、日本紀略なるべし、此の書は六國史の完備せる時代に拔萃せるものにて、書紀以下悉く完備し、後紀も卷一より

卷四十に至るまで毎卷缺くる所なし、之に依りて後紀の概要を知ることを得、至りて貴重なる寶典なり、其の抄録せし年代は詳ならざれど、後朱雀天皇以後、鳥羽・崇徳天皇頃までに成りしものにて、僧徒などの手に成れるものにはあらざるべく、斯道に志ある外記などが其の必要上抄録せしものかと推測せらる、次に通憲入道藏書目録に、

一合第七十六櫃、日本後紀一部冊寫、

一帙十号、

二帙十号、

三帙十号、

四帙十号、

と見ゆるが、通憲は鳥羽・崇徳・近衛三朝に仕へたる人にて、平治元年十二月十五日斬首せられたり、されば當時は完備せしこと言ふまでもなし、また花園院宸記に、

元亨二年八月廿六日、先日所給續日本紀冊卷見了返進院御方、申日本後紀欲見之也、

同く九月六日の條に、

九月六日、此間見日本後紀、先代政道尤可率由者歟、凡内外和漢書反覆讀之、必知其義於義雖無疑、及再三乃至數回、必有道義之染心、不知手舞足踏之心、自然而來者也、讀書人、必以此心可稽古也、一兩反讀誦或不留心者、更無稽古之益者也、

と見えたり、此の御日記を拜讀し奉るに、當時若し缺損する所ありしならむには、必

ず其の事を記させ給ふべきに、何等之に就きて記させ給はざるに據れば、當時も完備せしこと明かなり、此より約三十年ばかり後に記されたる仙洞御文書目録にも、

丁御文庫、杉櫃一合日本後紀、一合續日本後紀、文德實錄、

と見ゆるが、此の目録は文和三年六月に應官中原盛氏外二名の注進したるものなり、續後紀二十卷、文德實錄十卷、合せて三十卷を一合に收め、後紀のみを一合に收めたるに據れば、當時も正しく完備せしなるべし、更に降りて、永正二年八月中原師名の書寫せりと與書ある本朝書籍目録にも、

日本後紀四十卷、春澄善繩撰、從桓武延曆十一年、至淳和天皇十年、凡四代、

とあれど、此の目録には類聚國史二百卷、新國史四十卷、祕府略千卷など見え、いづれも完備せる書の現存するが如く記載すれど、應仁の亂を経て、大に荒廢せる永正の頃まで、是等の諸書が完全に保存せられたりとは信じ難ければ、日本後紀も其の類にて、目録には四十卷と見えても、果して此の頃まで完備せしや否は疑はしく、之を以て本史の存在せし確證とは爲し難し、

以上は本書の存在せる徵證を擧げたるが、更に其の半面より、即ち此の書の散逸せる事實に就きて少しく述べむと欲す、先づ其の證とすべきは、徳川幕府にて慶長

中古書の蒐集に就きて大に力を致し、他の五國史は悉く之を謄寫せしめて文庫に收められしかど、其の書悉く内閣文庫に現存す。獨り後紀のみは杳として其の名を聞かず、尾張水戸兩徳川家、加賀前田家の藏書中にも其の名は見えず、水戸家にて後紀を頻に搜索せられしかど得られざりしことは、年山紀聞に「西山公久しく日本後紀を探りたまふといへども、眞の本を得たまはず」とあるにて知られ、第二に元祿中、鴨祐之の日本逸史を編纂したるも、亦本史の亡びたるに原因し、淺井重遠の序文に、「如日本後紀一書、蓋亦亡矣云々、從四位上鴨祐之縣主云々、慨然惜舊史亡逸、嘗有心于補緝、比者方就類聚所載、而編次後紀時事、更條附他書、可以參攷於此者、因名之曰逸史」と云へり、第三に類聚日本後紀を始め、後紀の偽書の世に現はるゝに至りしも、眞本の影を收めたるに原因せり、斯くて眞本は亡びて世に無きものと思ひしに、塙保己一は寛政十一年京都にて本書卷五以下八卷を獲て之を出版し、尋いで享和二年卷十二、同廿一の兩卷を獲て出版せり、是れ所謂塙本日本後紀なり、本書奥書には「右日本後紀殘缺、門人稻山行教於京都寫之」とあるのみにて、所在を明かにせざれど、此の十卷は伏見家の御文庫に存せりといへるが故に、予は先年六國史校訂材料取調掛として、伏見宮家事務官に面會して取調を請ひしが得る所なく、其の儘にて止みた

り、後更に六國史校訂準備委員として、從事中三條西伯爵に依頼して、六國史に關係ある諸書を借覽せむとせしに、一も存するもの無しと言はれしが、其の後此の數卷を見出だせりと示されしは、天文本日本後紀なりき、其の冊數は六冊にて、卷數は塙本と同じく十卷なり、每冊奥書あり、今其の奥書を擧ぐれば左の如し、

卷 五、本云、延久六年六月廿七日未時比校了、大永四年九月十九日、以中書王御本書寫之、

卷 八、天文二三廿一、一見加朱點了、

卷十三、天文二五月、命大史于恒宿禰、令書寫、同一校了、

卷十七、天文元臘廿八、書寫了、

卷廿二、右命于恒宿禰、令書之、加一見加點了、于時天文二年九月十日、

卷廿四、右倩于恒宿禰、手令書之、于時天文二年重九之後一日、加一見又加朱點了、

此の奥書を見るに、大永四年九月十六日以中書王御本書寫之とある中書は中務省の唐名なれば、中書王は親王にて中務卿の官にあらせられし伏見宮第六代貞敦親王、後柏原天皇御猶子なるべし、されば大永四年伏見宮家にありし御本を拜借して寫したるものなり、卷八以下は天文元年、或は二年の書寫に係り、就中卷十七は元年

十二月にて、其の他は二年三月、五月、九月に書寫とあれば、卷八以下は天文に至りて發見せしものにて、卷五は別本によりて寫されしかとも思はる、而して稻山行教の寫したる原本は、三條西家の寫本と同一のものにはあらざりしなるべし、そは二本を對校するに文字の異同少からざるにてそれと知らるゝなり、之に依りて考ふるに、此の書の散逸せしは蓋應仁の亂或は其の前後なるべし、而して永正大永の頃に至りて、國史を保存せむとする人起り、後紀の散逸せしを慨歎して、沿く之を搜索し辛うじて卷五以下の十卷を纏め得たるものなるべし、然るに此の十卷の存することとをば、後紀僞作者は勿論、光圀卿祐之重遠等の諸氏も知られざりしが、塙氏の之を探り得て公にしたるは大に功ありといふべし。

五、異本

(一) 塙本日本後紀 殘闕十卷

日本後紀四十卷中卷五、八、十二、十三、十四、十七、二十、廿一、廿二、廿四の十卷を京都に於て求め得て、寛政十一年(十二、廿一は享和元年)塙檢校が、門人稻山行教をして校正せしめて出版せり、本史の刊行せるものは此の一本のみ。

(二) 三條西家本寫本 同上

伯爵三條西實義氏の所藏に係り、唯一の古寫本なり、世に之を天文本と稱すれど、卷五は大永四年九月の書寫に係れり、本書の事は上文傳來の項に詳に説明せるを以て此には之を略す

(三) 日本後紀纂寫本 一卷

和學講談所本與書に、本云、右二條前攝政康通公之御家藏也、然江氏有幽綠、而令拜借、以深珍祕焉、予僥倖得此書、而寬文戊申之秋、句讀朱點等、悉令書寫畢、尤後姪謾勿令許容矣、とあり、最初に序文を載せて、次に延曆十一年閏十一月辛丑、同十二年四月丙子、同十三年十一月、同十四年八月等の記事を、年月の順序を逐ひて記載せり、延曆十六年正月癸卯善珠爲僧正の下に、元亨釋書資治表の文を混じたるは疑はしきに似たり、れど、此は後に書入れしが轉寫の際に誤りて本文となれるものなるべし、類聚國史、日本紀略に見えざる文の數條見ゆるに據れば、群書一覽に云へるが如く、後紀の全文未だ亡失せざりし時に抄出せしものか、尙ほよく考ふべし、二條前攝政は寬文六年七月六十歳にて薨去、戊申は寬文八年なれば、公の在世中に借受けて寫せる原本に依りて、八年に轉寫せしものなり。

(四) 類聚日本後紀寫本

二十卷十冊

卷一以下、毎卷の年月は日本逸史に全く同じ、無窮會神習文庫本奥書に「寛政九丁巳春二月二十六日、尾藩寺社以公衙之本寫之畢、尾張大國靈神社神主從五位下蜂須賀越後守藤原朝臣常榮、行年五十四歲之時、文政二己卯年夏五月晦日、以右本寫之畢、同社祠官正六位上川口播磨介藤原朝臣光裕」とあり、其の内容は世に行はるる後作の日本後紀と稱するものと同一なり、年山紀開卷二に「日本後紀第十七天長二年浦嶋子歸郷の一節、及契沖阿闍梨の書一篇を載せ、次に「右は契沖師よりをこせし物なり、西山公久しく日本後紀を探りたまふといへども、眞の本を得たまはず、いにしころ京師より一本來りしを、彰考館にて吟味せられたるには、やう偽書にてぞ侍し、契沖翁の見たる本も此筋としられたり、云々」と見ゆるが、類聚日本後紀にも、卷十七に天長二年十二月、今歲浦嶋子歸郷云々と載せたり、されば此の書も後作の日本後紀も同一のものにて、信用すべからざるものなり、

(五) 日本後紀寫本

二十卷十冊

眞本は四十卷なるが、此の書は之を二十卷と爲せり、世に之を偽書と稱するが、一本奥書に「日本後紀四十卷は六國史の一にして、閑院贈正一位右大臣冬嗣公勅を奉じ

て撰給ふ所にして、承和八年仁明帝へ藤原冬嗣上られし史なり、しかはあれども中古より絶て世に傳る事なし、今此抄略廿卷は、木下長嘯子本を以て書寫するものなり、寶典の世にあらはれ、歴史の傳はる事、全く文明の徳化によるゆるならむかし、妙壽院惺窩とあり、其の次に右に出せる奥書ある古寫本は、惺窩自筆の本にして、己親しく見たる本也、されば此廿卷の後紀を今世に彼此と疑ふ人もあれど、全く本書を抄録せる物にて、姓氏録を抄録せるが今世に傳はれる同じ類なれば、さのみ云ひ貶すべき物にあらざる也、云々、明治十七年八月、榮木廼舎主長胤とあり、常世氏は惺窩自筆の本を見たりとあれど、疑なき能はず、平田翁も之を後作の日本後紀と稱すべし、偽書にあらずといはれたれど、常世氏の言の如く、本書の完備せる程に抄録せるものならむには、日本紀略に記せる所と卷數は一致すべきに、大に相違あり、又其の内容に於ても疑はしきものあれば、信すべきものにはあらず、此書編纂の年代は詳ならざれど、本史の世に跡を絶ちしより後、元祿より以前に成りしものなるべし、日本逸史の卷數の區別も全く此書と同じきを見れば、逸史も亦年月は之に依りて區別せしものなるべく、さすれば此の書は其の以前よりありしものならむ、

(六) 同

寫本

二卷 卷三、同四
卷子本

後作後紀二十卷本の外に、卷子本にて卷三同四の兩卷あり、卷三は延暦十三年正月より十二月まで、卷四は同十四年より十五年六月までの事を記し、卷三奥書には、長保二年九月朔日明法博士左衛門權佐惟宗朝臣允亮一校了、同四には長保二年九月十六日明法博士左衛門權佐惟宗朝臣允亮一校了とあり、神習文庫本卷三奥書に、此後紀は卷子にて古寫本なりしを、親友藤原幸盛(通稱熊太郎)の自寫して被贈たる也、井上頼圀とあり、此二卷は古本の如く見ゆれど、久邇宮本日本紀略と比較するに、真本後紀卷三は延暦十三年七月より十四年閏七月までの事を記せるに、此の書は十三年正月より十二月までの事を記し、真本卷四は十四年八月より十五年六月までの事を記せるに、此の書は十四年八月より十五年六月までの事を記せり、是れ僞書たる證なり、其の記事は逸史よりも詳細にして、同書に見えざる事項をも載するは、或は逸史以後に成りしものかとも思はる、蓋し真本の世に亡びしより、之を補はむとて好事家の編輯せしものなるべし。

校訂日本後紀

凡例

一、本書は塙檢校の校訂に係る日本後紀を以て底本とし、三條西伯爵家の所藏に係る天永及天文の奥書ある古寫本を以て校訂せり、三條西家の本は世に天文本と稱すれど、卷五は大永本にして、卷八以下の九卷は天文元年及二年の奥書あり、天文本と稱すること些さか穩當ならず、故に三條西家本と稱し、本書の符號は西本と書せり。

校合本には、狩谷棧齋校合本、谷森善臣翁校合本、井上頼圀翁校合本あれど、他に校合すべき古寫本なかりしを以て、狩谷校本は僅に類聚國史日本紀略等を以て校合したるのみにて見るべきものなし、谷森校本は塙本に三條西家本を校合したるものなり、井上校本は谷森本を寫し、奈良本紀略等を書入れたり、予は幸に三條西家本を閲覽することを得、原本に就きて直に校合したれど、以上の校合本をも旁引し、採るべきものは之を取れり。

本書の注釋書と稱すべきものなし、たゞ矢野玄道翁の日本逸史私記あり、標注に私記として引けるは是なり、

二、 本書の校訂に方りて、底本と校合し或は参照せる諸書は大略續日本紀に同じ、故に此に之を略す、

三、 訓點は底本に據りたれど、一二改めたるもあり、宣命の傍訓は新に之を加へたり、

四、 本書は四十卷の中三十卷を逸ひ、殘存するもの僅に四分の一に過ぎざれば、逸日本後紀を編纂して其の闕けたるを補はむと欲すれど、時日之を許さざるを以て、他日を期して完成せむと欲す、

昭和四年十一月

佐伯有義識

日本後紀序

〔日本後紀序〕
 此序は原本に缺く類史百冊七に據て之を補ふ
 ○綿書、曩策と相對して古の書を云綿は綿邈即ち悠遠の意なるべし
 ○曩策、字書に曩は昔也策は簡也連綿諸簡謂之策古無紙筆大事書之於策とあり史書を云
 ○炳戒云々、炳戒は明戒なり森羅は森然として多く羅列せるを云
 ○徽猷、善謀なり
 ○前後太上天皇、嵯峨淳和兩天皇
 ○欽明文思、尙書堯典に出づ陸氏音義に馬云威儀表備謂之欽照臨四方謂之明經緯天地謂之文道德純備謂之思とあり
 ○問養馬於牧童、莊子徐無鬼篇に黃帝遇牧馬童子請問爲天下小童曰夫爲天下者亦奚以異乎牧馬者哉亦去其害馬者而已矣(節略)とあるに據れり
 ○得蒸鮮於李老、老子第六十章に治大國若烹小鮮とあるに據れり李は老子の姓なり
 ○薛蘿早收渙汗、薛蘿は

臣緒嗣等、討論綿書、披閱曩策、文史之興、其來尙矣、無隱毫釐之疵、咸載錙銖之善、炳戒於是、森羅徽猷、所以昭晰、史之爲用、蓋如斯歟、伏惟前後太上天皇、一天兩日、異體同光、並欽明文思、濟世利物、問養馬於牧童、得烹鮮於李老、民俗未飽、昭華、薛蘿早收、渙汗、弘仁十年、太上天皇勅大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣緒嗣、參議從四位上行皇后宮大夫兼伊勢守藤原朝臣貞嗣、參議左衛門督從四位下兼守右大弁行近江守良岑朝臣安世等、監修撰集、未了之間、三臣相尋薨逝、緒嗣獨存、後太上天皇詔、副左近衛大將從三位兼守權大納言行民部卿清原真人夏野、中納言從三位兼行中務卿直世王、參議正四位下守右近衛大將兼行春宮

楚辭九歌(少司命)に若
 有人兮山之阿被薜
 荔兮帶女蘿とあるに出
 て、隱者の服の意に用ふ
 渙汗は易渙卦の九五に渙
 (散也)汗其大號とあり
 て王者の大號即ち詔令の
 意禪位して御自ら政を執
 り給はずなりしを云
 ○弘仁十年、月日を記さ
 ざれど貞嗣の參議に任ぜ
 られしは十年三月一日な
 れば勅命ありしは其後な
 るべし
 ○伊勢守藤原朝臣貞嗣、
 公卿補任には伊與守とす
 ○三臣相尋薨逝、貞嗣は
 弘仁十五年(天長元年)正
 月に、冬嗣は天長三年七
 月に、安世は同七年七月
 に薨す
 ○後太上天皇、淳和天皇
 ○夏野、天長五年三月權
 大納言に任じ同七年九月
 正に轉ずされば勅命あり
 しは同年九月已前なるべ
 し
 ○直世王、天長七年六月
 中納言に任じ同八月中務
 卿を兼ねされば同年八月
 已後なるべし
 ○吉野、天長五年五月參
 議に任じ同七年五月春宮
 大夫、八月兼右大將、さ

大夫藤原朝臣吉野、參議從四位上守刑部卿小野朝臣岑守、從五位下
 勳七等行大外記兼紀傳博士坂上忌寸今繼、從五位下行大外記嶋田
 朝臣清田等、續令修緝、屬之讓祚、日不暇給、今上陛下稟乾坤之秀氣、含
 宇宙之滴精、受玉璽而光宅、臨瑤圖而治平、仁孝自然、聿修鴻業、聖綸重
 疊、筆削遲延、今更詔左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣、正三位守右大臣
 兼行東宮傅左近衛大將臣源朝臣常、正三位行中納言臣藤原朝臣吉
 野、中納言從三位兼行左兵衛督陸奧出羽按察使臣藤原朝臣良房、參
 議民部卿正四位下勳六等臣朝野宿禰鹿取、令遂功夫、仍令前和泉守
 從五位下臣布瑠宿禰高庭、從五位下行大外記臣山田宿禰古嗣等、銓
 次其事、以備釋文、錯綜群書、撮其機要、瑣詞細語、不入此錄、接先史後、綴
 叙已畢、但事緣例行、具載曹案、今之所撰、弁而不取、自延曆十一年正月
 丙辰迄于天長十年二月乙酉、上下冊二年、勒以成冊卷、名曰日本後紀、

れば同年八月已後なるべ
 し
 ○岑守、弘仁十三年三月
 參議に任じ天長三年正月
 從四位上に叙し五年閏三
 月兼刑部卿七年四月卒
 ○續令修緝、前に擧げし
 人々の叙任の年月より推
 して考ふるに夏野は天長
 五年三月より同七年九月
 十日までに、直世王吉野
 も蓋し之と同時に勅命あ
 りしならむ岑守は七年四
 月十九日に卒したれば勅
 命ありしは五年閏三月以
 後に修史の事に關せし
 は二箇年に過ぎざるべし
 ○屬之讓祚云々、夏野等
 に勅命ありしは七年秋に
 て淳和天皇の御讓位あり
 しは十年二月なれば其間
 僅に二年半に過ぎず故に
 日不暇給と云、給は足也
 ○今上陛下、仁明天皇
 ○瑤圖、瑤は玉之美者、
 圖は象也又地圖也
 ○聿修鴻業、聿修は毛詩
 大雅文王篇に無念爾祖
 聿修厥德とあるに出づ
 聿は述也
 ○聖綸重疊、綸は綸言に
 て聖勅なり重疊は重なる
 意、重ねて勅して後紀の
 成功を促さるゝなり

其次第、列之如左、庶令後世視今、猶今之視古、臣等才非司馬、識異董狐、
 代匠傷手、流汗如漿、謹詣朝堂、奉進以聞、謹序、
 承和七年十二月九日

- 左大臣 正二位 臣 藤原朝臣 緒嗣
- 正三位 守右大臣 兼行東宮傅 左近衛大將 臣 源朝臣 常
- 正三位 行中納言 臣 藤原朝臣 吉野
- 中納言 從三位 兼行左兵衛督 陸奧出羽按察使 臣 藤原朝臣 良房
- 參議 民部卿 正四位 下勳六等 臣 朝野宿禰 鹿取
- 前和泉守 從五位 下臣 布瑠宿禰 高庭
- 從五位 下行大外記 臣 山田宿禰 古嗣

○今更詔云々、文中記す所の良房以下の官位は承和七年十二月の現在なれば之に據りて詔ありし年月を推知し難し按に夏野は承和四年十月、直世王は同元年正月に薨去ありしかば次々に補缺せられしか、或は御世の始に勅命ありしか何れも定め難けれど仁孝自然事修鴻業、聖綸重疊あるに據れば先帝の叡慮のまゝに之を改めずして同一の人に從事せしめ速に竣功すべしと屢々勅を下されしかご筆削延延せしを承和四年十月に夏野薨じ先朝より勅を奉ぜし人は緒嗣一人となりしかば此に中納言源常以下を任命せられ迅速に成功せしめ給ひしならむ

○緒嗣、天長九年十一月左大臣に任じ十年三月今上即位の日正二位に叙す
○常、承和七年八月右大臣に任じ同四年六月左近衛大将たり
○吉野、承和元年二月中納言に任す
○良房、承和七年八月中納言に任じ同六年正月按察使を兼ね
○鹿取、天長十年六月參議に任じ承和三年五月兼民部卿七年正月正四位下に叙す
○功夫、功云に同じ
○具載曹案云々、曹案は官曹の文案なり此紀の編纂に定例あり曹案には詳細に載せられたる此には棄て、録せずとなり
○乙酉、原本乙卯に作る二月戊午朔乙卯なり紀略及續後紀序に據て改む
○令後世視今云々、漢書京房傳に後之視今猶今之視前也、又義之蘭亭記に後之視今亦猶今之視昔等の語に據れるなるべし
○司馬、史記の作者司馬遷
○董狐、左傳宣二年に董狐古之良史也書法不隱さあり
○代匠傷手、老子第七十四章に夫代大匠斲希有不傷其手矣さあるに據れり
○如漿、漿は字書に水米汁相將也さあり

校訂 六國史第五卷目次

解説

凡例

序文

日本後紀

皇統彌照天皇(桓武天皇)

卷第一【桓武紀一・起延曆十一年正月盡同十二年】……………欠

卷第二【同】……………二・起延曆十二年正月盡同十三年六月……………欠

卷第三【同】……………三・起延曆十三年七月盡同十四年閏七月……………欠

卷第四【同】……………四・起延曆十四年八月盡同十五年六月……………欠

○卷第五【同】……………五・起延曆十五年七月盡同十六年三月……………一

延曆十五年(自七月)……………一

延曆十六年	九
卷第六【桓武紀六・起延曆十六年四月盡同十七年三月】	
卷第七【同 七・起延曆十七年四月盡同十二月】	欠
卷第八【同 八・起延曆十八年正月盡同十二月】	欠
延曆十八年	一九
卷第九【桓武紀九・起延曆十九年正月盡同二十年六月】	欠
卷第十【同 十・起延曆二十年七月盡同廿二年二月】	欠
卷第十一【同 十一・起延曆廿二年三月盡同十二月】	欠
卷第十二【同 十二・起延曆廿三年正月盡同廿四年六月】	欠
延曆廿三年	四一
延曆廿四年	五六
卷第十三【桓武紀十三・起延曆廿四年七月盡大同元年五月】	六七
延曆廿四年【自七月】	七五
大同元年	七五

日本根子天推國高彥天皇（平城天皇）

卷第十四【平城紀一・起大同元年五月盡同九月】	九三
大同元年【自五月】	九三
卷第十五【平城紀二・起大同元年十月盡同□年□月】	欠
卷第十六【同 三・起大同□年□月盡同三年三月】	欠
卷第十七【同 四・起大同三年四月盡同四年四月】	一〇五
大同三年【自四月】	一〇五
同 四年	一二四
太上天皇（嵯峨天皇）	
卷第十八【嵯峨紀一・起大同四年五月盡同十二月】	欠
卷第十九【同 二・起弘仁元年正月盡同八月】	欠
卷第二十【同 三・起弘仁元年九月盡同十二月】	一三一
弘仁元年【自九月】	一三一
卷第廿一【嵯峨紀四・起弘仁二年正月盡同閏十二月】	

弘仁二年.....一四七

○卷第廿二【嵯峨紀五・起弘仁三年正月盡同四年二月】

弘仁三年.....一七一

同 四年.....一九〇

卷第廿三【嵯峨紀六・起弘仁四年三月盡同五年六月】

○卷第廿四【同 七・起弘仁五年七月盡同六年十二月】

弘仁五年(自七月).....一九七

同 六年.....二〇三

卷第廿五【嵯峨紀八・起弘仁七年正月盡同八年三月】

卷第廿六【同 九・起弘仁八年四月盡同九年四月】

卷第廿七【同 十・起弘仁九年五月盡同十年十二月】

卷第廿八【同 十一・起弘仁十一年正月盡同九月】

卷第廿九【同 十二・起弘仁十一年十月盡同十二年十二月】

卷第三十【同 十三・起弘仁十三年正月盡同十四年四月】

欠

欠

欠

欠

欠

欠

欠

欠

欠

欠

欠

欠

欠

欠

欠

卷第卅一【嵯峨紀十四・起弘仁十四年五月盡同十二月】
天高讓彌遠天皇(淳和天皇).....欠

卷第卅二【淳和紀一・起天長元年正月盡同十二月】.....欠

卷第卅三【同 二・起天長二年正月盡同十二月】.....欠

卷第卅四【同 三・起天長三年正月盡同十二月】.....欠

卷第卅五【同 四・起天長四年正月盡同十二月】.....欠

卷第卅六【同 五・起天長五年正月盡同十二月】.....欠

卷第卅七【同 六・起天長六年正月盡同十二月】.....欠

卷第卅八【同 七・起天長七年正月盡同十二月】.....欠

卷第卅九【同 八・起天長八年正月盡同十二月】.....欠

卷第四十【同 九・起天長九年正月盡同十二月】.....欠

扉題字.....三上參次筆

日本後紀卷第五

起延曆十五年七月盡十六年三月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉 勅撰

皇統彌照天皇 桓武天皇

秋七月丙申御馬埴殿觀相撲○戊戌幸南院賜五位已上物有差無品
 朝原內親王授三品從四位上五百井女王正四位下正五位下高嶋女
 王正五位上從四位上藤原朝臣雄友正四位下從五位下石上朝臣宅
 子從五位上外從五位上物部多藝連建麻呂爲造宮大工外從五位下
 秦忌寸都岐麻呂爲少工○乙巳右大臣正二位兼行皇太子傅中衛大
 將藤原朝臣繼繩薨遣使監護喪事葬事所須令官給焉詔贈從一位繼
 繩者右大臣從一位豐成之第二子也天平寶字末授從五位下爲信濃
 守天平神護初叙從五位上尋授從四位下拜參議寶龜二年隸叙正四
 位上十一月授從三位歷大藏卿左兵衛督俄拜中納言天應元年授正

〔延曆十五年〕馬埴殿、
 考異、馬埴作爲據類聚
 國史記埴當作埴と云り
 馬埴殿の稱は延曆十四年
 五月辛未類史七十三に
 始て見ゆ弘仁九年五月以
 後之に武德殿と稱す殿當
 門内右近衛府右兵衛府の
 東にあり其前は方百數十
 丈の廣場にして武技を演
 ずる所なり又埴場殿或は
 馬埴殿とも稱す
 ○相撲、抄術藝部に相撲
 漢武故事云角觝今之相撲
 也王隱晉書云相撲（撲音
 蒲角反和名須末比云々）
 下伎也とあり
 ○藤原朝臣繼繩薨、寶字
 七年正月壬子紀に始見叙
 任年月補任神護二年及延
 曆十五年等に見ゆ

○遣使監護喪事、補任に詔遣參議繼兄等四人監護葬事、又遣中納言...
○就第宣贈從一位別勅賜、布帛綿等、見ゆ
○贈從一位、原本贈を賜に作るを改む
○兼中衛大將、八年十月戊寅に任ぜらる
○授正二位、補任に據るに正二位昇叙は十三年十月廿七日なり
○文武之任、補任に任を清班の二字に作る
○端右之重、端右は朝端國右の略(江淹蕭重讓揚州表に超居國右鬱處朝端あり)朝臣の首端一國の高位の意か補任には重を重任に作る
○任在曹司、原本任を時に作る西本に據て改む
○向隅、漢書に出づ獨り憂ひ悲むを云既に注す
○味口求衣、口疑くは爽字
○神靈池云々、此事又清和紀貞觀六年十二月廿六日已卯條に見ゆ
○越優婆夷、翻譯名義集卷一に鄒波斯迦唐言近事女舊優婆斯又曰優婆夷皆訛也言近事一者親近承事諸佛法故後漢書

三位、延曆二年、轉大納言、五年、叙從二位、兼中衛大將、九年、右大臣、授正二位、在位七年、薨時年七十、繼繩歷文武之任、居端右之重、任在曹司、時就朝位、謙恭自守、政迹不聞、雖無才識、得免世譏也、○戊申、尾張國飢、遣使賑給、大和國人正六位上大枝朝臣長人、河內國人正六位上大枝朝臣氏麻呂、正六位上大枝朝臣諸上、正七位下菅原朝臣常人、從七位上秋篠朝臣全繼等十一人、貫付右京、○辛亥、詔曰、朕以眇身、忝承司牧、日旰忘食、憫一物之向隅、昧求衣、懼五行之紊序、比來大宰府言、肥後國阿蘇郡山上有沼、其名曰神靈池、水旱經年、未嘗增減、而今無故涸減、二十餘丈、考之卜筮、事主旱疫、民之無辜、恐蒙其殃、方欲修德、施惠、消妖拯民、其天下鰥寡、惻獨不能自存者、量加賑給、兼令每寺三日齋戒、讀經悔過、庶恤隱之感、格於上天、靈應之徵、被於率土焉、生江臣家道女、遞送於本國、家道女、越前國足羽郡人、常於市廛、妄說罪福、眩惑百姓、世號曰越優婆夷、○癸丑、造宮職官位准中宮職、但大屬特爲七位官、○丁巳、從三位神王、正三位紀朝臣古佐美、爲大納言、正四位下石川朝臣眞守、大

注中華翻爲近住言受戒行堪近僧住也さあり
○造宮職官位准中宮職、三代格卷五寬平三年八月三日官符中に見ゆ
○八月諸口、口は神若は社字なるべし
○澇、字書に淫雨也淹也さあり
○佐比川橋、山城志紀伊郡廢佐比寺條に吉祥院村有地名佐比云々見ゆ
佐比は舊京城右京の縱衢の名にて朱雀大路の末鳥羽大路より乙訓郡久我曠に通ずる中間に桂河あり之に架せし橋なるべし
○賀茂神、神名式山田郡賀茂神社、廣澤村大字廣澤にあり
○美和神、同に美和神社、桐生市にあり
○火雷神、同に那波郡火雷神社、佐波郡芝根村大字下之宮にあり
○文字、原本文の字無し西本に據て補ふ
○驛道、原本驛を騎に作る西本に據て改む
○登勒野、山城國葛野郡にあり
○九月、牡山烽火、男山なるべし、男山は綴喜郡にあり、河内國に接す故に山

中臣朝臣諸魚授正四位上、從四位上藤原朝臣內麻呂、從四位下和朝臣家麻呂、正四位下、○八月己未朔、日有蝕之、○甲子、大和國山崩水溢、東大寺墻垣倒頽、○乙丑、緣淫雨不晴、奉幣於畿內諸口、筑後國澇、詔令賑恤、○丙寅、遣使賑給京中百姓、以霖雨經日、穀價騰躍也、○戊辰、遣內兵庫正從五位下尾張連弓張、造佐比川橋、山城國人正六位上大野朝臣犬養貫付右京、○甲戌、上野國山田郡賀茂神、美和神、那波郡火雷神、並爲官社、○己卯、巡幸京中、始置正親司史生二員、是日勅諸國地圖、事迹疎略、加以年序已久、文字闕逸、宜更令作之、夫郡國鄉邑、驛道遠近、名山大川、形體廣狹、具錄無漏焉、○癸未、幸大藏省、賜侍臣以下布有差、○丙戌、遊獵於登勒野、○丁亥、左兵衛佐從五位上橘朝臣入居爲兼右中辨、右兵衛佐從五位上秋篠朝臣安人爲兼左少辨、○九月己丑朔、勅遷都以來、于今三年、牡山烽火、無所相當、非常之備、不可暫闕、宜山城河內兩國、相共量定便處、置彼烽燧、○癸巳、從五位上阿保朝臣人上爲陰陽頭、播磨守如故、○丙申、山城國紀伊郡陸田二町賜典侍從四位上和氣朝臣

城河内相共に量定せしむ
烽火の事は軍防令に見ゆ
○聖嗣、紀略を暫に作る古くは相通す
○栗前野、抄郡郷部に(山城國)久世郡栗隈(久里久末)郷ある是なり今久保村大字廣野即ち此野なり云
○御坂連、姓氏錄に載せず
(十月)奉惟天造、考異に天舊作大據類史訂云云り又惟は類史此に作る大造は左傳成十三年に出づ大功云云が如し造は作なり爲なり、天造は易屯卦彖傳に天造草昧あり天運の意或はまた天の始て物を作る意云文選陸機歎逝賦に妙思天造、注に妙思天之造物あり
○時來、類史來を泰に作る
○桅帆、字書に桅は船橋也即懸帆之竿あり
○椴材、爾雅釋木に椴無疵、邢炳疏に椴木無疵病、因名あり椴章に似たる木なり云
○不沒即危、類史沒を波に作る
○不諧、原本諧を譜に作る類史に據て改む

廣虫、○癸卯、越前國坂井郡公田二町、荒田八十四町賜諱、淨和太○戊申、山城國葛野郡公田二町賜從三位和氣朝臣清麻呂、○己酉、遊獵于栗前野、○乙卯、山城國人正六位下御犬連廣額等賜姓御坂連、○冬十月己未、正六位上御長真人廣岳等歸自渤海國、其王啓曰、嵩璘啓、差使奔波、貴申情禮、佇承休眷、瞻望徒勞、天皇頓降敦私、貺之使命、佳問盈耳、珍奇溢目、俯仰自欣、伏增懽悅、其定琳等、不料邊虜、被陷賊場、俯垂恤存、生還本國、奉惟天造、去留同賴、嵩椴猥以寡德、幸屬時來、官承先爵、土統舊封、制命策書、冬中錫及、金印紫綬、遼外光輝、思欲修禮勝方、結交貴國、歲時朝覲、桅帆相望、而巨木椴材、土之難長、小船汎海、不沒即危、亦或引海不諧、遭罹夷害、雖慕盛化、如艱阻何、儻長尋舊好、幸許來往、則送使數不過廿、以茲爲限、式作永規、其隔年多少、任聽彼裁、裁定之使、望於來秋、許以往期、則德隣常在、事與望異、則足表不信、其所寄絹廿匹、絁廿匹、絲一百鈞、綿二百屯、依數領足、今廣岳等、使事略畢、情求迨時、便欲差人送使奉謝、新命之恩、使等辭以未奉本朝之旨、故不敢淹滯、隨意依心、謹因廻

○盛化、西本化を紀に作る
○不信、原本信を依に作る類史に據て改む
○領足、類史足を之に作る
○奉謝、原本謝を論に作る類史に據て改む
○不敢淹滯、類史敢を致に作る
○大原野、山城國乙訓郡にあり今大原野村の地
○紫野、同愛宕郡、今京都市に入る
○日野、同宇治郡今醍醐村大字なる
○今所上之啓、紀略啓を書に作る
○同日、類史周世に作る
○慕聲、考異に慕舊作慕據類史訂あり
○風區、風化の及ぶ區域を云
○悔中間之迷圖、近世表文を上らず或は上りても不遜の辭句ありしを改めたるを云
○白環西貢云々、文選丘遲與陳伯之書に當今皇帝盛明天下安樂白環西獻楛矢東來、注に善曰世本日舜時西王母獻白環及佩家語孔子曰昔武王剋商於是肅慎氏貢楛矢石

次、奉付土物、具在別狀、自知鄙薄、不勝羞愧、○辛酉、正六位上御長真人廣岳授從五位下、正六位上桑原公秋成外從五位下、並以奉使稱旨也、
○壬戌、遊獵於大原野、始置典藥寮史生四人、造酒司史生二人、○癸亥、遊獵于紫野、賜五位已上衣、○丙寅、遊獵於日野、賜五位已上衣、○戊辰、造宮職等師爲從八位官、○辛未、始置主鷹司史生二人、○壬申、先是渤海國王所上書疏、體無定例、詞多不遜、今所上之啓、首尾不失禮、誠款見乎詞、羣臣上表奉賀曰、臣神等言、臣聞大人馭時、以德爲本、明王應世、懷遠是崇、故有殷代則四海歸仁、周日則九夷順軌、伏惟天皇陛下、仰天作憲、握地成規、窮日域而慕聲、布風區而向化、誠可以孕育千帝、卷懷百王者矣、近者送渤海客使御長廣岳等廻來、伏見彼國所上啓、辭義溫恭、情禮可觀、悔中間之迷圖、復先祖之遺跡、况復緣山浮海、不顧往還之路難、克己改過、始請朝貢之年限、與夫白環西貢、楛矢東來、豈可同日而道哉、臣等幸奉周行、得逢殊慶、不任鳧藻之至、謹詣闕奉表以聞、詔曰、獻表、波見行都、然卿等乃勤之久、供奉爾依、依之水表、乃國順仕、良之止奈、毛所思

勞マシムカシあり格シヨロコビは字書に木名似蒺而赤莖似著可爲シ矢サ餘シ注ス肅慎は東に在り故に楛矢東より來るト云

○奉周行、原本奉を忝に作り西本恭に作る類史に據て改む周行は毛詩周南卷耳章に出づ大道也また周之列位ト注ス

○覺藻、後漢書杜詩傳に將帥和睦士卒覺藻、注に言其和睦歡悅如覺之戲於水藻也トあるに據り

○因幡國造淨成女卒、國字は西本に據て補ふ

○是日、紀略癸酉に作る

○登勒野、上に出づ

○野足爲下野守、同に野足舊據下文ト補ス云

○爲兼鎮守將軍、考異に舊據據公卿補任ト云

○吹部、職員令鼓吹司に吹部卅人トあり

○大寶降、大寶の下恐くは以字を脱す

○角吹、三代格延曆十九年十月九日太政官符に今有吹角長上三人ト云々トあり角は大小角を云

○勸籍、民部省の戶籍を勸檢するを云位子雜色諸衛の輩は徭役を除くべき

行之シムカシ嘉備悅備御坐止詔ト天皇詔旨ヲ衆聞食宣ヲ正四位上因幡國造淨成女卒、淨成女、元因幡國高草郡之采女也、天皇特加寵愛、終至顯位

○癸酉、志摩國飢、遣使賑給、是日遊獵于登勒野、○甲申、從五位上橘朝臣安麻呂爲少納言、正五位上大原真人美氣爲諸陵頭、外從五位下尾張宿禰弓張爲主油正、外從五位下桑原公秋成爲大和介、正五位下巨勢朝臣野足爲下野守、從五位下多治比宿禰眞淨爲肥後介、從五位下三諸朝臣綿麻呂爲近衛將監、從五位下藤原朝臣最乙麻呂爲內兵庫正、近衛少將從四位下坂上大宿禰田村麻呂爲兼鎮守將軍、□爲軍監、定鼓吹司吹部號置員卅四人、初大寶降、或注吹人、或著角吹、或稱番上、或號吹部、名既不定、數亦無限、今定名、吹部准雅樂寮雜色生、乃聽勸籍焉、己卯、陸奧國博士醫師官位准少目、奉授陸奧國多賀神從五位下、先是請四十僧、一七日於宮中行藥師悔過、是日事畢焉、○十一月戊子朔、曲宴、賜侍臣已上被、○己丑、遊獵於北野、河內國志紀郡荒田一町賜正七位下秋篠朝臣清野、陸奧國伊治城、玉造塞、相去卅五里、

に由りて勸籍して其の合不を定む故に聽勸籍は徭役を免する意なり勸籍の事は戶令及民部式に詳なり

○己卯、此條端本に甲申の上之を置き考異に己卯以下廿七字舊在甲申條下今推于支改トあり然るに三代格卷五太政官符に陸奧國博士云々を十月廿八日トし紀略に先是請冊僧云々廿一字を甲申條任官の下に置けり矢野玄道翁私記に按己卯二字當行或與昇字草體相涉而誤者歟ト云り其説の如何に拘らず職く瑞氏の説に従ひ難し故に西本に據て姑く舊のまゝとし之を改めず

○多賀神、神名式陸奥國宮城郡多賀神社是なり

○十一月、曲宴、節々の大宴にあらざる宴を云字書に有旨内苑留臣下賜宴謂之曲宴トあり

○北野、北嵯峨野なるべし山城國葛野郡にあり三禁野の一なり

○伊治城、栗原郡にあり續紀景雲元年十一月乙巳ト下ト一ト四ト頁トに見ゆ

○玉造塞、陸前國玉造郡

中間置驛、以備機急、○辛卯、陸奧國人從五位下道嶋宿禰赤龍貫于右京、○壬辰、賜故右大臣贈從一位藤原朝臣繼繩度七人、外正六位上上毛野朝臣益成、吉彌侯部弓取、巨勢部楯分、大伴部廣椅、尾張連大食、授外從五位下、以戰功也、○乙未、詔曰、周朝撫曆、肇開九府之珍、漢室膺期、爰設三官之貨、用能遷有無以均利、通夷而得宜、濟民之要須、乃益國之嘉策、然而機適時、賢哲所以成務、權輕作重、母子於是並行、頃者私鑪滋起、奸鑄紛然、施之交關、既爲輕賤、宛之貯蓄、不堪實用、卽欲禁止、卒難懲清、事須平量、以救流弊、是以更制新錢、仍增其直、文曰隆平永寶、宜以新錢一、當舊錢十、新舊兩色、兼使行用、但舊錢者、始自來歲、限以四年、然後停廢、遣伊勢、參河、相摸、近江、丹波、但馬等國婦女各二人於陸奥國、教習養□以二年、○丁酉、無位嶋野女王、百濟王孝法、百濟王惠信、和氣朝臣廣子、橘朝臣常子、紀朝臣內子、紀朝臣殿子、藤原朝臣川子、錦部連眞奴等授從五位上、無位弓削宿禰美濃人從五位下、○庚子、勅納貢之本、任於土宜、物非所出、民以爲患、今備前國、本無鑿鐵、每至貢調、

玉造郷にあり天平九年紀
(續紀上二六四頁)始見
 ○中間置驛、詳ならず
 ○九府、周代に時幣を掌る官あり大府玉府内府外府京府天府職内職金職幣なり漢書の注に見ゆ
 ○三官、史記平準書に尊令上林三官鑄あり注に三官は均輸鑄官辨銅の三令なるべし云
 ○口夷、口は華字なるべし
 ○口機、適時、口は或は合字ならむか
 ○權輕作重、重量の輕をば偽りて重しとなすを云
 ○寶用、原本用を由に作る西本に據て改む
 ○卒難懲清、原本難を誰に作る西本に據て改む
 ○降平永寶、拾芥抄に隆平永寶延曆十五年十一月八日件錢自今年至弘仁八年經三十箇年に見ゆ
 ○停廢、原本廢を廢に作る西本に據て改む
 ○教習養口口以二年、私記に疑當填蓋限二字云
 ○美濃人、西本人字なし恐くは衍
 ○納貢之本云々、此勅三代格卷八に見ゆ

常買比國、自今以後、宜停貢鐵、非絹則糸、隨便令輸、○辛丑、始用新錢、奉伊勢神宮、賀茂上下二社、松尾社、亦施七大寺及野寺、賜皇太子親王已下職事正六位已上、僧都律師等各有差、○甲辰、宴羣臣、賜帛有差、從四位上和氣朝臣廣虫授正四位上、无位藤原朝臣名子從五位上、外從五位下刀佩首廣刀自從五位下、○戊申、遊獵於日野、發相摸、武藏、上總、常陸、上野、下野、出羽、越後等國民九千人、遷置陸奥國伊治城、○己酉、令天下諸國搜捕逃亡飛驒工、若有容隱、科違勅罪、安藝國沼田郡采女佐伯直那賀女授外從五位下、○丙辰、遊獵於栗栖野、○十二月辛酉、從五位下多治比宿禰眞淨爲内匠頭、正四位下藤原朝臣雄友爲兼中衛大將、參議大藏卿如故、從四位下三嶋眞人名繼爲左衛士督、從五位下藤原朝臣清主爲内廐頭、從五位下都努朝臣筑紫麻呂爲助、外從五位下阿倍安積臣繼守授外從五位上、禁鈔帶、以支鑄錢也、○癸亥、大和國十市郡荒田一町賜左衛士督從四位下三嶋眞人名繼、○丙寅、詔曰、皇親之蔭、事具令條、而宗室之胤、枝族已衆、欲加榮班、難可周及、是以

○民以爲患、三代格以な是に作る
 ○今備前國、同に今字の下に聞字あり
 ○鑿鐵、抄調度部に鑿兼名苑云鑿(七遙反字亦作鑿久波)珍寶部に鐵說文云(他結反)久路加爾此間一訓(福利)黒金也さありまた播磨風土記袁矣天皇の詠辭に多良知志吉備鐵俠鑿持如田打手拍子等吾將爲鑿見ゆ
 ○貢鐵、三代格貢を收に作る
 ○奉伊勢神宮云々、錢貨を以て幣と爲す事の史に見えし始なり
 ○七大寺、東大興福元興大安樂師西大法隆の七寺 ○野寺、官寺に對して云り ○日野、上に出づ ○沼田郡采女、西本に郡字なし ○栗栖野、山城國宇治郡 (十二月)鈔帶、唐書柳渾傳に玉工爲帝作帶誤毀一鈔字書、考は帶具或以金或以犀爲之猶今之帶鈔版さあり ○皇親、繼嗣令に凡皇兄弟皇子皆爲親王以外並爲諸王自親王五世雖得王名不在皇親之限、選叙令に凡皇親者親王子從四位下諸王子從五位下其五世王者從五位下子降一階庶子又降一階唯別勅處分不拘此令さあり ○宗室、原本皇室に作る選叙令集解に據て改む西本に白木に作るは宗字の訛なり ○自首不調、漢書張釋之傳に爲騎郎十年不得調、師古注に調選也さあり頭髮白に至るも選に預るを得ざるを云 ○而後永以爲例、選叙令集解には以後立爲恒例に作る ○土佐國、西本佐を左に作る ○上毛野陸奥公、陸奥は本居の地によりて名く

〔延曆十六年〕束帛、字書に束五兩右以帛兩端相向卷之共成一兩一兩即一匹也五兩爲一束謂之束帛さあり

進仕無階、白首不調、眷言於此、實合矜恕、宜其四世五世王、及五世王嫡子年滿廿一者叙正六位上、但庶子者降一階叙、自今而後、永以爲例、○辛未、巡幸京中、便御三品朝原内親王第、賜五位以上物、○戊寅、流出雲臣家繼於土佐國、家繼與叔父乙上不協、謀相傷、事覺及罪、乙上任佐渡權目、不預釐務、唯給公廨而已、○辛巳、少僧都行賀爲大僧都、○丙戌、勅免流人氷上川繼課役、陸奥國人外少初位下吉彌候部善麻呂等十二人、賜姓上毛野陸奥公、

十六年春正月戊子朔、皇帝御大極殿受朝賀、大宰府獻白雀、宴侍臣已上於前殿、賜被、○甲午、宴五位已上、賜束帛有差、從五位上篠嶋王授正五位下、正六位上坂本王、安曇王從五位下、從四位下百濟王玄鏡、藤原

○正五位下從五位下藤原朝臣、此十二字考異に舊脱據下文補さあり

○永繼、考異に云繼舊脱據下文補さ

○巨部雄、原本巨を臣に作る西本及類史に據て改む下同じ

○嵩山忌寸、西本嵩を高に作る
○大伴白河連、大伴氏の同祖にて白河は其本居の地白河郡に據れる名なり
○日理郡、原本日を巨に作る西本に據て改む西本日を日に作るは訛なり
○大伴日理連、大伴氏の同祖にて日理は其本居の地に據れる名なり
○大伴行方連、同上

朝臣乙叡、多治比真人海從四位上、正五位下紀朝臣作良、羽栗臣翼、橘朝臣綿裳、正五位上、從五位上阿保朝臣人上、藤原朝臣大繼、紀朝臣□
□正五位下、從五位下藤原朝臣仲成、藤原朝臣今川、蜷淵真人岡田、和朝臣入鹿麻呂、從五位上、外從五位上麻田連真淨、伊勢朝臣諸人、正六位上多治比真人道作、淡海真人福良麻呂、多治比真人今麻呂、大原真人眞福、藤原朝臣星雄、大中臣朝臣諸人、紀朝臣永繼、粟田朝臣入鹿、大野朝臣犬養、安倍朝臣家守、大伴宿禰大關、平群朝臣廣道、田口朝臣息繼、百濟王聰哲、佐伯宿禰鷹成、石川朝臣道益、和朝臣建男、安倍小殿朝臣野守、中臣丸朝臣豐國、從五位下、正六位上錦部連春人、民忌寸廣成、山口忌寸諸上、林宿禰沙婆、中科宿禰巨都雄、外從五位下、○戊戌、正六位上槻本公奈豆麻呂、嵩山忌寸道光、授外從五位下、○庚子、陸奧國白川郡人外□八位□大伴部足猪等賜、大伴白河連、日理郡人五百木部黑人大伴日理連、黑河郡人外少初位上大伴部眞守、行方郡人外少初位上大伴部兄人等大伴行方連、安積郡人外少初位上丸子部古佐美、

○大伴安積連、同上
○大伴山田連、同上、山田は郡名にも郷名にも見えざれど遠田郡の地名なるべし

○大伴宮城連、大伴氏の同祖にて宮城は本居の地に據れるなるべし

○從四位下三嶋真人名繼云々、以下の任官は紀略之を甲午に係く

○善珠、扶桑略記に正月十六日興福寺善珠任僧正、皇太子病癒間施般若驗、仍被抽賞、去延曆四年十月皇太子早良親王將被廢時、馳使諸寺令修日業、時諸寺拒而不納、後乃到菅原寺、爰興福寺沙門善珠含悲出迎、灑淚禮佛、訖之後、遙契遙言前世殘業、今來成害、此生絕、勿結怨、使者還報、委曲親王憂裡、爲歡云、自披忍辱之衣、不怕逆鱗之怒、其後親王亡靈、屢惱於皇太子、善珠法師應請、乃祈謂云、親王出都言曰、厚蒙遺教、乞用少僧之言、勿致悖亂之告、即轉讀般若說、无相之理、此言未行、其病立除、因茲昇進、遂拜僧正、爲人致忠自得、其位也、元亨釋書に釋善

大田部山前、富田郡人丸子部佐美、小田郡人丸子部稻麻呂等、大伴安積連、遠田郡人外大初位上丸子部八千代、大伴山田連、磐瀨郡人□
□大伴宮城連、從四位下三嶋真人名繼爲、大和守、從五位下淡海真人眞直爲、伊勢介、從五位上高橋朝臣祖麻呂爲、駿河守、從五位下百濟王元勝爲、安房守、從五位下大野朝臣犬養爲、上總介、大外記外從五位下中科宿禰巨都雄爲、兼常陸少掾、從五位下大神朝臣仲江麻呂爲、美濃介、從五位下百濟王聰哲爲、出羽守、從五位下大枝朝臣眞仲爲、能登守、從五位下石川朝臣道益爲、但馬介、從五位下安倍朝臣家守爲、伯耆介、從五位下紀朝臣眞賀茂爲、石見守、從五位下石川朝臣嗣人爲、備後守、外從五位下山口忌寸諸上爲、介、從五位下巨勢朝臣訓備爲、安藝守、外從五位下林宿禰沙婆爲、介、從五位下多治比真人今麻呂爲、肥後介、○辛丑、傳燈大法師位善珠爲、僧正、傳燈大法師位等定爲、大僧都、傳燈大法師位施曉爲、少僧都、○壬寅、長岡京地一町賜、從四位下菅野朝臣眞道、○癸卯、宴五位以上賜祿、○甲辰、觀射於朝堂院、○丙午、遊獵於水

珠姓安部氏或曰太皇后藤宮子之藥子也延曆十六年正月侍皇太子病其年四月化歲七十五あり○等定、大和東大寺の別當、東大寺別當次第本朝高僧傳に傳あり
○施曉、近江梵釋寺の僧、本朝高僧傳に見ゆ
○水生野、攝津志に島上郡水無瀬山類聚國史作水成在、水無瀬村上方延曆中帝屢遊獵此野
○庚戌勅、三代格前田本に載せ文に異同あり參看すべし
○阿波國驛家、兵部式所載二驛
○伊豫國、同六驛
○土佐國、同三驛
○土佐、西本土左に作る下同じ
○吾椅、兵部式五椅に（九條本傍書五を吾に）作る五は吾の省文なるべし吉田氏地名辭書に長岡郡本山上居の地なりと云
○舟川、兵部式丹治川に作るされば舟は丹の訛なるべし土佐二驛考に丹治川今作立川村屬豐永郷（長岡郡）自本山過此而入伊豫馬立是徑路也と云

生野、○丁未、巡幸京中、○己酉、大和國稻三百束施僧正善珠法師弟子僧慈厚、以事師无倦也、從五位下粟田朝臣入鹿爲中務少輔、外從五位下內藏宿禰賀茂麻呂爲主計助、○庚戌、勅參議已上左右大辨八省卿委任既高、群寮所仰、而介帶之國、遙附公文、因茲參對諸司、事不穩便、自今以後、宜停遙附焉、賑給壹伎鳴飢民、○辛亥、能登國羽咋能登二郡沒官田并野七十七町、賜尙侍從三位百濟王明信、○壬子、遊獵於大原野、是日勅山城國愛宕葛野郡人、每有死者、便葬家側、積習爲常、今接近京師、凶穢可避、宜告國郡、嚴加禁斷、若有犯違、移貫外國、○癸丑、幸近東院、宴五位已上、賜錢有差、○甲寅、廢阿波國驛家、伊豫國十一、土佐國十二、新置土佐國吾椅舟川二驛、○二月丁巳朔、巡幸京中、賜山城國相樂郡田二町六段爲贈右大臣從二位藤原朝臣百川墓地、○己未、置內廐寮史生四員、是日曲宴、賜五位已上綿有差、○辛酉、遊獵于北野、○癸亥、勅從五位上嶋野女王、百濟王孝法、百濟王惠信、和氣朝臣廣子、橘朝臣常子、紀朝臣內子、紀朝臣殿子、藤原朝臣川子、錦部連眞奴、從五位

○二月、百川墓地、山城志に相樂墓贈太政大臣正一位藤原朝臣百川淳和天皇外祖父在吐師村今稱長家とあり
○位田宜准、男給之、田令に凡位田正一位八十町云々從五位八町女減三分之一とあり
○近江口掾、口恐くは權字

○爲大尉、考異に尉蓋貳或監誤とあり

下弓削宿禰美濃人等位田、宜准、男給之、○乙丑、外從五位下內藏宿禰賀茂麻呂爲大外記、從五位下淨野宿禰最弟爲兼縫殿頭、左衛士大尉近江口掾如故、外從五位下槻本公奈豆麻呂爲內藏助、從五位下淡海眞人福良麻呂爲治部少輔、外從五位下上道朝臣廣成爲立蕃助、從五位下平群朝臣廣道爲主計助、參議從四位上藤原朝臣眞友爲兼大藏卿、右京大夫如故、從五位下中臣丸朝臣豐國爲主殿助、從五位下中朝臣淨人爲造酒正、大納言正三位勳四等紀朝臣古佐美爲兼東宮傅、式部卿如故、文章博士外從五位下賀陽朝臣豐年爲兼學士、右大辨從四位下藤原朝臣葛野麻呂爲兼春宮大夫、從四位上藤原朝臣乙叡爲越前守、左京大夫中衛大將如故、大判事從五位下藤原朝臣縵麻呂爲兼因幡守、正五位下橘朝臣入居爲播磨守、右中辨左兵衛佐如故、從五位下多治比宿禰眞淨爲讚岐介、參議正四位下藤原朝臣雄友爲大宰帥、從五位下和朝臣建男爲大尉、○己巳、先是重勅從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士菅野朝臣眞道、從五位上守左少辨兼行右

○續日本紀、釋紀に續日本紀四十卷無序從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士菅野朝臣眞道等奉勅撰あり

○三墳五典、左傳昭十二年に楚左史倚相能讀三墳五典八索九丘疏に伏犧神農黃帝之書謂之三墳少昊顓頊高辛唐虞之書謂之五典云々あり

○左言右事、漢書藝文志春秋の條に古之王者世有史官君舉必書云々左史記言右史記事事爲春秋言爲尚書云々あるに據れり

○縱微、類史縱を雖に作る

○微烈、字書に微は善也烈は美也顯也とあり

○絢縹、字書に絢は文飾也縹は帛淺黃色也古人寫本多用縹素其染成淡黃色者謂之縹素謂書卷也とあり

○炯戒、炯は原本炯に類史炳に作る炯は炯の訛れば改む字書に光也火明貌とあり炯戒は明かなる警戒を云

○照簡、原本照を昭に作る類史に據て改む

兵衛佐丹波守秋篠朝臣安人、外從五位下行大外記兼常陸少掾中科宿禰巨都雄等撰續日本紀、至是而成。上表曰、臣聞三墳五典、上代之風存焉、左言右事、中葉之迹著焉、自茲厥後、世有史官、善雖小而必書、惡縱微而无隱、咸能微烈、絢縹垂百王之龜鏡、炯戒照簡、作千祀之指南、伏惟天皇陛下、德光四乳、道契八眉、握明鏡以惣萬機、懷神珠以臨九域、遂使仁被渤海之北、貊種歸心、威振日河之東、毛狄屏息、化前代之未化、臣往帝之不臣、自非魏々盛德、孰能與於此也、既而負辰餘閑、留神國典、爰勅眞道等、銓次其事、奉揚先業、夫自寶字二年、至延曆十年、卅四年、廿卷、前年勅成奏上、但初起文武天皇元年歲次丁酉、盡寶字元年丁酉、惣六十年、所有曹案卅卷、語多米鹽、事亦疎漏、前朝詔故中納言從三位石川朝臣名足、刑部卿從四位下淡海眞人三船、刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣等、分帙修撰、以繼前紀、而因循舊案、竟无刊正、其所上者、唯廿九卷而已、寶字元年之紀、全亡不存、臣等搜故實於司存、詢前聞於舊老、綴叙殘簡、補緝缺文、雅論英猷、義關貽謀者、惣而載之、細語常事、理非書策

○千祀、祀は年也

○四乳、淮南子修務訓に文王四乳是謂大仁、論衡に夫四乳聖人證也とあり

○八眉、同く淮南子修務訓に堯眉八彩云々、尚書大傳に堯八眉とあり

○貊種、貊は北狄を云

○日河、私記に河は恐城謠と云り

○毛狄、毛ある北方の夷を云

○盛德、類史盛を威に作る

○負辰、史記主父偃傳淮南子汜論訓に出づ字書に辰は屏風天子朝諸侯時背屏風而立故とあり帝王の天下を統治するを云

○留神國典、御心を國史の事に用ひさせ給ふを云

○前年勅成奏上、廿卷中寶字より寶龜八年に至る十四卷は延曆十三年八月より延曆十年に至る六卷は聖十四年或は十五年七月までの間、繩繩去以前に上奏せり故に前年勅成奏上すと云

○但初、初は原本却に作る類史に據て改む

○曹案、考異に曹類史一本作舊とあり舊案の方

者、並從略諸、凡所刊削廿卷、并前九十五年冊卷、始自草創、迄于斷筆、七年於茲、油素惣畢、其目如別、庶飛英騰、茂與二儀、而垂風彰、善瘴惡、傳萬葉而作鑒、臣等輕以管窺、裁成國史、牽愚歷稔、伏增戰兢、謹以奉進、歸之策府、是日詔曰、天皇詔旨、良麻止勅、久菅野眞道朝臣等三人、前日本紀以來、未修繼、在留久年、乃御世御世、乃行事、乎勸、修成、氏、續日本紀冊卷進、留勞、勤、美、譽、美、奈、毛、所念行、須、故、是以、冠、位、舉、賜、治、賜、波、久、止、勅、御命、平、聞、食、止、宣、從四位下菅野朝臣眞道授正四位下、從五位上秋篠朝臣安人正五位上、外從五位下中科宿禰巨都雄從五位下、○辛未、勅、故從三位勳二等坂上大宿禰苅田麻呂、正四位上勳二等道鳴宿禰嶋足等、寶字之歲、卒遇不虞、奮不顧身、共著其効、是以叙勳之日、授二等、加賜功田廿町、並傳其子、而後特以鳴足准之大功、所賜之田、世々不絕、功既同等、賞何殊科、疇庸之典、恐有未允、宜其鳴足功田、依前年勅、同傳子之限、從五位下多治比眞人八千足爲少納言、從五位下廣庭王爲侍從兼河內守、侍從從五位下大庭王爲兼左大舍人、頭讚岐守如故、從五

是なるに似たり曹案は曹
 司にて作れる案の意か
 ○石川朝臣名足、續紀解
 説に注す
 ○淡海真人三船、同上
 ○當麻真人永嗣、同上
 ○分岐修撰、巻帙を分ち
 各分擔して修撰せるを云
 ○前紀、日本書紀を云
 ○寶字元年之紀、現存卷
 二十なり
 ○司存、論語泰伯篇に蘧
 豆之事則有司存とあり
 ○貽謀、毛詩大雅文王有
 聲篇に貽厥孫謀とある
 に據れり貽は遺傳なり後
 にのこし傳ふる意又蔡襄
 詩に貽謀と見ゆ貽貽通ず
 ○略語、略するを云諸は
 助字にて意義なし
 ○七年於茲、此に據れば
 詔を下されしは延曆十年
 なるべし然るに此事十年
 の紀に見えず
 ○油素、文選任彦昇表に
 人畜油素家懷鉛筆注
 に油素絹也とあり油は油
 煙にて墨、素は白色の生
 帛なり油素惣華は紙に書
 き畢るを云類史には細素
 に作る
 ○飛英騰茂、司馬相如賦
 に蜚英聲騰茂實とある
 に據れり

位上三諸朝臣眞屋麻呂爲右大舍人頭、内匠頭從四位下川村王爲兼
 □正從五位下藤原朝臣二起爲雅樂頭、從五位下田口朝臣息繼爲
 助、從五位下大伴宿禰大關爲主計助、從五位下田中朝臣清人爲宮内
 少輔、從五位下田中朝臣大魚爲造酒正、從五位下坂本王爲園池正、從
 五位下紀朝臣永繼爲左京亮、從五位下橘朝臣鳴田麻呂爲春宮亮、從
 五位下平群朝臣廣道爲攝津介、從五位下紀朝臣奧手麻呂爲土佐守、
 ○壬申、遊獵於登勒野、是日、停給畿内國司事力并職田、○癸酉、太政
 官史生從七位下安都宿禰笠主、式部史生賀茂縣主立長、叙位二階、中
 務史生大初位下勝繼成、民部史生大初位下別公清成、式部書生無位
 雀部豐公一階、以供奉撰日本紀所也、○甲戌、朝原内親王獻物、賜五位
 已上綿、○丙子、巡幸京中、○丁丑、參議左大辨近衛大將兼神祇伯正四
 位上大中臣朝臣諸魚卒、諸魚者、故右大臣正二位清麻呂之第四子也、
 寶龜初、授從五位下、爲衛門員外佐、八年爲眞、擢遷中衛少將、兼下野守、
 至正五位上、延曆中遷式部大輔、兼右京大夫、俄授從四位下、拜參議、兼

○彰善癉惡、尙書畢命に
 出づ注に謂明其爲善癉
 其爲惡也とあり類史癉
 を疾に作る
 ○萬葉、萬世に同じ類史
 百世に作る
 ○策府、祕府と云に同じ
 ○前日本紀、日本書紀を
 云此に日本紀とありて日
 本書紀と無きに據れば當
 時は日本紀と稱せしなる
 べし此事書紀解説を參看
 すべし
 ○治賜波久止、考異に舊
 脫據類史補とあり
 ○寶字之歲、天平寶字八
 年八月惠美押勝の亂を云
 ○加賜功田、苜田麻呂に
 功田を賜へること續紀神
 護二年二月丁未紀に見ゆ
 ○疇庸之典、疇庸通す功
 に報ゆるなり
 ○土佐守、西本佐を左に
 作る下同じ
 ○事力、大宰府及國司等
 に賜はり職分田を耕さし
 むる人を云軍防令に見ゆ
 ○撰日本紀所、續日本紀
 を編修する官衙即ち修史
 局なり
 ○大中臣朝臣諸魚卒、續
 紀寶龜七年正月丙申に始
 見叙任年月補任に詳なり
 ○乘輿忘、口は憂字な

近江守、尋授從四位上、爲神祇伯、兼近衛大將、授正四位上、卒時年五十
 五、諸魚性好琴歌、无他才能、雖在哀制、乘輿忘、貪冒財貨、營求產業、時
 議以此鄙之、○戊寅、長岡京地二町賜諱、淳和天皇○庚辰、從五位下中臣朝臣
 宅成爲雅樂助、從五位下田口朝臣息繼爲鑄錢次官、○甲申、勅、租稅之
 本、備於水旱、錢帛之財、飢而不食、今聞京職多有收錢、事須賤末貴本、一
 絕收錢、但恐民有貧富、不必蓄穀、宜聽貧乏之徒進錢、通計不得過四分
 之一、○三月、丁未戊子、先是甲斐相摸二國相爭國堺、遣使定甲斐國都留郡
 □留村東邊砥澤爲兩國堺、以西爲甲斐國地、以東爲相摸國地、○己丑、
 宴侍臣奏樂、賜祿有差、○甲午、勅、畿内國司新至任者、皆限八月卅日、依
 式給糧、今停職田、割租爲料、收租之後、須得其分、宜改舊例、限十一月卅
 日、○丁酉、正四位下菅野朝臣眞道爲左大辨、東宮學士左兵衛督伊勢
 守如故、參議正四位上石川朝臣眞守爲兼刑部卿、從五位下大伴宿禰
 大關爲春宮大進、參議刑部卿正四位下藤原朝臣内麻呂爲兼近衛大
 將、參議左京大夫從四位上藤原朝臣乙叡爲兼中衛大將、參議正四位

るべきか
○不必著穀、西本蓄上に收字あり
○三月、留村、抄に甲斐國都留郡都留郷見之夫木集にも都留の里見ゆれば口は都字なるべし新篇武藏風土記には鹿留なりとすれど恐くは非ならむ○砥澤、地名辭書に今の津井郡名倉村と云甲斐名勝志は今の戸澤なりとす○正四位上石川朝臣、考異に上舊作下據上文訂○左京大夫、同に左舊作右據上文訂
○勝處、大和元興寺の僧本朝高僧傳に傳あり
○如實、唐人なり元亨釋書卷十三に傳見ゆ
○大田親王、桓武天皇々女、母は百濟教仁、大同三年二月薨
○安坂、信濃國筑摩郡(今東筑摩郡)の地名今坂井村と改む
○並槻忌寸、錄に見えず
○刀西、詳ならず
○安野造、錄に見えず
○貞嗣、考異に嗣舊脱據下文補とあり西本眞の一字に作る
○延久六年云々、西本亦同じ

位下和朝臣家麻呂爲兼衛門督傳燈大法師位勝處如實並爲律師、長岡京地五町賜從四位下多治比真人邑刀自同京地一町賜大田親王、○癸卯、信濃國人外從八位下前部綱麻呂賜姓安坂、令遠江、駿河、信濃、出雲等國進、雇夫二万册人、以供造宮役、○丙午、遊獵於北野、宴飲奏樂、賜四位已上衣、正六位上並槻忌寸荻麻呂授外從五位下、右京人正七位上刀西他麻呂等賜姓安野造、○癸丑、甲斐、下總兩國飢、遣使賑給、從四位下多治比真人繼兄爲中務大輔、從五位下坂本王爲雅樂頭、從五位上笠朝臣江人爲民部大輔、信濃守如故、從五位下藤原朝臣貞嗣爲少輔、外從五位下葛井宿禰松足爲主計助、從五位下紀朝臣千世爲刑部少輔、外從五位下並槻忌寸荻麻呂爲園池正、從四位下紀朝臣勝長爲右京大夫、左衛士督造東大寺長官美作守如故、從四位下百濟王英孫爲右兵衛督、○乙卯、武藏、土佐所飢、遣使賑給之、
日本後紀卷第五
延久六年六月廿七日未時比校了
(三條西家本典書) 大永四年九月十九日以中書王御本書寫之

日本後紀卷第八

起延曆十八年正月盡十二月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉 勅撰

皇統彌照天皇 桓武天皇

十八年春正月丙午朔、皇帝御大極殿受朝、文武官九品以上蕃客等各陪位、減四拜爲再拜、不拍手、以有渤海國使也、諸衛人等並舉賀聲、禮訖、宴侍臣於前殿、賜被、○壬子、豐樂院未成功、大極殿前龍尾道上擣作借殿、葺以彩帛、天皇臨御、蕃客仰望、以爲壯麗、命五位已上宴樂、渤海國使大昌泰等預焉、資祿有差、○甲寅、賜五位已上新錢、三位三千文、四位二千文、五位一千文、○丁巳、從五位下多治比真人豐繼、石上朝臣眞家授從五位上、正六位上川邊朝臣宅從五位下、正六位上鷹高朝臣笠繼、正七位上谷忌寸家刀自、正七位下次田連宅足、從七位上山田連乙、從八位下高安連眞笠外從五位下、○戊午、勅冒蔭之徒、若能自首、宜從改

○桓武天皇、西本此四字なし
【延曆十八年】減四拜爲再拜、四拜は所謂兩段再拜にて我國の古禮なり彼國之風儀を異にするを以て再拜の禮を用ひしなり拍手は儀式大嘗祭辰日の條に獻物拍手四段段別八度所謂八開手也とあり八開手を拍つを云唐には拍手の禮を行はざるを以て之を止めしなり
○龍尾道、大極殿の前庭なり龍尾壇とも云
○資祿、類史資を賜に作る
○鷹高朝臣、原本鷹を鷹に作る西本に據て改む
○山田連乙、狩谷氏の説に類史九十九云大同三年正月丁未正六位上山田連弟分授外從五位下疑當是人と云

○冒蔭之徒、他の蔭を冒して出身するを冒蔭と云即ち外家の蔭を冒し孫にして子と稱し僧の子にして人の蔭を冒すが如きなりまた假蔭とも偽蔭とも云

○把笏之色、笏を把ること聽されたる人を云

○先經駟策、駟策は鞭打ちて馬を走らするなり冒蔭の徒既に任官し發覺するまでに官の爲に使役せられて相當に勞苦したるを云八月丁酉の條を參考すべし

○葵措衣、天武紀朱鳥元年正月紀に出づ藤原朝臣を以て擯りたる衣なり藤原朝臣赤楊と云

○紀朝臣作良卒、續紀寶龜九年正月紀に始て見ゆ

○乙丑、清麻呂傳には十九日とす

○和氣朝臣廣虫卒、續紀神護元年正月紀に始見

○今上思勞舊云々、天長二年の事なり下文并に清麻呂傳を參考すべし

○玳瑁帶、帶は衣服令朝服の中に金銀裝腰帶とある是なり倭名抄に今按革帶以其所附金玉石角等爲名故有白玉帶紀伊石

正、把笏之色、先經駟策、宜特寬恕、官位如舊、長岡京地一町賜、從五位下藤原朝臣奈良子、○辛酉、御大極殿、宴群臣並渤海客、奏樂、賜蕃客以上秦措衣、並列庭踏歌、大學頭從四位下紀朝臣作良卒、少遊、大學、頗覽經史、起家爲少判事、遷式部大丞、寶龜九年授從五位下、延曆四年叙從五位上、歷上野丹波二國守、除大學頭、後授從四位下、爲人質直、無所容舍、更有小過、必糺以法、以此爲下所惡、尤勤公政、晨出昏入、老而無倦、○癸亥、於朝堂院觀射、五位已上射畢、次蕃客射焉、正五位上紀朝臣兄原授從四位下、○乙丑、典侍正四位上和氣朝臣廣虫卒、從三位行民部卿兼攝津大夫清麻呂姊也、少而出家爲尼、供奉高野天皇、爲人貞順、節操無虧、事見清麻呂語中、皇統彌照天皇甚信重焉、今上思勞舊、追贈正三位、薨時年七十、○庚午、勅玳瑁帶者、先聽三位已上著用、自今以後、五位得同著、○癸酉、散位從四位上安倍朝臣東人卒、○甲戌、外從五位下桑原公秋成爲主計助、外從五位下葛井宿禰松足爲大和介、從五位下內真人他田爲伊賀守、近衛將監從五位下三諸朝臣綿麻呂爲兼近江大掾、

帶等之名、と云るが如く全體は革にて作り裝飾するものに據て種々の名を付たるにて玳瑁帶は玳瑁にて飾れるを云

○安倍朝臣東人卒、續紀寶字八年十月庚午紀始見

○中務宮内大藏刑部の大輔豐後守刑部卿等を歴任す

○內真人、詳ならず

○內匠頭、考異に內匠二字舊脱據上文補あり

○川村王、考異に村舊脱據上文補あり見ゆ

○法琬、西本琬を流に作る恐くは非

○清根忌寸、阿直史同氏なるべし阿直史に清根宿禰の姓を賜ふ事仁明紀承和元年九月壬申條に見ゆ

○羈旅、羈は羈の俗字

○二月乙亥朔、考異に朔舊脱據上文補あり

○從五位下三原朝臣、西本下三の二字なし考異に下舊脱據上文補あり

從五位下甘南備真人國成爲若狹守、從五位上石淵王爲越中守、外從五位下村國連息繼爲介、從五位上藤原朝臣仲成爲越後守、內匠頭從四位上川村王爲兼丹波守、從五位下藤原朝臣眞野麻呂爲周防守、外從五位下槻本公奈豆麻呂爲長門守、從五位上淺井王爲伊豫守、從四位下藤原朝臣葛野麻呂爲大宰大貳、從五位下石川朝臣清直爲少貳、從五位下藤原朝臣河主爲豐前守、唐人大學權大屬正六位上李法琬、大炊權大屬正六位上清川忌寸斯麻呂、造兵權大令史正六位上榮山忌寸千嶋、官奴令史正六位上榮山忌寸諸依、鼓吹權大令史正六位上清根忌寸松山等給月俸、愍其羈旅也、○二月乙亥朔、無位安賀女王授從五位下、○丙子、從八位下佐味朝臣枚女授從五位下、○庚辰、從五位上藤原朝臣繼彥爲左少辨、從五位下石川朝臣魚麻呂爲右少辨、從五位下三原朝臣弟平爲內藏助、○辛巳、諱嵯峨天皇於殿上冠、賜五位已上衣被、從五位下清野宿禰寂弟授從五位上、從三位百濟王明信正三位、正五位上三嶋宿禰廣宅從四位下、從五位下高倉朝臣殿嗣爲主計

○出舉私稻云々、凶年食乏しきを以て特に私稻を出舉することを聽されしなり

○謝崇道天皇靈、諸陵式に八嶋陵崇道天皇在、大和國添上郡、さあり紀略延曆四年九月庚申條に皇太子(早良親王)不_二自飲食積_一十餘日、遣_二宮内卿石川恒守等駕_一船移送淡路比_二至高瀬橋頭_一已絶載屍至淡路葬云々あり淡路に葬り奉りしを崇あるによりて此に幣帛を奉りて鎮謝し翌十九年七月崇道天皇さ追稱し勅使を遣して祭らしめ又親王の骨を大和八嶋寺に納め奉り陵を作りて崇め奉らる八嶋陵是なり

○假蔭入色、假蔭は冒蔭と同じ他の蔭を冒すなり入色は官職に就くを云

○從四位下多治比真人、從四位下四字西本になし考異に從四位下四字舊脱據上下文補さあり

○正五位上秋篠朝臣、考異に上舊作下據下文訂さあり

○從四位下紀朝臣勝長、西本下を上に作るは非、補任に十九年正月丙午從

頭、○壬午、行幸交野、○己丑、勅、出舉私稻、先已禁制、如或違犯、即有嚴科、而去年不稔、百姓乏食、諸國出舉、定難、周贍、因時弛張、古今通典、宜寬前制、暫任民情、其收息利、率十收三、如過此限、罪亦如前、遣從五位上行兵部大輔兼中衛少將春宮亮大伴宿禰是成、傳燈、大法師位、泰信等於淡路國、令資幣帛、謝崇道天皇靈、○癸巳、主菓餅從七位下穴人朝臣宮人假蔭入色、改正還本、特免其罪、復本職、○甲午、正六位上石川朝臣乙名復本位從五位下、從四位下多治比真人繼兄爲神祇伯、山城守如故、中納言從三位藤原朝臣雄友爲兼中務卿、從五位下登美真人藤津爲左大舍人助、從五位下藤原朝臣岡繼爲圖書頭、從五位上橘朝臣安麻呂爲內藏頭、中納言從三位和朝臣家麻呂爲兼治部卿、從五位下百濟王鏡仁爲少輔、正五位下文室真人波多麻呂爲雅樂頭、從四位下粟田朝臣鷹守爲大藏卿、外從五位下嵩山忌寸道光爲大炊權助、從五位上小倉王爲典藥頭、正五位上秋篠朝臣安人爲中衛少將、左中辨丹波守如故、從五位下菅原朝臣門守爲隼人正、從四位下百濟王英孫爲右衛

四位上さあり

○磐梨別公、神護景雲三年六月壬戌紀に備前國藤野郡人別部、忍海部、財部、同邑久郡人別部、同御野郡人物部等六十四人に石生別公を賜る事見ゆ

○藤野和氣真人、原本野を原に作る類史紀略清麻呂傳及續紀天平神護元年三月甲辰紀に據て改む

○匪躬之節、清麻呂傳匪躬の上に有字あり

○笄年、禮記内則に女子十有五年而笄さあり

○葛木宿禰戶主、廣虫傳に葛井宿禰とす

○隨出家、紀略此上に廣虫の二字あり

○位祿、西本此二字なし

○太保、原本大保に作る今續紀の例に據て改む

○忍勝、續紀押勝に作る

○流徒、流罪及徒罪なり

○同名養子賜葛木首、續紀に天平勝寶八歲十二月乙未先是有恩勅、收_二集京中孤兒_一而給_二衣糧養之_一至_二是男九人女一人成人_一因賜_二葛木連姓_一編附紫微少忠從五位上葛木連戶主之戶_一以成_二親子之道_一さあり

○號曰法王、神護二年十

士督攝津守如故、從四位下紀朝臣勝長爲左兵衛督、近江守如故、從四位下紀朝臣兄原爲右兵衛督、肥後守如故、從五位下安倍朝臣小笠爲佐、○乙未、流陸奥國新田郡百姓弓削部虎麻呂妻丈部小廣刀自女等於日向國、久住賊地、能習夷語、屢以謾語騷動夷俘心也、美濃備中二國飢、遣使賑給、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、本姓磐梨別公、右京人也、後改姓藤野和氣真人、清麻呂爲人高直、匪躬之節、與姊廣虫共事高野天皇、並蒙愛信、任右兵衛少尉、神護初授從五位下、遷近衛將監、特賜封五十戶、姊廣虫及笄年、許嫁從五位下葛木宿禰戶主、既而天皇落飭、隨出家爲御弟子、法名法均、授進守大夫尼位、委以腹心、賜四位封并位祿、位田寶字八年、太保惠美忍勝叛逆、伏誅、連及當斬者三百七十五人、法均切諫、天皇納之、減死刑以處流徒、亂止之後、民苦飢疫、弄子草間、遣人收養得八十三兒、同名養子、賜葛木首、此時僧道鏡得幸於天皇、出入警蹕、一擬乘輿、號曰法王、大宰主神習宜阿蘇麻呂媚事道鏡、矯八幡神教言、令道鏡卽帝位、天下太平、

月紀に見ゆ
 ○情喜、續紀神護景雲三年九月己丑條深喜に作る
 ○爲奏事請尼法均、類史請を情下の二字に作る
 ○路真人豐永、續紀延曆十年正月戊辰正六位上路真人豐永授從五位下二月甲辰爲左京亮見ゆ
 ○伯夷、史記伯夷傳に武王伐紂伯夷叔齊叩馬而諫曰云々武王已平殷亂天下宗周而伯夷叔齊恥之義不食周粟隱於首陽山采薇而食之遂餓死於首陽山とあり
 ○致命之志、君國の爲に身を捧ぐる志なり
 ○神託宣云々、西本神字なし
 ○色如滿月、清麻呂傳に色を也に作り如の上相字あり相は形相なり
 ○消魂、考異に消舊作情據傳訂とあり紀略亦情に作る
 ○爲因幡員外介云々、景雲三年九月己丑紀に見ゆ
 ○未即行、紀略及清麻呂傳行下に刑字あり
 ○賜姓和氣朝臣、寶龜五年九月甲子紀に見ゆ
 ○典藏、後宮職員令に尙藏一人掌神懸關契供御

道鏡聞之、情喜自負、天皇召清麻呂於牀下曰、夢有人來、稱八幡神使云、爲奏事請尼法均、朕答曰、法均軟弱、難堪遠路、其代遣清麻呂、汝宜早參聽神之教、道鏡復喚清麻呂、募以大臣之位、先是路真人豐永爲道鏡之師、語清麻呂云、道鏡若登天位、吾以何面目可爲其臣、吾與二三子共爲今日之伯夷耳、清麻呂深然其言、常懷致命之志、往詣神宮、神託宣云々、清麻呂祈曰、今大神所教、是國家之大事也、託宣難信、願示神異、神即忽然現形、其長三丈許、色如滿月、清麻呂消魂失度、不能仰見、於是神託宣我國家君臣分定、而道鏡悖逆無道、輒望神器、是以神靈震怒、不聽其祈、汝歸如吾言、奏之、天之日嗣必續皇緒、汝勿懼道鏡之怨、吾必相濟、清麻呂歸來、奏如神教、天皇不忍誅、爲因幡員外介、尋改姓名爲別部穢麻呂、流于大隅國、尼法均還俗、爲別部狹虫、流于備後國、道鏡又追將殺清麻呂於道、雷雨晦暝、未即行、俄而勅使來、僅得免、于時參議右大辨藤原朝臣百川愍其忠烈、便割備後國封鄉廿戶、送充於配處、寶龜元年、聖帝踐祚、有勅入京、賜姓和氣朝臣、復本位名、姊廣虫又掌吐納、叙從四位下、

衣服云々珍寶綵帛賞賜之事典藏二人掌同尙藏とあり
 ○友于天至、友于は論語爲政篇及尙書君陳篇に惟孝友于兄弟とあるに據り天至は天性と云に同じ
 ○孔懷之義、毛詩小雅常棣章に兄弟孔懷とあるに據り
 ○十七年正月云々、廣虫卒去の事上文十八年正月乙丑條に見ゆ此に正月十九日とあるは合はず
 ○諸七、初七日より七々に至までの忌日を云
 ○禮儀、佛を禮拜して懺悔するを云
 ○天長二年云々、清麻呂傳には天應二年として上文延曆十七年正月云々の前に擧げ贈正三位之告身の贈を賜に作る
 ○脚痿不能起立、水鏡に道鏡大に怒りて清丸がつかさをさりよぼろすちをたちて大隅國へ流しつかはしきとあり脚痿は之に因れり
 ○栢田村、八幡宮本紀に今栢田村と云所なし和氣村と云あり栢田村を後に改めけるにやと云

任典藏累至正四位下、帝從容勅曰、諸侍從臣、毀譽紛紜、未嘗聞法均語他過、友于天至、姊弟同財、孔懷之義、見稱當時、延曆十七年正月十九日薨、與弟卿約期云、諸七及服闋之日、勿勞追福、唯與二三行者、坐靜室、事禮懺耳、後世子孫仰吾二人、以爲法則、天長二年、天皇追思舊績、贈正三位之告身、弟清麻呂脚痿不能起立、爲拜八幡神、與病即路、及至豐前國宇佐郡栢田村、有野猪三百許、挾路而列、徐步前驅十許里、走入山中、見人共異之、拜社之日、始得起步、神託宣賜神封綿八萬餘屯、即頒給宮司以下國中百姓、始駕輿而往、後馳馬而還、累路見人、莫不歎異、清麻呂之先、出自垂仁天皇、天子鐸石別命、三世孫弟彥王、從神功皇后征新羅、凱旋、明年忍熊別皇子有逆謀、皇后遣弟彥王、於針間吉備堺山誅之、以從軍功、封藤原縣、因家焉、今分爲美作備前兩國也、高祖父佐波良、曾祖父波伎豆、祖宿奈、父乎麻呂墳墓、在本郷者、拱樹成林、清麻呂被竄之日、爲人所伐、除、歸來上疏陳狀、詔以佐波良等四人并清麻呂爲美作備前兩國、造天應元年、授從四位下、拜民部大輔、爲攝津大夫、累遷中宮大夫、

○賜神封綿、清麻呂傳に神封の二字を神劍雄一雙并の七字に作る
 ○馳馬、清麻呂傳馳を騎に作る
 ○藤原縣、後の和氣郡なり神龜三年十一月備前國藤原郡を改めて藤野郡とし景雲三年六月更に改めて和氣郡とす
 ○波伎豆、清麻呂傳伎波豆に作る
 ○乎麻呂、同に乎を平に作る
 ○被竄、原本被を投に作る清麻呂傳に據て改む
 ○民部省例、本朝書籍目錄に民部省例廿卷民部卿和氣清麻呂撰と見ゆ
 ○中宮、高野新笠姫なるべし
 ○和氏譜、和氏即ち高野朝臣の家譜なるべし桓武天皇の御外祖父和系譜を撰りて其家系を明かにせし故に帝甚だ善み給ひしなり一説には和氣氏の系譜とす類史に據れるものなれど恐くは非なり
 ○葛野地、即今の平安京の地なり上都は平安京を云
 ○河内川、攝津志に住吉郡今川舊名河内川自河

民部卿授從三位延曆十七年上表請骸骨優詔不許仍賜功田廿町以傳其子孫清麻呂練於庶務尤明古事撰民部省例廿卷子今傳焉奉中宮教撰和氏譜奏之帝甚善之長岡新都經十載未成功費不可勝計清麻呂潛奏令上託遊獵相葛野地更遷上都清麻呂爲攝津大夫鑿河內川直通西海擬除水害所費巨多功遂不成私墾田一百町在備前國永爲振給田鄉民惠之薨時贈正三位年六十七有六男三女長子廣世起家補文章生延曆四年坐事被禁錮特降恩詔除少判事俄授從五位下爲式部少輔便爲大學別當墾田廿町入寮爲勸學料請裁闡明經四科之第又大學會諸儒講論陰陽書新撰藥經大素等大學南邊以私宅置弘文院藏內外經書數千卷墾田卅町永充學料以終父志焉○辛丑遊獵於栗前野○壬寅大和國飢遣使賑給○三月乙巳朔震民部省廩○丙午近江紀伊二國飢遣使賑給○戊申陸奧國柴田郡人外少初位下大伴部人根等賜姓大伴柴田臣○庚戌近江國淺井郡人從七位下穴太村主眞杖賜姓志賀忌寸○辛亥陸奧國富田郡併色麻郡讚馬郡併

州丹北郡流至本郡喜連西一息長川云々至東生郡舍利寺村入平野川今水道與古頗異因曰今川云々あり
 ○振給田、清麻呂傳振を賑に作る振賑通用す
 ○大素、經名なり典藥式に大素經准大經と見ゆ
 ○弘文院、拾芥抄中末に和氣氏諸生別當爲荒廢之地在勸學院北清磨卿建立之云々あり
 ○三月大伴柴田臣、大伴氏の同祖柴田郡に住めり故に柴田臣と賜ふ
 ○志賀忌寸、錄攝津諸蕃に後漢孝獻帝之後也とあり
 ○富田郡、郡廢せらるるも富田郷はあるべきに其地聞えざるは名の變更せられしなるべし
 ○色麻郡、郡郷考に今併加美郡とあり
 ○讚馬郡、栗原郡に佐沼郷あり佐沼即ち讚馬なるべし
 ○新田郡、郡郷考に或併栗原郡と或併加美郡とあり
 ○登米郡、此時小田郡に併せ後に又置けり
 ○小田郡、民部式に見ゆ

新田郡登米郡併小田郡○壬子停出羽國山夷祿不論山夷田夷簡有功者賜焉○甲寅伯耆阿波讚岐等國飢遣使賑給從五位下入間宿禰廣成爲造東大寺次官正六位上野王賜姓清瀧朝臣○丁巳正四位下行左大辨兼右衛士督皇太子學士伊勢守菅野朝臣眞道等言己等先祖葛井船津三氏墓地在河內國丹比郡野中寺以南名曰寺山子孫相守累世不侵而今樵夫成市採伐冢樹先祖幽魂永失所歸伏請依舊令禁許之○夏四月乙亥朔河內國飢遣使賑給從五位下御中眞人廣岳爲大學助攝津國人正八位上須美開德賜姓葛澤造○丁丑故正五位下上毛野朝臣稻人賤宅敷女男二人賜姓物部○癸未敕澇水經日苗稼腐損窮弊之民不得更播宜令山城河內攝津等國巡檢貧民以正稅給之攝津國人從七位上乙麻呂等給姓豐山忌寸起從五位下和氣朝臣廣世復本官○乙酉從五位上藤原朝臣繼彥爲上總介陰陽頭如故從五位上藤原朝臣繼業爲大學頭侍從信濃介如故正四位下藤原朝臣乙叡爲兵部卿中衛大將越前守如故從五位下安倍朝

後廢せられて遠田郡に併せらる
 ○山夷、田夷に對して山間に住めるを云
 ○田夷、山夷に對して云農を主とする夷なり
 ○清瀧朝臣、原本清瀧を瀧清に作るは誤なれば改む按に續後紀承和九年六月丙辰紀に忍壁親王六世孫保雄王男長宗等に清瀧真人姓を賜ふ事見ゆ
 ○野中寺、丹南郡野上村(今南河内郡埴生村大字野々上)にあり
 (四月)御中真人、續紀寶龜二年七月紀に天武天皇太子舍人親王の孫王笠王以下十人に天平寶字八年姓三長真人を賜ふことあり同氏なり
 ○大學助、原本助を頭に作る西本及下文に據て改む
 ○葛澤造、詳ならず
 ○豐山忌寸、詳ならず
 ○正四位下藤原朝臣乙叡、此上に恐くは參議の二字を脱す
 ○近衛中將、補任中を少に作る
 ○大昌泰、原本太を大に作る西本に據て改む
 ○占雲之譯、梁元帝職貢

臣家守爲刑部少輔從五位下紀朝臣千世爲彈正弼正五位下橘朝臣入居爲左京大夫右中辨右兵衛佐播磨守如故參議從四位下藤原朝臣繩主爲春宮大夫式部大輔近衛中將如故中納言從三位藤原朝臣內麻呂爲兼造宮大夫近衛大將但馬守如故○己丑賑給左右京貧民是日渤海國使太昌泰等還蕃遣式部少錄正六位上滋野宿禰船白等押送賜其王璽書曰天皇敬問渤海國王使昌泰等隨賀萬至得啓具之王遜慕風化重請聘期占雲之譯交肩驟水之貢繼踵每念美志嘉尙無已故遣專使告以年期而猶嫌其遲更事覆請夫制以六載本爲路難彼如此不辭豈論遲促宜其修聘之使勿勞年限今因昌泰等還差式部省少錄正六位上滋野宿禰船白充使領送并附信物色目如別夏首正熱惟王平安略此代懷指不繁及○庚寅從五位下中臣丸朝臣豐國爲齋宮頭正六位上大伴宿禰峰麻呂爲遣新羅使正六位上林忌寸眞繼爲錄事○辛丑勅近衛府大將元從四位上官今爲從三位官又加中將一員中衛府大將元從四位上官今爲正四位上官衛門督元正五位上官

圖序に占雲望日重譯至焉とあるに據れり雲氣を占候して來るを云
 ○驟水之貢、驟は字書に走也とあり海水を航し來りて貢する意か
 ○猶嫌其遲、西本猶を期に作る
 ○彼如、此二字恐くは誤あらむ
 ○左右兵衛府、西本兵字なしされば衛下に士字を脱せるにて左右衛士府の誤か
 ○廢内藏寮、原本廢を廢に作る西本に據て改む
 ○外者之官、者は考の訛なるべし位に内外の別あり内位の人の功過を考校するを内考と云ひ外位の人の功過を考校するを外考と云郡司は外位に叙せらるる故に外考の官と云
 ○驅策、馬を鞭打ちて走らすか如くに使役せらるるを云
 (五月)綱主、西本綱を繩に作る考異に綱舊作繩據下文訂あり

今爲從四位下官佐從五位下官今爲從五位上官左右衛士兵衛等一准衛門左右兵衛府加少尉一員少志一員其官位者一准衛門府廢内藏寮主鑑四人加少屬一員減大藏省主鑑大少各一員治部省解部四員○壬寅公卿奏曰大和國守從四位下藤原朝臣園人解僂郡司之任所掌不輕而外者之官不得貽謀准於諸國亦無潤身是以擬用之日各競辭退郡務闕怠率由於此伏請居之内考將勸後輩者臣等商量夫高爵以之彰勳厚賞以之酬勞所以勸勵士庶任用得人者也而畿内諸國近接都下驅策之勞尤是殊甚准於外國不可同日如今所申穩便誠合進昇伏望五國郡司一居内考許之○五月乙巳淡路國飢遣使賑給○庚戌正六位上紀朝臣廣濱授從五位下○辛亥從五位上藤原朝臣仲成從五位上住吉朝臣綱主授正五位下正六位上粟田臣莖麻呂外從五位下○癸丑授正六位上藤原朝臣城主正六位上藤原朝臣藤嗣正六位上藤原朝臣永貞正六位上藤原朝臣廣河正六位上紀朝臣咋麻呂紀朝臣

○智夫郡、抄國郡部に隱岐國知夫あり
 ○比奈麻治比賣神、神名式に隱岐國知夫郡比奈麻治比賣命神社あり同郡黒木村大字宇賀に坐す
 ○商賈之輩、考異に賈舊作量紀略作賣據類史訂あり
 ○嘉報、原本嘉を喜に作る西本及類史紀略に據て改む
 ○擅養、原本擅を擅に作る類史に據て改む
 ○六齋、雜令に凡月六齋日公私皆斷殺生、義解に謂六齋八日十四日十五日廿三日廿九日卅日あり
 ○馳駟、原本駟に作る西本に據て補ふ

○六月、左衛士志、考異に士舊作少據類史訂あり西本も亦士を少に作る

彌都麻呂、安倍朝臣象主從五位下、○丙辰、前遣渤海使外從五位下內藏宿禰賀茂麻呂等言、歸鄉之日、海中夜暗、東西掣曳、不識所著、于時遠有火光、尋逐其光、忽到嶋濱、訪之、是隱岐國智夫郡、其處無有人居、或云、比奈麻治比賣神常有靈驗、商賈之輩、漂宕海中、必揚火光、賴之得全者、不可勝數、神之祐助、良可嘉報、伏望奉預幣例、許之、○壬戌、令諸國司講師沙汰國分寺僧、○己巳、尾張國海部郡主政外從八位上刑部卿虫言、權掾阿保朝臣廣成不憚朝制、擅養鷹鷄、遂令當郡少領尾張宿禰宮守、六齋之日、獵於寺林、因奪鷹、奏進、勅、須有違犯、先言其狀、而凌慢國吏、輒奪其鷹、宜特決杖、解却其任、○庚午、勅、撫俗宣風、任屬郡司、今停譜第、妙簡才能、而宿衛之人、番上之輩、久經馳駟、頗効才能、宜不經本國、令式部省簡試焉、○辛未、遣神祇大祐正六位上大中臣朝臣弟枚、改作伊勢大神宮正殿、讚岐國飢、出穀萬二千斛賑贖乏絕戶、○壬申、停遣新羅使、○六月甲戌朔、省中衛左右衛士三府醫師一員、○丁丑、遣左衛士志矢田部常陸麻呂於平城、捕內豎雀部廣道、決杖一百、以強姦法華寺尼

○懼甚履氷懷乎御朽、陳後主改元(至德元年)大赦詔に懼甚、踐氷、懷乎、御朽、とあるに據り、御朽は、御朽に同じく尙書五子之歌に予臨兆民、懷乎若朽索之馭六馬とあるに出づ
 ○昧旦、原本旦を且に作る類史に據て改む
 ○日昃、字書に日昃昃(スグル)中也とあり、原本昃を吳に作る類史に據て改む
 ○冀宣、原本冀を冀に作る類史に據て改む
 ○舉數、原本數を數に作る類史に據て改む、舉數は稻の出舉の數なり
 ○宜停徵焉、徵焉の二字は西本及類史になし
 ○耶法、耶は邪に同じ
 ○内教、佛教を云
 ○山林精舍、西本山林の二字なし、佛寺を精舍と稱すること晉の孝武の時に起る、學林新編に晉孝武立靜舍于殿門、引沙門居之、因此俗謂佛寺曰靜舍、亦曰精舍と見ゆ
 ○朝代、代は恐くは誤字なるべし
 ○祀無報應、考異に祀舊作禮據本朝月令訂あり

也、○戊寅、詔曰、惟王經國、德政爲先、惟帝養民、嘉穀爲本、朕以寡薄、忝承洪基、懼甚履氷、懷乎御朽、昧旦丕顯、日昃聽朝、思弘政治、冀宣風化、時雍未洽、陰陽失和、去年不登、稼穡被害、眷言其弊、有憫于懷、宜敷寬恩、答彼咎祥、其被損尤甚之處、美作、備前、備後、南海道諸國、肥前、豐後等十一國、去年田租、特全免之、○癸未、勅、前停止公廩混合正稅、兼減舉數、以省民煩、然諸國稱任中之未納、徵公廩之息利、百姓受弊、艱苦實深、自今以後、宜停徵焉、如有違者、隨卽科之、○乙酉、勅、沙門擅去本寺、隱住山林、受人屬託、或行耶法、如斯之徒、往々而在、國憲內教、同所不許、宜諸國司巡檢部內所有山林精舍、并居住比丘、優婆塞、具錄言上、不得疎漏、○戊子、勅、祭祀之事、在德與敬、心不致敬、神寧享之、廣瀨龍田祭、所以鎮弭風災、禱祈年穀也、而大和國司、觸事怠慢、都無肅敬、差遣史生、祇承朝代、祀無報應、職此之由、自今以後、守介一人、齋戒祇承、若有事故、聽遣判官、○己丑、從五位下石川朝臣魚麻呂爲左少辨、從五位下百濟王鏡仁爲右少辨、中納言從三位和朝臣家麻呂爲兼中務卿、相摸守如故、正五位下大庭

○正五位下藤原朝臣大繼、考異に正舊作從據上文訂さあり

○正六位上桑田真人、正六位上の四字は西本に據て補ふ

○刑措、史記周本紀に成康之際天下安寧刑措四十餘年不用さあり、刑罰を行はすして治まるなり

王爲大輔、從五位下淡路真人福良麻呂爲少輔、侍從從四位下中臣王爲兼左大舍人頭、從五位下粟田朝臣入鹿爲治部少輔、中納言從三位藤原朝臣雄友爲兼民部卿、從五位下甘南備真人眞野觸大上天皇諱爲主稅頭、正五位下藤原朝臣大繼爲大藏大輔、下總守如故、從四位下大原真人美氣爲大膳大夫、外從五位下村國連息繼爲阿波權介、○癸巳、勅、去年不稔、百姓乏食、暫任民心、出舉私稻、一張一弛、因時垂教、宜更禁斷、罪依前格、○丙申、從五位下紀朝臣嗣梶、從五位下藤原朝臣綱主授從五位上、正六位上桑田真人甘南備從五位下、是日詔曰、朕祗纂丕業、撫臨黎元、尅己勤躬、不違寧處、思欲輯熙四海、期之刑措、弘濟百姓、致之壽域、而近巡京中、過堀川處、鉗鑣囚徒、暴體苦作、興言於茲、愀然于懷、雖生民之愚、自招罪惡、而爲彼父母、寧不哀愍、其在役見徒、及天下見禁囚等、罪無輕重、並宜赦除、令得自新、但私鑄錢、謀殺故殺、及被問民苦使推訪、諸國郡官吏百姓等、不在赦限、其謀殺故殺配役者、停役配流、普告遐邇、令知朕意、○戊戌、越中國飢、遣使賑給、○己亥、免山城國乙訓、葛野

○七月、大伴宿禰助等、助字は西本及類史に據て補ふ

○齋宮新嘗會、齋宮式に野宮及伊勢齋宮に於ける供新嘗料見ゆ

○九月祭、神嘗祭を云

○甲戌、西本戊申に作る此月壬申朔なれば戊申なきは倒置

愛宕三郡負租、○庚子、屈僧三百人沙彌五十人於禁中及東宮朝堂、奉讀大般若經、○秋七月癸卯朔、攝津國人正七位上大伴宿禰助等貫于右京、○己酉、停伊勢齋宮新嘗會、但以歌舞伎供九月祭、○己未、置判事史生四員、掃部司史生二員、丹後國飢、遣使賑給、○乙丑、越中國飢、遣使賑給、免備中國去年租、以風旱爲災、五穀不登也、是日曲宴、賜四位已上衣、○庚午、停大和國宇陀肥伊牧、以接民居損田園也、遣使被畿內七道諸國、以齋內親王將入伊勢也、是月有一人乘小船、漂著參河國、以布覆背、有犢鼻、不著袴、左肩著紺布、形似袈裟、年可廿、身長五尺五分、耳長三寸餘、言語不通、不知何國人、大唐人等見之、僉曰、崑崙人、後頗習中國語、自謂天竺人、常彈一弦琴、歌聲哀楚、閱其資物、有如草實者、謂之綿種、依其願、令住川原寺、即賣隨身物、立屋西墀外路邊、令窮人休息焉、後遷住近江國々分寺、○八月癸酉、長岡京地一町賜民部少輔從五位下菅野朝臣池成、○甲戌、從五位下登美真人藤津爲少納言、○丙子、常陸國言、鹿嶋那加、久慈、多珂四郡、今月十一日、自晨至晚、海潮去來凡十

○埴川、高野川の古名なり又松崎川と云靈所七瀬の一、山城志愛宕郡に見ゆ
 ○幸大堰、紀略幸の下に于字あり大堰川は又大井川に作る一名葛野川又桂川と云
 ○酒井勝、系詳ならず
 ○隱伎國、原本伎を岐に作る西本に據て改む
 ○幸北野、紀略幸の下に于字あり

○九月、齊内親王發野宮、野宮は葛野郡嵯峨天龍寺の北にあり凡そ齋宮は定め畢て宮城内の初齋院に入り明年七月まで此院にて齋し八月野宮に入り明年八月まで齋し九月上旬伊勢齋宮に參入せらるなり

五度滿則過常涯一町許、澗則踰常限廿餘町、海畔父老僉云、古來所未見聞也。○戊寅、巡幸京中。○己卯、禊於埴川。○癸未、幸大堰。○丙戌、遣使於畿内諸國以按田。豐前國宇佐郡人酒井勝小常依有惡行、配隱伎國。○己丑、幸北野。○癸巳、伊豫國人從七位下越知直祖繼貫于左京、是日遊獵於栗前野。○丙申、奉幣帛於伊勢大神宮、以齋内親王將入齋宮也。○丁酉、勅擇才擢用、不必資蔭、今衛府舍人及衛門々部、偽蔭之侶、其數資多、而緣許還本、事乖弘恕、宜特寬宥、任用如舊、至于昭穆、據實改正、其詐蔭未經叙位、任後依選得叙者、矜彼勞効、勿追位記、但先後資蔭得叙、或更歷選加階者、宜計蔭叙之階、追後加之階、是日遊獵於水生野。
 ○九月癸卯、從五位下百濟王貞孫授從五位上。○甲辰、齋内親王發野宮、赴伊勢、遣侍從々四位下中臣王參議正四位下藤原朝臣乙叡等送焉。○戊申、暴風、京中屋舍倒壞者多。○辛亥、從四位下藤原朝臣園人為右大辨、大和守如故、東宮傳從三位大伴宿禰弟麻呂為兼治部卿、正五位下藤原朝臣仲成為大輔兼山城守、正五位下阿倍朝臣弟當為兵部

○從五位下和氣朝臣、考異に下舊作上據上下文訂あり
 ○阿智驛、兵部式に信濃國驛馬阿知世正あり信濃地名考に阿智驛已廢其地未詳唯阿智川の名ありと云
 ○小神舊牧、近江國栗太郡上田上村大字牧なりと云山槐記に岡見牧とあり牧村の山を小神山といへば此なるべし
 ○滋野宿禰船代、上文及類史代を白に作る
 ○准數、類史依數に作る
 ○求縮程期、西本此下約四字腐蝕す
 ○篋篋、毛詩小雅鹿鳴章の詩序に實幣帛篋篋以將其厚意云々とあり字書に竹器方曰篋圓曰篋篋は説文に飯器篇海に盛物竹器也と見え篋は如答者あり
 ○攸行、類史攸を所に作る
 ○允依、字書に允は信也相從也依は據也附也倚也とあり倚り從ふ意
 ○惣華、逸史所引の類史に華を萃に作る
 ○班霽燮理云々、班は位也次也燮理は尙書周官に

大輔、正四位下百濟王玄鏡為刑部卿、從五位下菅原朝臣門守為主殿助、從五位下石川朝臣道成爲左京亮、神祇伯從四位下多治比真人繼兄爲兼右京大夫、從五位上百濟王教德爲上總守、從五位下都努朝臣筑紫麻呂爲介、近衛少將從五位上大伴宿禰是成爲兼下野守、從五位下百濟王教俊爲介、式部少輔從五位下和氣朝臣廣世爲兼阿波守、外從五位下村國連息繼爲介。○甲寅、信濃國伊那郡阿智驛々子、永免調庸、以道路險難也。○丁巳、近江國小神舊牧賜諱、嵯峨太上天皇 ○辛酉、正六位上式部少錄滋野宿禰船代等到、自渤海國々王啓曰、嵩璘啓、使船代等至、枉辱休問、兼信物絁絹各卅匹、絲二百絢、綿三百屯、准數領足、懷愧實深、嘉貺厚情、伏知稠疊、前年附啓、請許量載往還、去歲承書、遂以半紀爲限、嵩璘情勤、馳係、求縮程期、天皇舍己從人、便依所請、篋篋攸行、雖無珍奇、特見允依、荷欣何極、比者天書降渙、制使莅朝、嘉命優加、寵章惣華、班霽燮理、列等端揆、惟念寡菲、殊蒙庇蔭、其使昌泰等、才慙專對、將命非能、而承貺優容、倍增喜慰、而今秋暉欲暮、序雜涼風、遠客思歸、情勞望日、崇

立太師太傅太保一茲惟三公論道經邦燮理陰陽之あるに據り
 ○端揆、通鑑綱目集覽に僕射參總百揆故曰端揆あり宰相を云
 ○殊蒙庇蔭、類史蔭を庇に作る陸運通用し庇護を被る意
 ○期限、類史期を駟に作る
 ○陶野、山城志に在嵯峨清涼寺東南一居民姓深草者以造土盤爲業あり
 ○的野、同じく嵯峨に近き所
 ○北辰燈、北斗星に燈明を奉るなり公事根源に延曆十五年三月に始て北辰をまつらるあり
 ○十月、交野、河内國交野郡にあり三禁野の一
 ○西野、大原野なるべし
 ○泣辜解網、泣辜は夏の禹王罪人に會ひて己が不徳を泣きし故事、解網は殷の湯王網の三面を解きて生物を憐みし故事に據り何れも續紀に注す舊唐書樂章に恒思解網每軫泣辜あり
 ○宥過刑故、尙書大禹謨に宥過無大刑故無小

迨時節、无滯廻帆、既許隨心、正宜相送、未及期限、不敢同行、謹因廻使、奉附輕鈔、具如別狀、○癸亥、遊獵於陶野、賜四位以上衣、○乙丑、遊獵於野、賜五位以上衣、是月禁京畿百姓奉北辰燈、以齋內親王入伊勢齋宮也、○冬十月壬申、信濃國地百町賜左大辨正四位下菅野朝臣眞道、○己卯、遊獵于交野、○壬辰、遊獵于西野、○十一月甲辰、地震、○戊申、從五位下橘朝臣眞甥爲少納言、從五位下石川朝臣淨濱爲陰陽頭、從五位上三諸朝臣眞屋麻呂爲宮內大輔、外從五位下民忌寸廣成爲隼人正、免淡路國今年調庸、以風水爲災、百姓被害也、○己酉、曲宴、賜五位以上布有差、○辛亥、巡幸京中、○甲寅、備前國言兒嶋郡百姓等、燒鹽爲業、因備調庸、而今依格、山野濱嶋、公私共之、勢家豪民、競事妨奪、強勢之家、彌榮、貧弱之民、日弊、伏望任奪給民、勅乘勢迫貧、事乖共利、宜加禁制、莫令更然、淡路國澆、以播磨國隨近郡穀、賑給乏絕戶、○甲子、勅先遣問民苦使、採訪政迹、思明激揚、以嚴黜陟、今閱使狀、違犯者多、理須峻刑、永懲後輩、但以泣辜解網、叡哲良規、宥過刑故、古今通典、去延曆十四年簡

とあり故は故意に犯せる罪を云

○十二月、楓、葛野郡にあり
 ○佐比、同上

○丙寅歲、聖武天皇神龜三年か、其前ならば天智天皇五年なり百濟高麗唐の爲に滅されし結果歸化せしならむには天智天皇五年なるべし
 ○石川、地名なるべし
 ○詳ならず
 ○廣石野、同
 ○後部、及前部上部下部は何れも高麗の部落の名にて其本國にありし時の部落を以て假に氏せしなり卦妻も同じく内部の舊名なり
 ○天平勝寶九歲勅、續紀(卷上四一六頁)に見ゆ

差使者、擬遣巡察、慮彼自新、未遽發遣、而慢法不悛、縱慾无厭、此而可原、孰不可恕、其延曆十五年以還、有犯國司以下、宜依法斷、以懲將來、但犯佃田三町以下、及驅使兵士者、特從寬宥、其十四年以往所犯、積習已久、卒難洗濯、宜事無輕重、一從原免、○十二月癸酉、勅山城國葛野川、近在都下、每有洪水、不得徒涉、大寒之節、人馬共凍、來往之徒、公私同苦、宜楓佐比二渡、各置度子、以省民苦、○甲戌、甲斐國人止彌若虫、久信耳鷹長等一百九十人言、己等先祖、元是百濟人也、仰慕聖朝、航海投化、即天朝降綸旨、安置攝津職、後依丙寅歲正月廿七日格、更遷甲斐國、自爾以來、年序既久、伏奉去天平勝寶九歲四月四日敕、稱其高麗百濟新羅人等、遠慕聖化、來附我俗、情願□姓、悉聽許之、而已等先祖、未改蕃姓、伏請蒙改姓者、賜若虫姓石川、鷹長等姓廣石野、又信濃國人外從六位下卦妻、眞老、後部黑足、前部黑麻呂、前部佐根人、下部奈豆麻呂、前部秋足、小縣郡人无位上部豐人、下部文代、高麗家繼、高麗繼楯、前部貞麻呂、上部色布知等言、己等先高麗人也、小治田、飛鳥二朝廷時節、歸化來朝、自爾

○改大姓、狩谷氏曰大姓
 疑无姓之謔
 ○須々岐、神祇志料に須々岐水神、今筑摩郡薄町村穂屋野にあり舊址は入山家の大明神平なる須々岐の水源に在るを以て須々岐水神と云ふある須々岐の名に因れるなるべし
 ○豊岡、詳ならず
 ○村上、抄國郡部安曇更級の兩郡各村上郷あり其何れかに因れる姓なるべし
 ○篠井、更級郡篠野井の地に因れり
 ○玉川、詳ならず、清岡御井、朝治等何れも詳ならず、玉井は山梨郡玉井郷あり之に據れるか
 ○土佐國、西本佐を左に作る
 ○傳燈大法師位、原本傳を傳に作る誤れば改む
 ○側力劣則止、狩谷氏曰側下恐脱聞
 ○玄門、道教を指ていへ
 ○此は佛教を云
 ○檀林、寺院を云
 ○婆離、優婆離なり釋迦十大弟子の一人にて持律第一の比丘
 ○鶯子、又鶯鷺子に作る舍利弗の譯名なり同十大

以還、累世平民、未改本號、伏望依去天平勝寶九歲四月四日勅改大姓者、賜眞老等姓須々岐、黑足等姓豊岡、黑麻呂姓村上、秋足等姓篠井、豊人等姓玉川、文代等姓清岡、家繼等姓御井、貞麻呂姓朝治、色布知姓玉井、○丁丑、發伊賀、伊勢、尾張、近江、美濃、若狹、丹波、但馬、播磨、備前、紀伊等國役夫、以充造宮、○乙酉、遊獵于水生野、陸奥國言、俘囚吉彌侯部黑田、妻吉彌侯部田苅女、吉彌侯部都保呂、妻吉彌侯部留志女等、未改野心、往還賊地、因禁身進送、配土佐國、○庚寅、大僧都傳燈大法師位等定言、側力劣則止、著在丘典、心悞不極、光于彝倫、等定落髮玄門、棲形檀林、羞戒婆離、恥智鶯子、豈須辱帶綱任、久亂維務哉、恥方濫吹、恐同踐火、是以懸車之歲、數陳口辭、不被詔許、既經數年、當今年垂八十、步行不正、進退失儀、強以抱任、慙天愧地、庸身無盾、伏願去大僧都、以開賢路、退息耄情、兼望當糧、上崇養老之德、下免尸位之刺、不任瀝款之至、上表以聞、詔報曰、忽省□表、知辭綱任、委寄未幾、告老何早、歎慕其德、感懷无已、但退讓再三、謙光難逆、故許所請、以遂來意、其梵釋寺事者、休息之閑、時加檢校、

弟子の一人にて智慧第一の比丘
 ○綱任、綱は僧綱なり
 ○維務、綱任に同じ
 ○濫吹、韓非子内儲説上に出づ無能者の有能を粧ふを云
 ○□表、□は來字なるべし
 ○梵釋寺、續紀延曆五年正月壬子紀(下四九頁)に於て近江國滋賀郡始造梵釋寺矣とあり
 ○從五位上小倉王、考異に上舊作下據上文訂とあり
 ○大田親王、上に見ゆ
 ○私墾田、原本墾を懇に作る西本に據て改む
 ○和氣云々等八郡、民部式倭名抄亦同じ但し式抄共に三野を御野に作る
 ○譜講、狩谷氏曰譜恐誤と云るが如く譜誤なるべし誤は牒に同じ
 ○本系帳、氏族の本系を書したるものなり中臣氏延喜本系帳に夫本系者所以立祖宗分昭穆正濫吹表後生之書也とあり

時寒、想和適也、指不多云、○辛卯、從五位下安曇宿禰大丘爲□大舍人助、從五位上小倉王爲内膳正、○癸巳、巡幸京中、攝津職舊荒田五十七町賜大田親王、○丙申、從五位下小野朝臣田刀自授從五位上、○丁酉、式部少輔從五位下和氣朝臣廣世言、亡考清麻呂平生常言、身食厚祿、無益於公、兼忝國造、無德於民、懷抱戀々、願念故鄉、憐彼窮民、不能忘焉、願以私墾田一百町、擬和氣磐梨、赤坂、邑久、上道、三野、津高、兒嶋等八郡卅餘鄉賑救之分、然一處混置、諸鄉難及、若遭班田、奏聞、以此墾田、班田口分、彼鄉分田量換、置名爲賑救田、以仍其地、子季夏之月、賑給飢人以救民命、以報國恩、隙駒不駐、所願未果、仍表先志、許之、○戊戌、勅天下臣民、氏族已衆、或源同流別、或宗異姓同、欲據譜講、多經改易、至檢籍帳、難辨本枝、宜布告天下、令進本系帳、三韓諸蕃亦同、但令載始祖及別祖等名、勿列枝流并繼嗣歷名、若元出于貴族之別者、宜取宗中長者署申之、凡厥氏姓、率多假濫、宜在確實、勿容詐冒、來年八月卅日以前、惣令進了、便編入錄、如事違故、記及過嚴程者、宜原情科處、永勿入錄、凡庸之徒、

惣集爲卷冠蓋之族聽別成軸焉

日本後紀卷第八

(三條西家本奥書)

天文二三廿一一見加朱點了

○起延曆廿三年、以下廿四年六月に至る十四字西本なし

〔延曆廿三年〕皇統彌照天皇、以下曲宴其內親王之房に至るまで西本に缺く蓋瑞氏類史に據て補へるならむ但し考異には辛巳以下內親王之房に至る十字舊脱據類聚國史補云りされば原本は西本とは全く別にて其以外の文は存せしにや
○木連理、治部式に仁木也異本同枝或枝旁出上更還合と見え下瑞とす
○白雀、同式に中瑞とす
○戊寅云々、此條原本なし紀略に據て補ふ
○茨田親王、桓武天皇皇子
○其內親王、高志內親王なり紀略に大同四年五月壬子三品高志內親王薨桓武天皇第二女天皇尤所鍾愛薨時年廿一とあり
○池田朝臣、考異に田類

日本後紀卷第十二

起延曆廿三年正月盡廿四年六月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉 勅撰

皇統彌照天皇 桓武天皇

廿三年春正月丁丑朔御大極殿受朝賀武藏國言有木連理近江國獻白雀宴次侍從已上於前殿賜被○戊寅改茨田親王爲萬多○辛巳曲宴其內親王之房授親王三品淳和贈皇后也從六位下池田朝臣稗守授從五位下賜三位以上被五位以上及六位以下藤原氏等綿○癸未勅眞如妙理一味無二然三論法相兩宗菩薩目擊相諍蓋欲令後代學者以競此理各深其業歟如聞諸寺學生就三論者少趣法相者多遂使阿黨凌奪其道疎淺宜年分度者每年宗別五人爲定若當年無堪業者闕而莫填不得以此宗人補彼宗數但令二宗學生兼讀諸經并疏法華最勝依舊爲同業華嚴涅槃各爲一業經論通熟乃以爲得雖讀諸論若不讀經

史作原あり
 ○禪守、原本蘇守に作る類史に據て改む
 ○三論、中論百論十二門論の三論によりて立たる宗旨我邦には推古天皇三十三年高麗慧灌初て之を傳ふ
 ○法相、萬法の性相を窮明する宗の意にて法相宗と名付く云我邦には孝德天皇白雉四年道昭和尙入唐して玄奘に就て傳授したるを第一傳とし爾後玄昉が渡唐して所謂北寺傳を傳へしまで四傳あり北寺(興福寺)傳を正傳とす
 ○蓋欲令、此三字及深其業歟以下十一字西本に缺く蓋類史に據て補へるならむ
 ○闕而莫填、原本闕を闕に作る西本及類史に據て改む
 ○以爲得、以下七字西本に缺く蓋類史に據て補へるならむ
 ○其廣涉經論、西本其廣涉經の四字なし類史に據て補へるならむ
 ○勿限漢音、之に據るに當時佛敎に於ても漢音を主せしなるべし義を習

者、亦不得度、其廣涉經論、習義殊高者、勿限漢音、自今以後、永爲恒例、○甲申、宴五位以上、賜物有差、○丁亥、勅、頃年諸國緇徒、多虧戒行、既汚法敎、先從擯出、然而特降弘恕、厚優耆宿、其有改過者、聽住本寺、又簡智行可稱、堪爲人師者、擢任講師、化導釋侶、如聞、苟忝講師、或事奸濫、詐稱改過、未捨妻孥、此乃僧綱簡擇所失、國司阿容任意、違敎慢法、莫過斯甚、宜有是類、一從擯却、其僧綱國司、猶不悛革、量情科貶、正五位下藤原朝臣今川、藤原朝臣縵麻呂、藤原朝臣繼業、授正五位上、○己丑、左京人正六位上、○朝臣今繼等、賜姓三棟朝臣、○辛卯、夷第一等浦田臣史闡、儼授外從五位下、○壬辰、宴五位已上、賜物有差、○癸巳、幸馬埦殿觀射、○乙未、運武藏、上總、下總、常陸、上野、下野、陸奥等國、糶一萬四千三百十五斛、米九千六百八十五斛於陸奥國小田郡中山柵、爲征蝦夷、○丙申、遊獵水生野、是日天寒、於野中賜五位已上衣、○戊戌、律師傳燈大法師位如寶言、招提寺者、斯唐大和上鑒眞爲聖朝所建也、天平寶字三年、勅以没官地、賜之、名爲招提寺、又以越前國水田六十町、備前國田地十三

ふこと殊に高きものは吳音を用ふるものにても得度せしむべしなり
 ○如聞、苟忝講師、西本に闕以下の五字缺く蓋類史に據て補へるならむ
 ○三棟朝臣、姓氏録に見えず三統宿禰と同族が三統宿禰は續後紀承和十一年十月紀に日置宿禰眞淨、日置國長益繼淨海等賜姓三統宿禰と見ゆ姓氏録に日置朝臣(皇別)日置造(審別)見ゆれど日置宿禰は見えず
 ○史闕難、西本史下に吏字あり恐くは衍
 ○中山柵、今陸前國登米郡中津山村なるべしと云
 ○招提寺、扶桑略記に天平寶字三年八月三日大唐鑒眞和尚奉爲聖武皇帝招提寺所創建也金堂一字少僧都唐如寶所建立也云々見え續紀寶字七年五月紀鑒眞傳にも見ゆ
 ○大和上、原本土を尙に作る類史紀略及下文に據て改む
 ○爲聖朝、三代格略記に爲の上奉字あり
 ○經律、佛經には經律論の三部あり此は經と律と

町、宛給供料、令學戒法、以來殆五十年、雖有經律、未經披講、一則乖和上之素意、一則闕弘道之至志、伏望、令永代傳講、便用賜田、充律供儲、然則招提之宗、久而無廢、先師之旨、沒而不朽、許之、○己亥、制、延曆十一年七月三日格、六世已下王、情願改姓者、注所願之姓、先申官待報、然後改之、不得輒行者、頃年之間、未有申請、既違格旨、自今以後、除承嫡之外、猶不改者、宜抑止計帳、不得疎、○免淡路國窮民負稅九萬三千九百束、○庚子、從五位下笠朝臣庭麻呂爲大和介、外從五位下津宿禰源爲山城介、從五位下大中臣朝臣弟枚爲伊賀守、從五位下大荒城臣忍國爲遠江介、從五位上高倉朝臣殿繼爲駿河守、從五位下藤原朝臣眞雄爲近江權介、大內記從五位下平群朝臣眞常爲兼大掾、從五位下和朝臣弟長爲信濃介、中衛少將從四位下巨勢朝臣野足爲兼下野守、從五位下大中臣朝臣常麻呂爲介、從五位下佐伯宿禰社屋爲出羽守、從五位下藤原朝臣山人爲越中權介、從五位下和朝臣氏繼爲越後介、從四位下安倍朝臣弟當爲丹波守、從五位下淡海眞人有成爲介、從五位下大秦

○弘道、三代格弘を佛に作る
 ○己亥制云々、延曆十一年七月三日格は三代格卷十七及類史七十九に出づ
 ○改姓、類史改を賜に作る
 ○猶不改者、改は西本に據て補ふ
 ○抑止計帳、計帳は一に大帳とも云毎年一度之を造り家口年紀を注し課口不課口の區別を明にす田令に據るに皇親及五世王六世王は不課とし七世王は調を輸し倍をのみ免ぜり計帳を抑止すは其待遇を停止するを云
 ○神泉苑、拾芥抄中末に天子遊覽所以近衛次將爲別當乾臨閣謂之正殿二條南大宮西八町(三條北王生東)善女龍王常見此所上代有公卿別當長保年中道綱補之、太平記に神泉苑は大内始て成し時擬周文王靈園方八町に被作たりし園圍是也云々と見ゆ
 ○高田郷、抄郡郷部に但馬國氣多郡高田(多加多)とあり弘安太田文にも高田郷見ゆ國府趾は今の國分村大字府市場なるべし

公宿禰宅守爲因幡介、從五位下石川朝臣宗成爲備後守、從五位下百濟王忠宗爲伊豫介、從五位下藤原朝臣藤繼爲大宰少貳、正五位上藤原朝臣縵麻呂爲豐前守、從五位下藤原朝臣眞書爲豐後守、○辛丑、幸神泉苑、○壬寅、遷但馬國治於氣多郡高田郷、○甲辰、刑部卿陸奧出羽按察使從三位坂上大宿禰田村麻呂爲征夷大將軍、正五位下百濟王教雲、從五位下佐伯宿禰社屋、從五位下道鳴宿禰御楯爲副軍監八人、軍曹廿四人、○乙巳、安藝國野三百町賜甘南備內親王、以爲牧地、○二月丙午朔、中務大輔從四位上三嶋眞人名繼爲兼衛門督、○戊申、幸西八條并五條院、賜五位已上衣、○庚戌、運收大和國石上社器仗於山城國葛野郡、○甲寅、從五位下淨宗王爲少納言、○癸亥、從五位下大宅眞人繼成爲大監物、從四位下大庭王爲內匠頭、從五位下大中臣朝臣魚取爲助、從五位上下毛野朝臣年繼爲諸陵助、從五位下大伴宿禰久米主爲主稅頭、從五位下大宅眞人淨成爲造兵正、從五位下藤原朝臣城主爲宮內少輔、從五位下大野朝臣犬養爲左京亮、春宮權亮從五位下

○甘南備內親王、紹運錄に桓武天皇皇女平城納之弘仁八年二月廿一日薨年十八と見ゆ
 (二月)西八條、百練抄卷六に大治三年五月十一日兩院幸八條大宮水閣とある是なるべし
 ○五條院、拾芥抄中末に五條院二町五條北大宮東金岡疊(水石)云々とあり
 ○石上社器仗云々、神名式に大和國山邊郡石上坐布留御魂神社、臨時祭式に凡石上社門鑰一勾匙二口納官庫、臨祭在前遣官人神部下部各一人開門掃除供祭自餘正殿并伴佐伯二殿各一口同納庫不得輒開とあり本社には上古以來多く兵器を收めしを萬一の事を慮りて山城國葛野郡に移さしめ給ひしなり
 ○伊豫親王、桓武天皇皇子、紀略に大同二年十月辛巳潛謀不軌十一月乙未母子仰藥而死とあり
 ○可樂埒、辛埼又韓埼或は唐埼に作る琵琶湖に臨み七瀬祇の其一所なり萬葉集以下の諸集に見ゆ
 (三月)蒲生驛、兵部式

藤原朝臣眞夏爲亮、中衛權少將如故、參議從四位下藤原朝臣緒嗣爲兼山城守、右衛士督如故、從四位下三諸朝臣大原爲播磨守、免大和國田租并地子、緣旱災也、○乙丑、巡行京中、御式部卿三品伊豫親王策賜四位以上衣、○己巳、幸近江國志賀郡可樂埒、○庚午、攝津國飢、遣使賑給、外從五位下殖栗連宗繼爲美濃權介、○三月戊寅、宴次侍從以上命文人賦詩、賜物有差、○庚辰、遣唐使拜朝、○辛卯、賜五位以上米、各有差、以霖雨也、○壬辰、從五位下藤原朝臣永眞爲權右少辨、○庚子、大宰府言、大隅國桑原郡蒲生驛與薩摩國薩摩郡田尻驛、相去遙遠、遞送艱苦、伏望置驛於薩摩郡櫟野村、以息民苦、許之、是日、召遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂、副使從五位上石川朝臣道益等兩人、賜錢殿上、近召御床下、給旨慰勸、特賜恩酒一杯、寶琴一面、酣暢奏樂、賜物有差、○癸卯、授大使葛野麻呂節刀、○夏四月己酉、從五位下桑田眞人木津魚麻呂爲主計助、從五位下多治比眞人氏守爲主稅助、從五位下田中朝臣八月麻呂爲右衛士佐、○壬子、從五位下紀朝臣國雄爲右大舍

に大隅國馬蒲生大水各五疋あり今始良郡蒲生村大字蒲生是なり
 ○田尻驛、同式に薩摩國驛馬田後櫛野各五疋あり田尻は今地名存せず
 ○櫛野村、今薩摩郡櫛脇村大字市比野是なり
 ○是日、紀略之を壬辰十七日條に係く恐くは非
 ○一杯、紀略一坏に作る
 ○節刀、大將出征に節刀を授くること軍防令に見ゆ遣唐使に之を授ることは大寶元年五月己卯（續紀卷上二頁）に注す
 ○四月、染袴、衣服令に諸臣禮服一位深紫衣白袴朝服も同じく白袴ありしを此に至て染色の袴を著用するを隱されしなり
 ○淺杉染、續後紀承和五年三月癸未勅に吳桃染黃墨染杉染皂染等色云々彈正式に凡淺染袴朝座公會悉聽服用と見ゆ杉は前田本稿本に木と傍訓すればアサギと訓むべきか
 ○朝服、衣服に禮服朝服制の別あり參朝の時に服するに依て朝服と云唐にては朝服公服の二種に之を區別す
 ○和朝臣家麻呂薨、續紀

人助、從五位下藤原朝臣城主爲民部少輔、從五位下三嶋真人眞影爲宮内少輔、從五位下安倍朝臣宅麻呂爲主殿頭、外從五位下豐山忌寸眞足爲助、外從五位下壬生公足人爲園池正、從五位下多治比眞人家繼爲造、東寺次官、外從五位下日下部得足爲造、西寺次官、侍醫、外從五位下倭廣成爲兼遠江權掾、侍醫、外從五位下難波連廣名爲兼因幡權掾、從五位下秋篠朝臣全繼爲右衛士權佐、侍從、從四位下葛野王爲兼主馬頭、從五位下紀朝臣田上爲內廐助、從五位下百濟王元勝爲內兵庫正、○丁卯、勅、聽、著、染、袴、先有限制、自今以後、淺杉染、不論高卑、宜、特聽之、但著朝服時、不得同襲、其深染、及常所禁、不在聽限、○辛未、制、頽壞成川之地、屢事除籍、新出爲田之狀、未聞言上、若西岸壞流、既損公田、則東邊新成、點爲私地、如此經年、公損幾何、宜、天平十四年以降、新出田數、細勘言上、不得疎漏、中納言從三位和朝臣家麻呂薨、贈從二位大納言家麻呂、贈正一位高野朝臣弟嗣之孫也、其先百濟國人也、爲人木訥、無才學、以帝外戚、特被擢進、蕃人入相府、自此始焉、可謂人位有餘、天爵不

延曆五年正月（卷下四四七頁）に始見伊勢大掾造酒正造兵正内廐助衛門督治部卿相摸守等を歷任す
 ○贈從二位大納言、奈良本紀略には下文年七十一の次に詔贈從二位大納言とあり
 ○弟嗣、乙繼に同じ高野皇太后の御父なり家麻呂の父は皇太后の兄弟なれど其名は詳ならず
 ○相府、參議以上を云
 ○山村曰佐、原本曰を日に作る類史に據て改む
 ○五月、斯波城、今陸中國紫波郡郡山の廢墟なるべしと云
 ○山谷嶮、口は恐くは峻字なるべし
 ○准小路例置一驛、兵部式陸奥國驛馬騰澤の次に磐基と見ゆる是なるべし九條本に之をハハキと訓るは何に據れるか其地今詳ならずされと和賀郡岩崎にあらざるか
 ○辛卯、善謝卒去の事紀略略記共に五月辛卯の事とす辛卯は十八日なり庚寅の次にあるべし疑くは此に錯入せるならむ
 ○善謝卒、續紀延曆九年九月（卷下四九八頁）始見

足、其雖居貴職、逢故人者、不嫌其賤、握手相語、見者感焉、時年七十一、○壬申、賜從四位下紀朝臣兄原度一人、右兵衛大初位下山村曰佐駒養獻白雀、賜近江國稻五百束、○五月戊寅、御馬埒殿觀馬射、○癸未、陸奥國言、斯波城與膽澤郡相去一百六十二里、山谷嶮、往還多艱、不置郵驛、恐闕機急、伏請准小路例、置一驛、許之、○辛卯、傳燈大法師位善謝卒、法師、俗姓不破勝、美濃國不破郡人也、初就同寺理教大德、稟學法相、道業日進、尤善俱遮、遂乃超□三學、通達六宗、滋此智牙、決彼疑網、延曆五年、彌照天皇擢任律師、榮華非好、辭職閑居、凡厥行業、必於菩提、一生期盡、終於梵福山中、遂生極樂、入同法夢、時年八十一、○甲申、幸式部卿三品伊豫親王第、○戊子、播磨國荒廢田八十二町賜□□親王、○庚寅、制、正月齋會、得度之輩、理須舊年試才、新歲得度、而所司常致慢闕、迄于會畢、其名不定、自今以後、舊年十二月中旬以前試定、申送其狀、簡定之後、不聽改替、然則本願無虧、屬託亦止、○辛卯、散事從三位藤原朝臣延福薨、○癸巳、山城國穀四千斛賑給左右京高年、○丙申、齋宮寮獻白

元亨釋書卷二にも見ゆ
 ○理教、詳ならず
 ○俱遮、俱舎なり
 ○超□三學、超□は略記に讀誦に作る三學は證果を得るにつき修むべき戒定慧の三學を云
 ○六宗、三論法相華嚴律俱舎成實なり
 ○梵福山中、大和志に梵福寺在、添上郡鹿野園村傳云岩淵寺子院あり岩淵寺は釋勅操の所建なり
 ○時年八十一、紀略時上に卒字あり
 ○散事、後宮職員令に諸司の掌以上(掌侍掌膳の類)を職事とし自餘(女孺采女の類)を散事と爲すあり
 ○藤原朝臣延福菴、續紀延曆四年正月紀(卷下四二七頁)に始見
 ○上國、令制諸國を分て大上中下の四等とす上國は其上なり
 ○丙辰制、考異に制舊脫據類史補あり
 ○鹿鳴神社、常陸國鹿鳴郡
 ○氣比神社、越前國敦賀郡
 ○氣多神社、能登國羽咋郡

雀心攝津國言類歲不登、百姓乏食、加以春夏水害、資糧亦盡、伏請正稅二萬束、假貳貧民、令濟家產、許之。○六月壬子、從五位下藤原朝臣貞嗣爲左少辨、從五位下豐野真人村爲大監物、從五位下石上朝臣乙名爲散位頭、從五位上藤原朝臣道雄爲宮內大輔、從五位上中臣朝臣道成爲典藥頭。○癸丑、定越中國爲上國。○丙辰、制常陸國鹿鳴神社、越前國氣比神社、能登國氣多神社、豐前國八幡神社等宮司、人懷競望、各稱譜第、自今以後、神祇官檢舊記、常簡氏中堪事者、擬補申官。○壬戌、幸大堰。○癸亥、散位從三位石上朝臣家成薨、左大臣贈從一位麻呂之孫、正六位上東人之子也、才藝無取、恪勤在公、薨時年八十三。○甲子、散位正五位下小倉王上表曰、臣聞上天開象、兩曜以之盈虛、聖人肇基、九族由其差降、是故尊卑有序、仰星辰而可知、親疎無替、命氏姓而立教、伏惟陛下彫鏤品彙、陶冶生靈、人正其名、物安其性、小倉幸屬淳化、謬霑濡澤、□乾弘、大造無謝、但得愚息、內舍人繁野、及小倉兄別王之孫、內舍人山河等款、僂臣等智効罕施、器識庸微、忝天潢之末流、仰瓊枝而悚懼、伏請依

○八幡神社、豐前國宇佐郡
 ○擬補申官、神祇官に於て擬補し太政官に申告するなり
 ○石上朝臣家成薨、續紀寶字八年十月庚午に始見
 上總守勅旨少輔宮內大輔民部大輔伊豫守大宰大貳內藏頭衛門督右衛士督宮內卿等を歷任す
 ○八十三、紀略に八十二あり奈良本には三とす
 ○小倉王、舍人親王の子御原王の子なり
 ○兩曜、日月を云
 ○彫鏤品彙、彫鏤は文選魏都賦に木無彫鏤、注に鏤鏤也とあり彫り鏤むにて陶冶と云と同じ意
 ○淳化、原本淳和に作る西本に據て改む
 ○霑濡、字書に謂、兩日霑亦以爲恩澤之喻と云
 ○大造無謝、大造は左傳成十三年に出で大功と云に同じ
 ○兄別王、兄の和氣王
 ○奈天潢之末流、原本奈を木に作る廿五年五月己卯紀に據て改む天潢は史記天官書に王良旁有八星、經漢曰天潢とあり天の河なりそれより轉じ

去延曆十七年十二月廿四日友上王賜姓故事、同蒙清原真人姓、又繁野名語觸皇子、改繁曰夏、小倉不忘、憤聞斯行、特望天恩、伏聽進止、其應賜姓人等、具目如別、不任懇迫之至、謹以申、許之。大宰府言、壹伎鳴防人糧、受筑前穀、運漕艱苦、屢致漂失、伏望廢六國所配防人廿人、以當鳴兵士三百人、分番配置、不勞給糧、許之。○己巳、停山城國山科驛、加近江國勢多驛馬數。○庚午、勅比年渤海國使來著、多在能登國、停宿之處、不可疎陋、宜早造客院。○秋七月癸酉朔、幸神泉苑。○丙子、幸大堰。○己卯、觀相撲、授无位明、女王從五位上、從五位上紀朝臣內子、川上朝臣眞奴、百濟王惠信、藤原朝臣川子、紀朝臣殿子、正五位上、无位藤原朝臣上子、橘朝臣御井子、紀朝臣乙魚、坂上大宿禰春子、從五位上。○癸未、幸葛野川。○丙申、幸與等津。○己亥、幸大堰。○辛丑、右京人門部連松原流土左國、以不孝也。○八月癸卯朔、幸大堰。○丁未、幸葛野川。○己酉、遣征夷大將軍從三位行近衛中將兼造西寺長官陸奧出羽按察使陸奥守勳二等坂上大宿禰田村麻呂、從四位上行衛門督兼中務大輔

て皇室の意に用ふ
 ○語觸皇子、皇女滋野内親王と訓同じきを云るか
 ○六國、筑前以下六國なり續紀神護二年四月紀に割筑前等六國兵士二以爲防人とあるを云
 ○山科驛、山城國宇治郡山科郷にあり
 ○勢多驛、兵部式に近江國勢多郡定さあり
 ○客院、客館と云に同じ
 ○七月、與等津、山城國淀なり地名辭書に古の與等津は京津なれば紀伊郡納所(東遊)の方にやと云へ今臆断し難し
 ○八月、中院、拾芥抄中末に中和院内裏西院號中院神嘉殿天子祭社稷神所とあり
 ○左右閣、神泉苑は乾臨閣を正殿とし其東西に左右閣あり
 ○生年在丑、かくの如き迷信既に行はれしなり
 ○巡行京中、類史行を幸に作る
 ○勝長、紀略棉長に作る
 ○從五位上藤原朝臣繼彦、考異に上舊作下據上下文訂あり
 ○九月、善原忌寸口依、善原忌寸は詳ならず

三嶋眞人名繼等、定和泉攝津兩國行宮地、以將幸和泉紀伊二國也、○庚戌、幸葛野川、○壬子、暴雨大風、中院西樓倒、打死牛、又墮壞神泉苑、左右閣京中廬舍、諸國多蒙其害、天皇生年在丑、歎曰、朕不利歟、未幾不豫、遂弃天下、○癸丑、地震、賜贈大納言從二位和朝臣家麻呂、從四位下尾張女王度各二人、○乙卯、遊獵北野、○辛酉、巡行京中、○癸亥、遊獵大原野、○丁卯、遊獵栗前野、○戊辰、天皇以來冬可幸和泉國、參議式部大輔春宮大夫近衛中將正四位下藤原朝臣繩主爲裝束司長官、正五位上橘朝臣安麻呂、從五位下池田朝臣春野爲副、參議左兵衛督從三位紀朝臣勝長爲御前長官、從五位上藤原朝臣繼彦爲副、左大辨東宮學士左衛士督但馬守正四位下菅野朝臣眞道爲御後長官、從五位下紀朝臣昨麻呂爲副、○庚午、從五位下大枝朝臣須賀麻呂爲主計助、外從五位下檜原宿禰饒作爲造西寺次官、○九月甲戌、近江國蒲生郡荒田五十三町賜式部卿三品伊豫親王、○乙亥、幸大堰、○己卯、幸神泉苑、○辛巳、從五位下紀朝臣田上爲相摸介、○丁亥、正六位上善原忌寸口依

○差勳位、勳位あるものを差遣するを云
 ○健兒、健兒の名皇極紀元年(書紀下五一頁)に始見、續紀(卷下六三頁)天平寶字六年二月に其簡點の事見えたり
 ○自牒、三代格此下に申送の二字あり
 ○延曆廿一年九月廿三日格、三代格に見えず
 ○法家、三代格明法曹司の四字に作る

授外從五位下、○己丑、遣兵部少丞正六位上大伴宿禰岑萬里於新羅國、太政官牒曰、遣使唐國、脩聘之狀、去年令大宰府送消息訖、時無風信、遂變炎涼、去七月初、四船入海、而兩船遭風漂廻、二船未審到處、即量風勢、定著新羅、仍遣兵部省少丞正六位上大伴宿禰岑萬里等尋訪、若有漂著、宜隨事資給、令得還鄉、不到彼堺、冀遣使入唐、訪覓具報、○壬辰、遊獵北野、○癸巳、丹波國言依格、差勳位衛護府庫、而白丁之儔、唯卅日、勳位所直、百卅日、有位白丁、勞逸不均者、制宜以白丁爲健兒、○甲午、式部省言、案公式令、親王一品已下、職事初位已上、並可自牒諸司、雖是三位已上、曾無以家司牒及解向官司之文、而案去延曆廿一年九月廿三日格云、親王內親王、並年滿四歲、始充帳內者、今親王內親王、或年未成人、或不便文筆、至經官司、若爲申牒、又同令牒式、三位已上去名、然則親王四品已上、去名明矣、而散事數人、同品及同官位姓之類、既不署名、何以辨知、仍問法家、答云、如此之類、可有別式者、未審所從者、勅幼稚親王、既不便筆、三位已上、亦無可署、准據令格、還成疑滯、必須自牒、事有不穩、自

○至牒諸司、三代格至字の下に于字牒字の下に送字あり

○恒式、三代格恒例に作る

(十月)難破、紀略破を波に作る下同じ

○惠美原、詳ならず

○城野、所在詳ならず

○日根行宮、和泉志に日根郡(今の泉南郡)日根野

莊野宮其故址也と見ゆ

○垣田野、和泉志日根郡

鶴原貝田二村と見ゆ

○蘭生野、和泉國日根郡

土生郷にあり今の南掃守

の邊か云

○日根野、日根郡日根野

村にあり

○辛亥詔、行幸の地にて

の詔此に始て見ゆ續紀に

は例見えず

○年實、稻を云續紀神龜

二年二月即位の詔に年實

をトシ訓みたれ此は

イネと訓べし

○産業、總ての生産物を

云

○此月波開時爾之豆、農

業の閑散なる月の意

今以後、宜親王四品已上、及職事三位已上、並聽以家司牒申牒諸司、其牒首、並具注其官品、其親王家、及其官位姓名家牒、以別同異、牒尾家令已下兩人署之、无品親王内親王者、並別當官人、署名申牒、牒式准、上定別當人、依勅處分、其散事三位、元無家司、至牒諸司、宜令自署、立爲恒式、
○戊戌地震、○冬十月甲辰、行幸和泉國、其夕至難破行宮、○乙巳、賜攝津國司被衣、上御舟泛江、四天王寺奏樂、國司奉獻、○丙午、至和泉國、遊獵于大鳥郡惠美原、散位從五位下坂本朝臣佐太氣麻呂獻物、賜綿一百斤、○丁未、獵于城野、日暮御日根行宮、○戊申、獵垣田野、阿波國獻物、賜國司等物有差、左大辨正四位下菅野朝臣眞道獻物、賜綿二百斤、○己酉、獵蘭生野、近衛中將從三位坂上大宿禰田村麻呂獻物、賜綿二百斤、○庚戌、獵于日根野、河内國獻物、○辛亥、詔曰、天皇詔旨、良万止勅、命平、和泉攝津二國司郡司公民陪從、司々人等諸、聞食止宣、今年波年實豐稔、豆、人々産業、毛、取收豆、在此月波開、時、爾之豆、國風御覽、須時止、奈毛、常、聞所行、須、今行宮所、御覽、爾、山野、毛、麗、海、瀨、毛、清、之、豆、御意、毛、於

○真人乎上賜比、上字は原本に缺く上文の例に據て補ふ

○玉出嶋、紀伊國海部郡(今海草郡)にあり和歌村の南なる妹背山の舊名なるべし續紀神龜元年十月紀(卷上一八九頁)に見ゆ
○賀樂内親王、桓武天皇皇女

太比爾之豆御坐坐、故是以御坐坐世留、和泉國并攝津國東生西成二郡乃百姓爾、今年田租免賜比、又勤仕奉國郡司及一二能人等爾、冠位上賜比治賜布、目以下及郡司乃正六位上乃人爾、波、男一人、爾位一階賜布、又行宮勤、仕奉爾、依豆、三嶋名繼真人乎、上賜比治賜布、又行宮乃邊、爾、近岐高年八十已上并陪從、人等爾、大物賜波、久止詔布、勅命乎、衆、聞食止宣、授攝津守從三位藤原朝臣雄友正三位、衛門督從四位上三嶋真人名繼正四位下、散位從五位下坂本朝臣佐太氣麻呂從五位上、攝津介外從五位下尾張連粟人、和泉守外從五位下中科宿禰雄庭、攝津掾正六位上多治比真人船主、和泉掾正六位上小野朝臣木村、散位正六位上大枝朝臣萬麻呂從五位下、又皇太子已下賜物有差、遣使於和泉日根二郡諸寺施綿、播磨國司奉獻、奏風俗歌、○壬子、幸紀伊國玉出嶋、○癸丑、上御船遊覽、賀樂内親王、及參議從三位紀朝臣勝長、國造紀直豐成等奉獻、詔曰、天皇詔旨、良万止勅、命、平、紀伊國司郡司公民陪從、司々人等諸、聞食止宣、此月波開、時、爾之豆、國風御覽、須時止、奈毛、常、聞所行

○磯嶋毛奇麗久云々、前詔には山野毛麗云々あるを、こゝは風色自ら異なれば語を換てかく宣給ひしなり

○熊取野、和泉國日根郡熊取村(中世熊取莊と稱す)にあり

○三王、平城、嵯峨、淳和の三代の帝王

須、今御坐所乎御覽爾磯嶋毛奇麗久海激毛清晏爾之且御意母於多比爾御坐坐故是以御坐坐世留名草海部二郡乃百姓爾今年田租免賜比又國司國造二郡司良爾冠位上賜比治賜布目已下及郡司乃正六位上乃人爾波男一人爾位一階賜布又御座所爾近岐高年八十已上人等爾大物賜波久止詔布勅命乎衆聞食止宣授守從五位下藤原朝臣鷹養從五位上介外從五位下葛井宿禰豐繼掾從六位下小野朝臣眞野刑部大丞正六位上紀朝臣岡繼中衛將監正六位上紀朝臣良門從五位下遣使於名草海部二郡諸寺施綿○甲寅自雄山道還日根行宮○乙卯遊獵熊取野○丙辰御難破行宮○丁巳國司奉獻遣使於西成東生二郡諸寺捨綿○戊午車駕至自難破○壬戌幸神泉苑○甲子勅私養鷹鷄禁制已久如聞臣民多蓄遊獵無度故違論言深合罪責宜嚴禁斷勿令重犯但三王臣聽養有差仍賜印書以爲明驗自餘輒養將實重科其印書外過數者捉臂鷹人進上自餘王臣五位已上錄名言上六位已下及臂鷹人並依法禁固科違勅罪遣使搜檢如有違犯國郡官司亦與同罪○

(十一月)栗原郡新置三驛詳ならず地名辭書には式文の黒川驛より支分志太郡新田郡栗原郡と新驛を置かれしならむ其驛址は大略三本木高清水二迫と見るべしと云り
○大貞連、録左京神別到大貞連饒速日命十五世孫綱加利大連之後也云々詔阿比大連賜大俣連天平神護元年改字賜大貞連とあり
○秋田城、羽後國秋田郡今の南秋田郡寺内村高清水に遺址あり秋田城創置の事は天平五年十二月紀に出羽柵遷置於秋田村高清水岡とある是なり
○河邊府、地名辭書に之を出羽郡井口國府(羽前國東田川郡)と云天平五年出羽の鎮城を秋田郡に移さる而も府務は之を舊城に行ひ河邊府と云最上河邊の舊府の意なりと云り
○皇太子學士、原本皇太子の二字缺く西本に據て補ふ皇太子の上に左大辨正四位下の七字あるべきか(十二月)牛之爲用云々、三代格卷十九に出づ天皇天平九年丁丑の降誕

戊辰免越前能登二國今年調十分之七以桑麻有損也○十一月戊寅陸奥國栗原郡新置三驛○己卯遊獵日野○壬午制筑前國志麻郡自今以後停止綿調以令輸錢○甲申幸神泉苑左京人從七位下大俣連三田次賜姓大貞連○丁亥幸神泉苑○戊子山城國乙訓郡白田六町賜甘南備內親王○己丑幸神泉苑○癸巳出羽國言秋田城建置以來卅餘年土地境塙不宜五穀加以孤居北隅無隣相救伏望永從停廢保河邊府者宜停城爲郡不論土人浪人以住彼城者編附焉○戊戌幸神泉苑皇太子學士但馬守菅野朝臣眞道木工頭從五位上兼行造宮亮播磨介石川朝臣河主監僧綱政○十二月壬寅朔幸神泉苑○丙午勅自今以後左右大辨八省卿彈正尹准參議已上雖開門以後聽就朝堂○丁未幸神泉苑○壬戌勅牛之爲用在國切要負重致遠其功實多如聞無賴之輩爭事驕侈尤剝斑犢競用鞍轡爲弊良深事須禁絕自今已後殺剝及用鞍并胡祿等之具一切禁斷若有違犯科違勅罪主司阿容亦與同罪○丙寅聖體不豫遣使平城七大寺賣綿五百六十斤誦經

なり故に此勅ありしなるべし八月壬子の條に天皇生年在丑歎曰云々さあるを參考すべし
 ○尤劉斑幘、三代格に尤を殺に斑を班に作る
 ○鞍鞵、抄鞍馬具に鞍說文云鞍(和名久良)馬鞍也將助切韻云鞍以鞍駕馬也、鞵(唐韻云鞵)(和名之太久良)鞍鞵也さあり
 ○爲弊良深、三代格良深を尤甚に作る
 ○自今已後殺剝云々、以下十九字三代格になし
 ○胡祿、類史祿を錄に作る抄征戰具に靴周禮注云靴音服和名夜奈久比唐令用(胡錄二字)盛(矢器也)唐韻云箭篋(胡鹿二音)箭室也さあり
 【延曆廿四年】癸酉制云々、三代格卷三延曆廿四年正月三日太政官符禁斷王臣諸家稱爲定額寺檀越事さ見ゆ
 ○檀越、祖庭事苑に檀越檀那此云施主越謂度越彼岸さあり
 ○流記、寺記に緣起流記資財帳あり流記は當寺に關係する諸般の事を記せるものを云西大寺資財流記帳法隆寺流記資財帳久

又賑恤舊都飢乏道俗○丁卯^{廿六}詔曰朕有所思欲施恩澤宜赦天下自延曆廿三年十二月廿六日昧爽以前大辟已下罪無輕重皆咸赦除但強竊二盜及私鑄錢常赦所不免者不在赦限敢以赦前事相告言者以其罪罪之普告天下知朕意焉是日賜三品式部卿諱^{和度}一人
 廿四年春正月辛未朔廢朝聖體不豫也○癸酉^三制定額諸寺檀越之名載在流記不可輒改而愚人爭以氏寺假託權貴詐稱檀越寺家田地任情賣買事多奸濫宜加禁斷○丁丑^七正五位上橘朝臣安麻呂授從四位下賜五位已上物各有差○甲申^{十四}平明上急召皇太子遲之更遣參議右衛士督從四位下藤原朝臣緒嗣召之即皇太子參入昇殿召於牀下勅語良久命右大臣以正四位下菅野朝臣眞道從四位下秋篠朝臣安人爲參議又請大法師勝虞放却鷹犬侍臣莫不流淚奉爲崇道天皇建寺於淡路國是日勅頃年爲興釋教擯出違法之僧今聞自悔前過各有修行宜赦其過聽住本寺若更有犯處以恒科又令天下諸國修理國中諸寺塔○乙酉^{十五}永停大替隼人風俗歌舞是日大法師勝虞爲

米寺流記の類是なり
 ○氏寺、諸氏各々崇敬の寺院あり一氏力を合せて崇敬するを氏寺云
 ○賣買、考異に買舊作賣據類史訂さあり
 ○各有差、考異に各舊脫據類史補さあり
 ○勝虞、大和元興寺の僧本朝高僧傳に見ゆ
 ○建寺於淡路國、崇道天皇(早良親王)の御陵は津名郡多賀村大字川合字高嶋にありされば寺院も其附近なるべし
 ○大替隼人、隼人は大衣、番上、今來、白丁の四種あり大衣は二人あり擇譜第内置左右各一人教導隼人云々さある大衣の誤かとも思へど民部式に凡點仕丁者每五十月二人云々其大替隼人四月省預勅錄應點人數申宜下藩國司計帳之日點定云々、衛門式に大替衛士兵仗戎具隨身領遣云々見え仕丁にても衛士にても全體に交替せしむるを云へば大替隼人も其意なるべし
 ○風俗歌舞、職員令に隼人司正一人掌檢按隼人及名帳教習歌舞造作竹

少僧都均寵爲律師○丙戌^{十六}參議從四位下秋篠朝臣安人爲右大辨近衛少將勸解由長官阿波守如故從四位下橘朝臣安麻呂爲左中辨從五位上百濟王鏡仁爲右中辨從四位上藤原朝臣葛野麻呂爲刑部卿越前守如故宴五位已上賜物有差○丁亥^{十七}於御在所南端門外射但乘輿不御○辛卯^廿賜散位從四位下住吉朝臣綱主度一人○壬辰^{廿一}賜宿侍親王已下五位已上衣是日未時大星隕○乙未^{廿三}地震○戊戌^{廿六}外從五位下吉水連神德授從五位下正六位上出雲連廣貞外從五位下以供奉御藥晝夜不怠也○二月乙巳^{廿五}相摸國言頃年差鎮兵三百五十人戊陸奥出羽兩國而今條丁乏少勳位多數伏請中分鎮兵一分差勳位一分差白丁許之○丙午^{廿六}令僧一百五十人於宮中及春宮坊等讀大般若經造一小倉於靈安寺納稻卅束又別收調綿百五十斤庸綿百五十斤慰神靈之怨魂也○庚戌^{廿九}造石上神宮使正五位下石川朝臣吉備人等支度功程申上單功一十五萬七千餘人太政官奏之勅曰此神宮所以異於他社者何或臣奏云多收兵仗故也勅有何因緣所收之兵器奉

笠事（見）準人式に踐
 祚大嘗日に準人風俗歌舞
 を奏する事見えたり
 ○均籠、籠は原本籠に作
 る西本及類史（一八七）に
 據て改む
 ○二月、靈安寺、大和國
 宇智郡靈安寺村にあり他
 戸親王の靈を祀れる神社
 は御靈神社と稱し同く靈
 安寺村にあり
 ○造石上神宮使、考異に
 造舊脱據類史補さあり
 ○布留宿禰高庭、錄大和
 皇別に布留宿禰天足彦國
 押人命七世孫米餅搗大使
 主命之後也、男木事命男
 市川臣大鷦鷯天皇御世達
 後賀布都努斯神社於石
 上郷布留村高庭之地、以
 市川臣爲神主さあり
 ○鳴鏑、字鏡に鑄奈利加
 夫良、抄征戰具に鳴箭漢
 書音義云鳴鏑如今之鳴
 箭日本紀私記云八日鏑
 （夜豆女加布良）さあり
 ○運還神寶、廿三年二月
 庚戌の條を參看すべし
 ○典閣、後宮職員令に閣
 司尚闕一人掌宮閣管鑰
 及出納之事典閣四人掌
 同尚闕さあり
 ○勸諱贈天帝耳、天帝の
 判決を請ふ意なり石上神

答云、昔來天皇御其神宮、便所宿收也、去都差遠、可慎非常、伏請卜食而
 運遷、是時文章生從八位上布留宿禰高庭、即脩解申官云、得神戶百姓
 等款、備比來大神、頗放鳴鏑、村邑咸恠、不知何祥者、未經幾時、運遷神寶、
 望請奏聞此狀、蒙從停止、官即執奏、被報宣備、卜筮吉合、不可妨言、所司
 咸來、監運神寶、收山城國葛野郡訖、無故倉仆、更收兵庫、既而聖體不豫、
 典閣建部千繼、被充春日祭使、聞平城松井坊有新神、託女巫、便過請問、
 女巫云、今所問不是凡人之事、宜聞其主、不然者、不告所問、仍述聖體不
 豫之狀、即託語云、歷代御宇天皇、以慇懃之志、所送納之神寶也、今踐穢
 吾庭、運收不當、所以唱天下諸神、勸諱贈天帝耳、登時入京、密奏、即詔神
 祇官并所司等、立二幄於神宮、御飯盛銀笥、副御衣一襲、並納御輦、差典
 闈千繼充使、召彼女巫、令鎮御魂、女巫通宵忿怒、託語如前、遲明乃和解、
 有勅、准御年數、屈宿德僧六十九人、令讀經於石上神社、詔曰、天皇御命
 爾坐、石上乃大神、爾申給波久、大神乃宮、爾收有志器仗乎、京都遠久、成奴流、爾依
 豆、近處、爾令治、牟止爲豆、奈母、去年此、爾運收有流、然爾比來之間、御體如常不

託さしては天帝の語いか
 らあむ恐くは筆者の譯
 語なるべし
 ○幄、抄屏障具に四聲字
 苑云幄（和名阿計波利）大
 帳也さ見えたり
 ○銀笥、抄器皿部に禮記
 注云笥（和名介）盛食器
 也さあり
 ○御輦、抄舟車部に輿四
 聲字苑云輦（和名古之）車
 無輪也さあり
 ○令治牟止、原本令を全
 に作る類史に據て改む
 ○願坐之、原本之字を大
 字さす類史に據て改む
 ○常磐、原本磐を盤に作
 る西本に據て改む
 ○住吉朝臣綱主卒、初め
 姓池原公なりしを延曆十
 年四月住吉朝臣を賜ふ、
 延曆四年九月庚子紀に始
 見、下總大掾常陸大掾等
 を兼ぬ
 ○爲人、人字は西本に據
 て補ふ
 ○曰佐方麻呂、原本曰を
 日に作る上文に據て改む
 下同じ
 ○紀野朝臣、曰佐氏は錄
 山城皇別に紀朝臣同祖武
 内宿禰之後也さあれば紀
 野朝臣も同祖なるべし
 ○三園真人、錄左京皇別

御坐有爾、大御夢爾、覺志坐爾、依豆、大神乃願坐之、任爾、本社爾、返收豆之、无驚
 久无、咎久、平久安、久可御坐、止奈母、念志、食是以鍛冶司正從五位下作良
 王、神祇大副從五位下大中臣朝臣全成、典侍正五位上葛井宿禰廣岐
 等、平差、使豆、禮代乃幣帛、并鏡令持豆、申出給御命乎、申給、止申、辭別、豆、申
 給久、神那我良母、皇御孫乃御命乎、堅磐、爾常磐、爾護奉、幸爾奉給、爾止、稱辭、定
 奉久止、申遣典藥頭從五位上中臣朝臣道成等、返納石上神社兵仗、散
 位從四位下住吉朝臣綱主卒、綱主、以善射爲近衛、後歷將曹將監、爲人
 恪勤、宿衛不怠、好愛鷹犬、多得士卒心、仕至少將、卒時年七十七、大和國
 人正六位上曰佐方麻呂、近江國人正六位上曰佐人上賜姓紀野朝臣、
 ○甲寅、備後國飢、遣使賑給、正五位上葛井宿禰廣岐授從四位下、○乙
 卯、賜脩行大法師位榮興度一人、脩行傳燈法師位聽福二人、左京人
 多王、登美王等十七人賜姓三園真人、吉並□王、並王等十七人、近江眞
 人、駿河王、廣益王等十六人、清海真人、池原王、鳴原王二人、志賀真人、貞
 原王、眞貞王二人、淨額真人、坂野王、石野王等十六人、清岳真人、篠井王、

に凡殺人應死會赦免者
 移郷見ゆ
 (四月)國忌、儀制令に
 謂先皇崩日依別式合
 廢務者あり
 ○奉幣、歲終荷前の奉幣
 を云
 ○土左國云々加置傳馬、
 土左國の驛は兵部式に頭
 驛五橋丹治川見ゆ此驛
 を置かる、各郡に傳馬を
 加置くべしとあり
 ○殿鑑、抄居處部門戶具
 に論四聲字苑云論(音樂
 字亦作論今案俗人印論
 之處用鑑字非也云々)
 關具也楊氏漢語抄云論匙
 (門乃加岐)箋注に按龍龜
 手鑑云論正鑑俗蓋論作
 鑑者後世諧聲字也云々
 印論作鑑云々俗字耳と
 云り殿鑑は宮殿の鑑を
 云
 (五月)物部鏡連、鏡は
 香美にて土佐の地名物部
 氏にて香美郡に住めり之
 に據て名づく
 (六月)對馬嶋下縣郡、
 下文に阿禮村に到るさあ
 り
 ○田浦、續紀寶龜七年閏
 八月紀に松浦郡合蓋田浦
 見ゆ今福江嶋久賀嶋の
 間に田之浦瀬戸の名存す

神社、○庚戌、任改葬崇道天皇司、外從五位下豐山忌寸眞足爲主殿
 助、○五月己巳朔、賜侍從及侍醫等衣、○辛未、授從五位上藤原朝臣上
 子正五位下、○戊寅、授土左國香美郡少領外從六位上物部鏡連家主
 爵二級、以撫育有方、公勤匪怠也、○己卯、加山城、大和、河內、攝津等四國
 史生一員、是日遣脩行傳燈法師位聽福於紀伊國伊都郡、立三重塔、
 爲聖躬平善也、○甲午、甲斐、越中、石見三國飢、遣使賑給、○六月乙巳、遣
 唐使第一船、到泊對馬嶋下縣郡、大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂上
 奏言、臣葛野麻呂等、去年七月六日、發從肥前國松浦郡田浦、四船入海、
 七日戊剋、第三第四兩船、火信不應、出入死生之間、掣曳波濤之上、都卅
 四箇日、八月十日、到福州長溪縣赤岸鎮、已南海口、鎮將杜寧縣令胡延
 沂等相迎、語云、當州刺史柳冕、緣病去任、新除刺史未來、國家大平者、其
 向州之路、山谷嶮隘、擔行不穩、因廻船向州、十月三日、到州、新除觀察使
 兼刺史閻濟美處分、且奏、且放廿三人入京、十一月三日、臣等發赴上都、
 此州去京七千五百廿里、星發星宿、晨昏兼行、十二月廿一日、到上都長

即ち此地なるべし
 ○福州長溪縣赤岸鎮、唐
 書地理志江南道に福州長
 寧郡長溪縣あり今の福建
 省閩江縣の地なり
 ○鎮將、原本時の一字に
 作る西本及類史に據て改
 む
 ○星發星宿、夙に出發し
 夜に入て宿するを云
 ○上都長樂驛、上都は長
 安なり洛陽を東都或は東
 京と云に對して云唐書地
 理志に上都初曰京城、天
 寶元年曰西京云々肅宗
 元年曰上都とあり長樂
 は長安志に長樂驛在萬
 年縣(今併長安縣)東十
 五里長樂坡下とあり
 ○飛龍家細馬、細馬は良
 馬なり飛龍家は詳ならず
 れ唐書百官志に武后萬
 歲通天元年置仗内、六閑
 一曰飛龍、また李白の詩
 に勅賜飛龍内厩馬等ある
 を云か
 ○明州、唐書地理志江南
 道に明州餘姚郡と見ゆ今
 の浙江省鄞縣なり
 ○長安城、陝西省長安
 縣、唐の都なり
 ○宣化殿、長安志に見え
 ず宣政殿の誤にあらざる
 か通鑑胡三省注に唐時四

樂驛宿、廿三日、内使趙忠、將飛龍家細馬廿三匹迎來、兼持酒脯宣慰、駕
 即入京城、於外宅安置供給、特有監使高品劉昂、勾當使院第二船判官
 菅原朝臣清公等廿七人、去九月一日、從明州入京、十一月十五日、到長
 安城、於同宅相待、廿四日、國信別貢等物、附監使劉昂、進於天子、劉昂歸
 來、宣勅云、卿等遠慕朝貢、所奉進物、極是精好、朕殊喜歡、時寒、卿等好在、
 廿五日、於宣化殿禮見、天子不衙、同日於麟德殿對見、所請並允、即於内
 裏設宴、官賞有差、別有中使、於使院設宴、酣飲終日、中使不絕、頗有優厚、
 廿一年正月元日、於含元殿朝賀、二日、天子不豫、廿三日、天子雍王适崩、
 春秋六十四、廿八日、臣等於亟天門立仗、始著素衣冠、是日太子即皇帝
 位、諒闇之中、不堪萬機、皇太后王氏、臨朝稱制、臣等三日之内、於使院朝
 夕舉哀、其諸蕃三日、自餘廿七日而後就吉、二月十日、監使高品宋惟澄、
 領答信物來、兼賜使人告身、宣勅云、卿等銜本國王命、遠來朝貢、遭國家
 喪事、須緩々將息歸鄉、緣卿等頻奏早歸、因茲賜纏頭物、兼設宴、宜知之、
 却廻本鄉、傳此國喪、擬欲相見、緣此重喪、不得宜之、好去好去者、事畢首

夷入朝貢者皆引見於宣政殿（政殿あり）
 ○麟德殿、長安志に（東内大明宮）仙居殿西北有麟德殿云々凡内宴多在於此殿（見ゆ）
 ○含元殿、長安志に丹鳳門内當中正殿曰含元殿云々（見ゆ）
 ○天子雍王适、德宗なり唐書に貞元二十一年正月癸巳皇帝崩于會寧殿年六十四あり貞元廿一年は延曆廿四年に當る
 ○兩天門、承天門の誤ならむか長安志に西内正殿南承天門云々あり
 ○太子、順宗なり
 ○皇太后王氏、唐書に順宗母曰昭德皇后王氏あり
 ○告身、唐書選舉志に主者受旨而奉行焉謂之奏受、視品及流外則判補皆給以符謂之告身（あり今の辭令なり）
 ○緩々將息、將息は字書に將養休息也（あり緩々さ養生休息して後歸郷すべしなり）
 ○經頭物、通鑑胡三省注に舊俗賞歌舞人以錦綵置之頭上謂之經頭（あり、即かつげものなり）

途、勅令内使王國文監送、至明州發遣、三月廿九日、到越州永寧驛、越州即觀察府也、監使王國文、於驛館喚臣等、附勅書函、便還上都、越州更差使監送、至管内明州發遣、四月一日、先是去年十一月、爲廻船明州、留錄事山田大庭等、從去二月五日發福州、海行五十六日、此日到來、三日、到明州郭下、於寺裏安置、五月十八日、於州下鄞縣、兩船解纜、六月五日、臣船到對馬、鳴下縣郡阿禮村、其唐消息、今天子、諱誦、大行皇帝之男、只一人而已、春秋册五、有册餘男女、皇太子廣陵王純、年廿八、皇太后王氏、今上之母、大行皇帝之后也、年號貞元廿一年、當延曆廿四年、淄青道節度使青州刺史李師古、（正巳孫納之男）養兵馬五十萬、朝廷以國喪、告于諸道節度使、入青州界、師古拒而不入、（兵十萬以弔國喪爲名、自襲鄭州、諸州勦力、逆戰相殺、即爲宣慰師古、差中使高品臣希倩發遣、又蔡州節度使吳少誠、多養甲兵、竊挾窺窬、又去貞元十九年、遣龍武將軍薛審和親吐蕃、到則拘、不得復命、審欺之云、所以來和者、欲嫁公主也、吐蕃即令審歸娶、天子嗔之曰、嫁娶者、非朕所知、宜更廻允前旨、若事不遂、不得入來、審還

○越州永寧驛、越州は唐書地理志に江南道越州會稽郡（中）都督府あり下文の觀察府は都督府の意なるべし永寧驛は詳ならず
 ○觀察府、事物紀原に唐明皇開元二年置十道按察採訪處置使肅宗改曰觀察處置唐書方鎮表に至德元載置觀察使（あり之に因りて觀察府と稱せしなるべし）
 ○便還上都、原本便を使に作る西本に據て改む
 ○州下縣、唐書地理志明州の管縣に鄞縣あり鄞は鄞の訛ならむか
 ○阿禮村、今下縣郡佐須村字阿禮の地
 ○淄青道節度使、河南道淄州青州以下の數州を有せる節度使なり
 ○李師古、唐書卷二百十三に傳あり
 ○青州、唐書地理志に河南道青州北海郡あり今の山東省昌樂縣なり
 ○鄭州、同志に河南道鄭州滎陽郡あり今の河南省鄭縣
 ○中使、宮廷の使
 ○蔡州、地理志に河南道

到吐蕃界、拒而不入、在於今日、猶住兩界頭、去年十二月、吐蕃使等歸國、尋彼來由、在娶公主、天子嗔之不聽、故不會賀正也、其吐蕃在長安西北、數興兵侵中國、今長安城、去吐蕃界五百里、內疑節度、外嫌吐蕃、京師騷動、無暫休息、○丁未、近江丹波丹後、但馬、播磨、美作、備前、備後、紀伊、阿波、伊豫等十一國、停進彩帛、依舊貢絹、○辛亥、正六位上難破連廣成、若江造家繼、授外從五位下、○癸丑、伊賀國飢、遣使賑給、○甲寅、遣唐使第二船判官正六位上菅原朝臣清公、來到肥前國松浦郡鹿嶋、附驛上奏、事多不載、○丙辰、授從五位下紀朝臣廣濱從五位上、正六位上犬上朝臣望成、外從五位下、○庚申、近衛中將從三位勳二等坂上大宿禰田村麻呂爲參議、○辛酉、傳燈大法師位常騰爲律師、

蔡州汝南郡あり今の河南省汝南縣なり
 ○吐蕃、原本吐を咄に作る西本及類史に據て改む下同じ
 ○松浦郡鹿嶋、血鹿嶋の血字脱ちたるか或はシカツ嶋と訓むべく色都嶋を指せるか、信嘉嶋及色都嶋は天平十二年十一月紀(續紀上二九三頁)に見ゆ
 ○常騰、大和大安寺の僧弘仁六年九月辛未紀及元亨釋書卷二に傳見ゆ

日本後紀卷第十二

日本後紀卷第十三

起延曆廿四年七月盡大同元年五月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉 勅撰

皇統彌照天皇 桓武天皇

〔延曆廿四年〕上節刀、葛野麻呂は廿三年三月節刀を授けられて出發し廿四年六月歸朝此に之を返す
 ○常騰、六月辛酉紀に注す
 ○玄賓、考異に賓舊脱據類聚國史補さあり此人の事三月壬辰紀に注す
 ○美努摩内親王、紹運錄に彌奴磨に作る光仁天皇第三皇女母嶋姫縣主毛人女なり
 ○庇良嶋、抄に肥前國松浦郡庇羅郷、兵部式に肥前國庇羅嶋牧あり即今の平戸嶋なり
 ○遠值嘉嶋、今の五嶋列嶋中の福江嶋なるべし天平十二年十一月紀(續紀上二九五頁)に注す
 ○淦水盈溢、淦は玉篇に水入船中也さあり船中に水溢るゝを云

秋七月戊辰朔遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂上節刀、○丙子尾張國智多郡地十三町賜中納言從三位藤原朝臣内麻呂、○辛巳葛野麻呂等上唐國答信物、○壬午賜傳燈大法師位常騰、安暨玄賓等卅七人、并三品美努摩内親王度五十九人、每人三人已下一人已上、○癸未大宰府言遣唐使第三船、今月四日、發自肥前國松浦郡庇良嶋、指遠值嘉嶋、忽遭南風、漂著孤嶋、船居巖間、淦水盈溢、判官正六位上三棟朝臣今嗣等脱身就岸、官私雜物、不遑下收、射手數人、留在船上、纜絕船流、不知何去者、勅、使命以國信爲重、船物須人力乃全、而今不顧公途、偏求苟存、泛船無人、何以能濟、奉使之道、豈其然乎、宜加科責、以峻懲沮、○甲申、地

○珠洲郡、今も同じく珠洲郡と稱す
 ○不通水火、疾疫の傳染を恐れて水をも火をも與へざるを云
 ○匍匐、毛詩邶風谷風章に凡民有喪匍匐救之とあるに據れり匍匐は手足並行狀急遽之甚也と注す他事を捨て急ぎて之を救ふ意なり
 ○贈從四位下、原本贈を賜に作る紀略及下文に據て改む
 ○甘南備真人信影、信影の事紀略に之を清公の下に接叙す
 ○後田原、桓武天皇御父光仁天皇山陵なり
 ○崇道天皇、早良親王、天皇御同母弟延曆四年廢太子
 ○八月相樂郡、抄國郡部に相樂(佐賀良加)とあり今サガラと呼べり
 ○白田、島を云抄天地部に白田搜神記云江南之白田種豆(白田一日陸田和名波多介或以白田二字作二字訛也)とあり
 ○葛井親王、紹運錄に桓武天皇皇子母坂上春子大納言田村丸女とあり源平盛衰記に門居と書けり

震、○丁亥、常陸國人生部連廣成特授從八位下、以出私物、屢救貧民也、
 ○己丑、能登國言、舶一艘漂著珠洲郡、遣使檢船上雜物、○辛卯、賜親王已下參議已上及內侍唐國彩帛各有差、○壬辰、勅如聞疫癘之時、民庶相憚、不通水火、存心救療、何有死亡、父子至親、畏忌無近、隣里疎族、更復何言、亡者衆多、事在於此、宜諭所司、務存匍匐、若不遵改、隨卽科處、是日遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂授從三位、判官正六位上菅原朝臣清公從五位下、故副使從五位上石川朝臣道益贈從四位下、判官正六位上甘南備真人信影從五位下、道益者從三位中納言石足之孫、從五位上人成之子也、略涉書記、頗有才幹、美於風儀、卒於大唐、明州朝廷惜之、卒時年卅三、○癸巳、遣使奉幣於畿內名神、祈雨也、○甲午、獻唐國物于山科後田原崇道天皇三陵、○八月丁酉朔、山城國相樂郡白田十三町賜葛井親王、○癸卯、從五位下川原女王、上道朝臣千若授正五位下、正六位上安太女王、賀茂朝臣□女、從六位上縣犬養宿禰淨濱、丈尼或圖從五位下、正六位下小槻連濱名、服部三船、凡直古刀自、從

○丈尼或圖、西本圖字明白ならず
 ○古刀自、考異に古舊作右據下文訂とあり
 ○入唐求法僧寂澄、延曆廿三年七月出帆廿五年五月長門に著く即ち上京持來れる天台法門并眞言法門道具等を奉進す(叡山大師傳に詳なり)
 ○肆關、考異に關舊作開據類史訂とあり
 ○供奉師、內道場に供奉する十禪師を云
 ○豐山忌寸、詳ならず
 ○林朝臣、錄左京皇別に石川朝臣同祖武內宿禰之後也とあり
 ○中篠忌寸、詳ならず
 ○壹志濃王、十一月丁丑紀に傳あり
 ○太白、金星を云
 ○鎮星、土星を云
 ○紀朝臣真人卒、眞は原本直に作る系圖に據て改む真人は寶龜十一年正月癸酉紀に始て見え大學頭右京亮相摸守征東副使等を歷任す
 ○年五十九、年字は西本及類史に據て補ふ
 ○九月、賜親王以上衣、上恐くは下の誤なるべし
 ○壬申、類史に此下に曲

六位上朝野宿禰宅成、從六位下船連志賀、從七位上勝部造眞上、因幡國造苗取、正八位上平群黑虫、從八位下田邊史東女外從五位下、○乙巳、地震、是日請入唐求法僧寂澄於殿上、悔過讀經、寂澄獻唐國佛像、○丁未、傳燈法師位肆關、傳燈滿位僧景飭補供奉師、○壬子、賜正四位上藤原朝臣產子度二人、故入唐副使贈從四位下石川朝臣道益一人、安藝國賀茂郡地五十町賜仲野親王、○丙辰、從五位下菅原朝臣清公爲大學助、○丁巳、攝津國人外從五位下豐山忌寸眞足附于右京、近江國人正六位上林朝臣茂繼肥後國人從六位下中篠忌寸豐次等附于左京、○己未、大納言正三位壹志濃王抗表請骸骨優詔不許、○癸亥、太白與鎮星見東方、常陸守從四位下紀朝臣真人卒、真人者、中納言從三位麻路之孫、正五位下廣名之子也、爲人溫潤、頗有文藻、歷官內外、無有毀譽、終以天命、卒時年五十九、○九月庚午、曲宴、賜親王以上衣、○辛未、施禪師等衣、○壬申、賜五位已上綿有差、○癸酉、左京人永嗣王等賜姓河上真人、○壬午、令僧寂澄於殿上行毗盧舍那法、○己丑、傳燈

宴の二字あり
○河上真人、姓氏錄及其
他にも見えず

○越前國小虫神、神名式
に越前國丹生郡小虫神社
あり

○十月、千葉國造、考異
に造舊脱據下文補さあ
り國造本紀に見えず千葉
は下總國千葉郡千葉郷あ
り是なるべし

○大私部、錄右京皇別に
開化天皇皇子彦坐命之後
也さありオホキサイは大
后にて皇后なり私を充て
たるは漢書張放傳注に私
官皇后之官さあるに據れ
り

大法師位常騰爲少僧都、從五位上、百濟王聰哲爲主計頭、從四位下、橘朝臣安麻呂爲常陸守、從五位下、大伴宿禰眞城麻呂爲能登守、○壬辰、奉授越前國小虫神從五位下、出雲國造外正六位上、出雲臣門起授外從五位下、○冬十月、丁酉、野鳥飛入殿中、○己亥、從五位上藤原朝臣繼彥爲左中辨、讚岐守如故、從五位下多治比真人今麻呂爲式部權少輔、從五位下安倍朝臣犬養爲大藏少輔、從五位上和氣朝臣廣世爲美作守、式部少輔大學頭如故、從四位下橘朝臣安麻呂爲備前守、從五位下巨勢朝臣諸成爲介、從五位下讚岐公千繼爲權介、○癸卯、正六位上笠臣田作、千葉國造大私部直善人授外從五位下、○甲辰、宴樂終日、賜五位已上錢有差、○丙午、從四位下勳三等三諸朝臣大原爲備前守、從四位下橘朝臣安麻呂爲播磨守、○甲寅、授入唐留學生无位粟田朝臣飽田麻呂正六位上、○乙卯、神祇伯從四位上多治比真人繼兄爲兼右兵衛督、○戊午、播磨國俘囚吉彌侯部兼麻呂、吉彌侯部色雄等十人配流於多嶺嶋、以不改野心、屢違朝憲也、○庚申、佐渡國人道公全成配伊豆

○官鶺、古は供御の鶺を
捕らしむる爲に官に於て
多くの鶺を飼はしめられ
たり之を云鶺養の事は神
武天皇の御製にも既に見
えたり

○鳥取驛、其地詳ならず
れ、佐倉町と白井町との
間に羽鳥あり是ならむか
さ云

○山方驛、埴生郡（今長
生郡に入る）山方郷にあ
り其地詳ならず、成田
町の附近なるべし

○眞敷荒海等驛、眞敷は
今香取郡大須賀村に大字
南敷あり此地なるべし荒
海は印播郡久住村大字荒
海はかさ云

○十一月、頃年之間云々、
三代格卷十七に延曆
廿四年十一月一日太政官
符官人等連署事に見ゆ

○若情懷、三代格に若の
上疑字あり
○不愜、原本愜を慥に作
る三代格に據て改む
○豈合得然、三代格豈下
に夫字あり
○榎撫、桑名郡にあり兵
部式に榎撫驛馬十疋と
見ゆ桑名驛の古名なるべ
しと云

○朝明、朝明郡にあり兵

國以盜官鶺也、廢下總國印播郡鳥取驛、埴生郡山方驛、香取郡眞敷、荒海等驛、以不要也、授正六位上安倍朝臣眞勝從五位下、奉爲崇道天皇寫一切經、其書生隨功叙位及得度、○癸亥、於前殿讀經三日、○十一月丙寅朔、制頃年之間、諸司諸國所進解文、官人等名下、或多不署、若情懷不穩、忍而默爾、爲當執見各殊、上下不愜、歟、縱使託事、應被勘問、則稱某甲不署解文、既備員品、豈合得然、自今以後、宜令盡署、其緣病及假使等類、隨即顯注、不得令名下空、有所疑涉、○丁卯、授唐人正六位上清河忌寸斯麻呂外從五位下、○己巳、山城國紀伊郡地一町賜典侍從四位下葛井宿禰廣岐、授無位紀朝臣弟魚正五位上、無位石川朝臣伊勢子從五位下、○壬申、先是伊豆國掾正六位上山田宿禰豐濱奉使入京、至伊勢國榎撫朝明二驛之間、就村求湯、有人與之、更復煖酒相飲、其後嘔吐、至伊賀國堺、豐濱從者死、豐濱情知毒酒、勤加療治、至京遂死、遣使左兵衛少志從六位下紀朝臣濱公勘問、无得、隱岐國人外從八位上服部松守采女外從五位下服部美船女等三人賜姓臣、○丁丑、大納

部式に朝明驛馬十疋傳馬五疋と見ゆ今三重郡朝日村の地なるべしと云榎撫朝明とは相距ること一里許なり

○勸問、原本問を之に作る西本に據て改む

○壹志濃王薨、補任延曆六年の下にも傳見ゆ延曆十三年十月中納言に、十七年八月大納言に任す

○大住郡、今中郡に入る

○淨村宿禰、續紀寶龜九年十二月庚寅支蕃頭袁菅卿に清村宿禰の姓を賜ふと見え姓氏録にも載す

○袁常照、原本袁を表に作る類史に據て改む

○延曆十八年三月廿二日格、詳ならず

○徽章、徵字は徽に作るべきか

○春科宿禰、姓氏録には見えす

○江頭、大江の渡邊なり國郡沿革考に攝津縣は初め西成郡雄伴郷に在り後江頭に遷す今天滿橋を古國府渡といひ終に其地を渡邊と稱すといふ時は江頭は此なること必せりと云

○坂本親王、桓武天皇皇子四品治部卿母川上貞奴

言正三位兼彈正尹壹志濃王薨、詔賜從二位壹志濃者、田原天皇之孫、湯原親王之第二子也、質性矜然、不護禮度、杯酌之間、善於言咲、每侍酣暢、對帝道疇昔、帝安之、薨時年七十三、○戊寅、停陸奥國部内海道諸郡傳馬、以不要也、○庚辰、曲宴、賜次侍從已上衣、相摸國大住郡田二町賜從四位下百濟王教法、○甲申、左京人正七位下淨村宿禰源言、父賜綠袁常照、以去天平寶字四年奉使入朝、幸沐恩渥、遂爲皇民、其後不幸、永背聖世、源等早爲孤露、无復所恃、外祖父故從五位上淨村宿禰晉卿養而爲子、依去延曆十八年三月廿二日格、首露已訖、儻有天恩、无追位記、自天祐之、欣幸何言、但賜姓正物、國之徽章、伏請改姓名爲春科宿禰道直、許之、○乙酉、遷攝津國治於江頭、許之、○戊子、坂本親王於殿上冠賜參議從三位坂上大宿禰田村麻呂、大藏卿從四位上藤原朝臣園人、少納言從五位下多朝臣入鹿等衣被、○甲午、攝津國人外從五位下出雲連廣貞等附于左京、○十二月、庚子、地震、○壬寅、公卿奏議曰、伏奉綸旨、營造未已、黎民或弊、念彼勤勞、事須矜恤、加以時遭灾疫、頗損農桑、今

○十二月、令得存濟、令字類史に據て補ふ

○卜部之委、考異に委舊作「委據」類史訂さあり字書に「委據」米薪芻之總名少曰「委多」積さあり神祇官の卜部の粟米を運び薪芻を採る男女を云るか

○斯丁、賦役令に凡仕丁者每五十戸一人以一人充「斯丁」義解に謂斯猶使也言給使於汲炊、字彙に斯與「斯同」史張耳傳斯養卒章昭曰折薪爲「斯炊」烹爲養さあり

○封祖、類史祖を租に作る古は相通す

○或國三箇日、類史三の上に役字あり考異に箇舊脱據類史補さ云

○神石、今も神石郡と稱す

○奴可三上惠蘇、三郡共に比婆郡に入る

○甲努、今甲奴に作る

○世羅、今も同じ

○三谿三次、二郡を合せて雙三郡と稱す

雖有年、未聞復業、宜量事優矜、令得存濟者、臣等商量、伏望所點加仕丁一千二百八十一人、依數停却、又衛門府衛士四百人、減七十人、左右衛士府各六百人、每減一百人、隼人男女各卅人、每減廿人、雅樂歌女五十人、減卅人、仕女一百十人、減廿八人、停卜部之委男女斯丁等糧、又諸家封祖、暫停春米、交易輕貨、又諸國貢調脚夫、或國役五箇日、或國三箇日、役限不均、勞逸各殊、須共役二日、以同苦樂、又備後國神石、奴可、三上、惠蘇、甲努、世羅、三谿、三次等八郡調糸、相換鍬鐵、又伊賀、伊勢、尾張、近江、美濃、若狹、越前、越中、丹波、丹後、但馬、因幡、播磨、美作、備前、備中、備後、紀伊、阿波、讚岐、伊豫等國、殊免當年庸、許之、是日中納言近衛大將從三位藤原朝臣内麻呂侍殿上、有勅、令參議右衛士督從四位下藤原朝臣緒嗣與參議左大辨正四位下菅野朝臣眞道相論天下德政、于時緒嗣議云、方今天下所苦、軍事與造作也、停此兩事、百姓安之、眞道確執異議、不肯聽焉、帝善緒嗣議、即從停廢、有識聞之、莫不感歎、○癸卯、免淡路國浪人今年調庸、○乙巳、廢造宮職、○己酉、施賜僧并宿侍五位以上大袍、

○弓削社、神名式に甲斐國八代郡弓削神社あり市川郷大門に祀る倭名抄には市川郷は巨摩郡に收む八代巨摩兩郡の境に近き地にあるを以て時代に依て或は甲に屬し或は乙に屬せしなるべし今西八代郡に屬す

○仲野親王、上に見ゆ

○畝火香山耳梨等山、畝火山は高市郡香山耳梨山は十市郡(今磯城郡)に入る)にあり三山鼎立す之を大和の三山と稱す

○僧綱言云々、三代格卷三に延曆廿四年十二月廿五日太政官符として載す

○延曆年中云々、國師を改て講師とせしは延曆十四年八月十三日なり

○限以六年、以字は西本及格に據て補ふ

○一同前格、三代格に格を符に作る

從五位下文室真人長谷爲周防守、○庚戌、從五位下和朝臣建男爲近江介、從五位下藤原朝臣友人爲播磨權介、○甲寅、從五位下岳田王爲甲斐守、外從五位下紀朝臣廣河爲阿波介、○乙卯、甲斐國巨麻郡弓削社預官社、以有靈驗也、河內國交野郡白田二町賜仲野親王、○丁巳、勅、大和國畝火、香山、耳梨等山、百姓任意伐損、國吏寬容、不加禁制、自今以後、莫令更然、○戊午、山城國乙訓郡白田一町賜大判事從五位下讚岐公千繼、○庚申、僧綱言、延曆年中改諸國國師曰講師、一任之後、不聽輒替、講說之外、莫預他事、欲能弘道教、以利人也、今聞、或身期老死、情無知足、既倦講席、何堪誨導、遂使汚法墮罪、背師弄資、加以當國司等、檢掌伽藍、諸寺綱維、趨走府廳、此非道俗異形、魚鳥殊性之意、伏望簡大智而任講師、舉小識而補讀師、限以六年爲期、其寺委寄講師、然則用人之策永存、媚俗之辱自息、勅、其講師年限、一依來請、但淺學之輩、未練戒律、年少之人、時聞違犯、宜簡年卅五已上心行已定、始終不易者補之、簡才用讓、申官經奏等、一同前格、若有自事銜賣、妄求俗學者、永從擯出、以懲後

○綱維、同に僧綱に作る

○揆情、原本揆を撰に作る三代格に據て改む

○大同元年、賜衣、類史衣を被に作る

○堅部使主、養老元年二月紀(續紀上一二四頁)に堅部使主石前見ゆ參看すべし

○阿倍小殿朝臣、天平神護二年三月戊午秦毗登淨足等十一人賜姓阿倍小殿朝臣、此に見ゆ(續紀下一三一頁)此に至て本氏に復せしなり此後國史に見えず

○攘災植福云々、三代格卷二に延曆廿五年正月廿六日太政官符應分、定年料度者數并學業、事あり植は三代格に殖に作る

○寂勝、三代格に寂を尤に作る

○有頓有漸、頓漸の二教ありとなり其名楞伽經に出づ頓教は頓に悟を開くことを得る教、漸教は漸次に修業して後に證果を得る教なり

○利樂、類史三代格樂を益に作る

○華嚴業二人云々、三代格に華嚴業二人並令讀五教指歸綱目、天台業二

輩、如綱維受囑、亦揆情論之、其讀師者、依舊用之、又部内諸寺者、講師國司、相共檢校、不得獨恣、

大同元年春正月丙寅朔、廢朝、聖躬不豫也、宴次侍從已上於前殿賜衣、

○庚午、右京人外從五位下堅部使主廣人賜姓豐宗宿禰、賜大法師永忠度二人、僧寂澄三人、治部卿四品葛原親王二人、○壬申、勅、永停五位以上進裝馬、○壬午、射、天子不御、左京人正七位上阿倍小殿朝臣眞直、從五位下阿倍小殿朝臣眞出等賜姓阿倍朝臣、○辛卯、勅、攘災植福、佛教寂勝、誘善利生、無如斯道、但夫諸佛所以出現於世、欲令一切衆生悟一如之理、然衆生之機、或利或鈍、故如來之說、有頓有漸、所有經論、所趣不同、開門雖異、遂期菩提、譬猶大醫隨病與藥、設方萬殊、共期濟命、今欲興隆佛法、利樂群生、凡此諸業、廢一不可、宜華嚴業二人、天台業二人、律業二人、三論業三人、法相業三人、分業勸催、共令競學、仍須各依本業疏、讀法華金光明二部經、漢音及訓、經論之中、問大義十條、通五以上者、乃聽得度、縱如二業中无及第者、闕置其分、當年勿度、省寮僧綱、相對案記、

一人令讀 大毗盧舍那經 一人令讀 摩訶止觀 律業二人並令讀 梵網經 若瑜伽聲聞地 三論業三人 二人令讀 三論 一人令讀 成實論 法相業三人 二人令讀 唯識論 一人令讀 俱舍論 あり

○羯摩四分律鈔、聖教目錄に四分律藏六十卷姚秦佛陀耶舍共佛念等譯あり

○立義、勅會論義の時論題に就て義を堅つる事を掌る故に亦堅り義も云南北二京の僧臨時に之を勤め宣旨を以て補す

○複講、複は類史に復に作る複講は複師なるべし複師は講師の講述せし所か再び講じて義理を明にする役、華嚴宗の僧職なり

○莫聽任用、三代格莫む不に作る

○兵部大輔正五位上、考異に上舊作下據上文訂あり

待有其人、後年重度、遂不得令彼此相奪廢絶其業、若有習義殊高、勿限漢音、受戒之後、皆令先必讀誦二部戒本、諳案一卷、羯摩四分律鈔、更試十二條、本業十條、戒律二條、通七以上者、依次差任立義複講及諸國講師、雖通本業、不習戒律者、莫聽任用、自今以後、永爲恒例、○癸巳、從四位下藤原朝臣仲成爲大和守、從五位上百濟王鏡仁爲河內守、從五位下紀朝臣南麻呂爲介、兵部大輔正五位上藤原朝臣繼業爲兼山城守、從四位下和朝臣入鹿麻呂爲伊勢守、齋宮頭從五位下中臣丸朝臣豐國爲兼介、從五位下藤原朝臣眞川爲尾張守、從五位下菅原朝臣清公爲介、從五位下路眞人年繼爲參河介、從五位下大枝朝臣菅麻呂爲遠江守、從五位下大宅眞人繼成爲駿河介、中納言從三位藤原朝臣內麻呂爲兼武藏守、近衛大將如故、從五位下桑田眞人甘南備爲介、從五位上安曇宿禰廣吉爲安房守、宮内大輔從五位上藤原朝臣道雄爲兼上總守、從五位下石川朝臣道成爲介、右衛士佐從五位下田中朝臣八月麻呂爲兼權介、外從五位下千葉國造大私部直善人爲大掾、參議從三位

○常陸守、西本に越前守に作る下文に三嶋眞人名繼爲越前守とあれば原本に従ふべし

○貞嗣、考異に貞舊作眞據上下文訂あり

紀朝臣勝長爲兼下總守、左兵衛督如故、從五位下藤原朝臣城主爲介、從四位下葛野王爲常陸守、主馬頭如故、左兵衛權佐從五位下安倍朝臣益成爲兼權介、大内記從五位下平群朝臣眞常爲兼近江權介、左衛士佐從五位下百濟王教俊爲兼美濃守、從五位上坂本朝臣佐太氣麻呂爲信濃介、侍從從四位下大庭王爲兼上野守、正四位下三嶋眞人名繼爲越前守、從五位下和朝臣氏繼爲越後守、從五位下紀朝臣百繼爲介、近衛將監如故、左少辨從五位下藤原朝臣貞嗣爲兼丹後守、外從五位下山田造大庭爲介、參議右衛士督從四位下藤原朝臣緒嗣爲兼但馬守、從五位下佐伯宿禰清岑爲介、内廐頭從五位下坂上大宿禰石津麻呂爲兼因幡介、從五位下作良王爲伯耆守、從五位下大中臣朝臣全成爲出雲守、從五位下安倍朝臣宅麻呂爲介、從五位下秋篠朝臣全繼爲石見守、從五位下藤原朝臣友人爲播磨介、中内記外從五位下出雲連廣貞爲兼美作權掾、從五位下藤原朝臣諸主爲備中守、外從五位下掃守宿禰弟足爲安藝介、從五位下紀朝臣國雄爲讚岐介、參議正四位下菅野

○承前出舉雜稻云々、此勅は三代格に見えず
○收半倍利、雜令に凡以稻粟一擧者云々不得過一倍其官半倍とある云
○延曆十四年、閏七月一日勅なり本紀及三代格卷十四弘仁元年九月廿三日官符甲に出で末文に但陸奥出羽兩國不在此限と見ゆ
○二月、從四位下藤原朝臣大繼、考異に下舊作、上據下文訂とあり

朝臣眞道爲兼大宰大貳、從五位下大野朝臣犬養爲肥前守、從五位下多治比眞人氏守爲介、從五位上高倉朝臣殿繼爲肥後守、從五位下小野朝臣木村爲豐前介、○甲午、勅承前出舉雜稻、收半倍利、法令恒規、不易之典、延曆十四年改率十束、利收其三、此欲民阜財用、俗期隆泰也、如聞富豪之輩、競求多得、貧弊之家、俱苦不贍、吏或愚闇、治乖清公、遂令百姓不免罄乏、倉廩徒致減損、革弊之途、於此爲切、加以收納官稻、不免死人、思彼孤遺、深以矜愍、自今以後、論定公廩及雜色稻、出舉息利、收半倍利、死者負稻、依舊免除、○二月丙申、外從五位下秦宿禰都伎麻呂爲少工、○丁酉、停造宮職、併木工寮、事務繁多、因加史生六員、合前十二員、從四位下藤原朝臣大繼爲伊勢守、神祇伯從四位下和朝臣入鹿麻呂爲兼常陸守、○甲辰、從五位上多治比眞人八千足爲少納言、從五位下安倍朝臣鷹野爲治部少輔、從五位下路眞人年繼爲兵部少輔、從五位下高澄眞人名守爲左京亮、從五位下大中臣朝臣諸人爲右京亮、從五位下佐伯宿禰鷹成爲參河介、外從五位下豐山忌寸眞足爲駿河介、從

○貞嗣、原本嗣を繼に作る上文考異の訂及補任に據て改む

五位下御長眞人仲繼爲伊豆守、從五位下大伴宿禰長村爲安房守、○丁未、勅准令、大宰大貳是正五位上官、宜改爲從四位下官、○戊申、從五位下藤原朝臣貞嗣授從五位上、○己酉、正六位上下道朝臣繼成、安都宿禰豐永授外從五位下、○庚戌、參議正四位下藤原朝臣繩主爲左大辨、近衛中將如故、正五位下御長眞人廣岳爲左中辨、從五位上藤原朝臣貞嗣爲右中辨、丹後守如故、從五位下石川朝臣清直爲左少辨、從五位下多治比眞人今麻呂爲右少辨、從五位下文室眞人乙直爲左大舍人助、從五位下紀朝臣岡繼爲右大舍人助、參議正四位下藤原朝臣繩主爲陰陽頭、左大辨近衛中將如故、從五位上和氣朝臣廣世爲式部大輔、大學頭美作守如故、從五位下藤原朝臣永貞爲少輔、從五位下紀朝臣良門爲大學助、從五位下藤原朝臣綱繼爲治部少輔、從五位下大春日朝臣魚成爲立蕃助、從五位下乙野王爲諸陵頭、從五位上藤原朝臣繼彥爲民部大輔、從五位下大伴宿禰久米主爲少輔、外從五位下日下部連得足爲主稅助、從四位下藤原朝臣仲成爲兵部大輔、從五位上藤

既彌留さあるに出づ病勢日に進みて彌々甚しく危篤留連するを云ふ
 ○復五百枝王本位、王は延曆廿四年三月免罪入京此に至て本位に復す
 ○水上真人川繼、延曆元年閏正月謀叛して伊豆に流されしが同廿四年三月罪を免さる
 ○藤原朝臣清岡、五百枝王と同時に免罪入京す
 ○延曆四年事、大伴繼人等藤原種繼を殺せるを云奉爲崇道天皇云々、此官符三代格卷三に見ゆ
 ○春秋二仲月云々、私記に或曰今以彼岸供佛蓋訪于此時さあり
 ○辨踊、孝經喪親章に孝子之喪、親也云々辨踊哭泣哀以送之さあり禮記檀弓下の注に辟(同辨)拊心也踊躍さあり
 ○劍橫、類史此下に奉東宮の三字あり
 ○故關、三關は延曆八年七月甲寅之を停廢す故に故關さ云
 ○正四位下藤原朝臣繩主、考異に正舊作、從下作上據上下文訂さあり
 ○散位從四位上、同に上舊作下據上下文訂

月別七日、讀金剛般若經、有頃天皇崩於正寢、春秋七十、皇太子哀號擗踊、迷而不起、參議從三位近衛中將坂上大宿禰田村麻呂、春宮大夫從三位藤原朝臣葛野麻呂、固請扶下殿、而遷於東廂、次璽并劍橫、近衛將監從五位下紀朝臣繩麻呂、從五位下多朝臣入鹿相副從之、遣使固守伊勢、美濃、越前三國故關、是日有血灑東宮寢殿上、○壬午、中納言從三位藤原朝臣內麻呂率參議正四位下藤原朝臣繩主、從四位下藤原朝臣緒嗣、從四位下秋篠朝臣安人、散位從四位上五百枝王等奉御、正三位藤原朝臣雄友、從三位藤原朝臣內麻呂、藤原朝臣葛野麻呂、從四位上五百枝王、正四位下藤原朝臣繩主、從四位上藤原朝臣園人、正五位下御長真人廣岳、從五位上藤原朝臣繼彥、石川朝臣河主、從五位下池田朝臣春野、藤原朝臣永貞、紀朝臣咋麻呂、息長真人家成、六位以下七人爲御裝束司、從三位藤原朝臣乙叡、紀朝臣勝長、從四位上吉備朝臣泉、從四位下藤原朝臣仲成、文室真人八太麻呂、正五位下藤原朝臣黑麻呂、布勢朝臣尾張麻呂、從五位上淡海真人福良麻呂、從五位

○御般、般は名義抄に斂の俗字さあり説文に斂は收也さありて御棺を云
 ○藤原朝臣黑麻呂、原本黒を里に作る類史に據て改む
 ○淡海真人福良麻呂、原本海を路に作る西本及類史に據て改む西本良を長に作る
 ○直雄、類史直を眞に作る
 ○宇多野、山城名勝志に宇多野在、仁和寺北十町許山間方十町餘悉原野也さ見ゆ
 ○上著服、十七日桓武天皇崩御十九日皇太子素服を著給ふ喪葬令に凡天皇爲本服二等以上親喪服、錫紵、義解に依儀制令天皇爲考妣、令條無文依式處分、也錫紵者細布即用淺墨染也さあり
 ○貴布、抄布帛部に貴布唐韻云帶(音與貴同)布名也唐式云貴布(楊氏漢語抄云佐與美乃沼能)さあり
 ○厚繒、字書に繒絲織物之總名古謂之帛漢謂之繒、説文繒與帛互用さ云
 ○百官初素服、考異に惣舊作初據類史一本訂さ

下路真人年繼、六位以下八人爲山作司、從五位下田口朝臣息繼、田中朝臣八月麻呂、六位以下六人爲養役夫司、從五位下安倍朝臣益成、外從五位下秦宿禰都伎麻呂、六位以下三人爲作方相司、正五位上大野朝臣直雄、從五位下百濟王教俊、六位以下三人爲作路司、發左右京五畿內近江丹波等國夫五千人、從三位藤原朝臣葛野麻呂、從四位上藤原朝臣園人、並爲權參議、○癸未、以山城國葛野郡宇太野爲山陵地、是日上著服、服用遠江賞布、頭巾用皂厚繒、百官初素服、西北兩山有火自焚、○甲申、有司言上、生年及重復日、並依故事停舉哀、不許、○乙酉、是夜月蝕之、○丙戌、日赤無光、兵庫夜鳴、是夜月蝕之、上謂公卿曰、奄丁酷疾、若眞湯火、今灾皆頻見、責深在予、但崇德消灾、著在前修、内外群官、勤匡治道、以補不逮、其近仗之甲、盡從脫却、其諸國關津、宜停其守、公卿言、近仗著甲、及固守關津、徃古恒制、不唯今日、報曰、大行天皇、聖德弘茂、海內清平、有何疑貳、喪服加甲、非所以枕伏草土、攀慕哀號者也、又固絕關津、令人擁滯、煩民害農、無深於此、宜下所司、咸以開通、○丁亥、行大

て初を惣に改めたるは非なり西本及類史何れも初さあり是日著服百官も初めて素服を著けしなり惣にては通ぜず

○生年、生年の干支に當る日なり

○重復日、篋篋内傳二に復日重日右二箇日取者善事吉照事凶とあり陰陽家の説行はれし以來舉哀を停むる例となりしなり故に有司之を言上せり

○酷疾、原本疾を疹に作る西本に據て改む

○大井比叡小野栗栖野、大井山は葛野郡、比叡小野栗栖野等は愛宕郡なり(比叡山は近江國なれど其西麓は愛宕郡に屬す小野栗栖野は宇治郡にもあれど其にはあらず)

○米粥、米の粥なり和名抄に唐韻云饘(加太賀由)厚粥也粥(之留加由)薄糜也とあり

○齊内親王歸京、親王歸京の式西宮記江家次第等に見ゆ

○(四月)誅人、左方右方の別あること此文にて明なり

○奉誅日、按に國風の誅詞を奏して御諡號を奉り

行天皇初七齋於京下諸寺是日、日赤無光、大井、比叡、小野、栗栖野等山共燒、煙灰四滿、京中晝昏、上以爲、所定山陵地、近賀茂神、疑是神社致、灾火乎、即決卜筮、果有其祟、上曰、初卜山陵、筮從龜不從也、今灾異頻來、可不慎歟、即自禱祈、火灾立滅、○戊子、新任國司、准公廨、四分之一、聽、賦、官稻、未及得分、有遷代者、於後任填納、○己丑、先是命所司、每日進米粥、勿進餘味、是日群臣固請進膳、從之、○癸巳、令大和伊賀兩國造行宮、爲齋内親王歸京也、○夏四月甲午朔、中納言正三位藤原朝臣雄友、率後誅人左方中納言從三位藤原朝臣內麻呂、參議從三位坂上大宿禰田村麻呂、侍從從四位下中臣王、侍從從四位下大庭王、參議從四位下藤原朝臣緒嗣、右方權中納言從三位藤原朝臣乙叡、參議從三位紀朝臣勝長、散位從四位上五百枝王、參議正四位下藤原朝臣繩主、從四位下秋篠朝臣安人等、奉誅曰、畏哉、平安宮、爾御坐、志天皇乃、天都日嗣乃、御名事、畏、恐、母、誅、白、臣、未、畏、哉、日本根子天皇乃、天地乃、共長久、日月乃共遠久、所白將去御諡、止稱白久、日本根子皇統彌照尊、止稱白久、止、恐、幸

しこと大寶三年十二月癸酉紀に大倭根子天之廣野日女尊(持統)慶雲四年十一月紀に倭根子豐祖交天皇(文武)と見え寶字二年八月紀に天應國押開豐櫻彦尊(聖武)天應元年十二月紀に天宗高紹天皇(光仁)と見えたれど誅詞は見えず其詞の見えたるは之を始とす

○畏哉、續紀宣命の例に據らば挂畏支とあるべし

○平安宮爾御坐志、西本安宮字との間二字許空白なるに據れば大字などありしか考ふべし坐字は原本座に作る西本に據て改む

○天都日嗣乃御名事、此語古例に據て書けるなるべし

○恐、幸、母、誅、白、臣、未、是美の誤か恐美とあるべきなり

○臣未、未は某なり

○日本根子天皇、日本根子と申すは御歴代の天皇の御通號なり

○所白將去、申しゆかむにて將來久遠に稱奉る意

○皇統彌照尊、纂輯御系圖にはスメイヤテリと訓みたれど皇統はアマツヒツギと訓べしスメにては

カシコミシスビマラスヤツコナニガシ
 恐、母、誅、白、臣、未、○庚子、葬於山城國紀伊郡柏原山陵、天皇、諱山部、天宗高紹、天皇之長子也、前史闕而不載、故具於此也、母曰高野太皇太后、龍潛之日、授從四位下、歷官侍從、大學頭、寶龜元年授四品、二年拜中務卿、四年爲皇太子、天宗天皇、心倦萬機、慮深釋重、遂讓位于天皇、初有童謠曰、於保美野、邇多太仁武、賀倍流、野倍能佐賀、伊太久那布美、蘇都知仁波、阿利登毛、有識者以爲、天皇登祚之徵也、天皇性至孝、及天宗天皇崩、殆不勝喪、雖踰歲時、不肯釋服、天皇德度高時、天姿嶷然、不好文華、遠照威德、自登宸極、勵心政治、內事興作、外攘夷狄、雖當年費、後世賴焉、○辛丑、行三七齋於山陵、○乙巳、從五位下大中臣朝臣眞廣爲神祇大副、從五位下藤原朝臣綱繼爲少納言、從五位下高村忌寸田使爲大外記、從五位下野倍王爲大監物、外從五位下道朝臣繼成爲主計助、中衛少將從五位下安倍朝臣兄雄爲兼內膳權正、從五位下石川朝臣魚麻呂爲左京大夫、從五位下藤原朝臣城主爲下總介、右衛士佐從五位下田中朝臣八月麻呂爲兼越後守、從五位下藤原朝臣伊勢人爲安藝守、○丙午、右大臣神

言葉足らず彌照はイヤテ
ラス訓べし聖德を稱讃
し奉れるにて天都日嗣の
御光を彌々かゞやかし給
へる意なり下文に遠照
威徳さある是なり
○柏原山陵、諸陵式に柏
原陵平安宮御宇桓武天皇
在山城國紀伊郡、陵墓要
覽に紀伊郡堀内村大字堀
内あり
○天皇諱山部、御諱以下
の事續紀には載せざるに
依て此に記し奉れるなり
そは續紀は延暦十三年及
十五年に奏上し天應元年
以降桓武天皇の御代の記
事は現代の事なれば撰者
注意して載せざりしは當
然の事なり故に其闕を補
はむが爲に此に記せるに
て後紀撰者の用意蓋し到
れり云べし
○感深釋重、天下の重任
を釋かむとする意
○於保美野邇云々、大宮
に直に向へる八重の坂痛
くな踏みそ土にはありこ
もなりヤヘノサカは靈異
記に山部之坂ありされ
ばヤの下麻字を脱せるか
大宮に直に向へるは大統
を繼ぎ給ふべき意をほの
めかし痛くな踏みそ土に

王等上啓曰、惟天爲大運、四序以授時、惟辟奉天、括三才而育物、故能據
龍圖而朝萬國、握鳳紀而撫八荒、斷業於是永隆、風聲所以自遠、大行天
皇、膺通三之嘉命、乘得一之昌期、籠軒昊而功成、躡殷周而治定、奄棄率
土、遘及登仙、徒仰弓劍、痛踰湯火、伏惟皇太子殿下、稟惟叡之神姿、承元
嗣之洪緒、誠孝過禮、哀慕靡追、神等遐觀、徃冊緬歷、前脩莫不俯就、弘規
式纂洪業、伏乞殿下、可割茶毒、而存至公、率典章而昇寶位、裁成四海、
字濟萬方、无任懇性之至、謹奉啓以聞、是日從四位下藤原朝臣緒嗣、
秋篠朝臣安人授從四位上、從五位上和氣朝臣廣世、石川朝臣河主正
五位下、從五位下平群朝臣眞常、池田朝臣春野從五位上、並以奉侍先
帝、兼監護山陵也、○丁未、无位和氣朝臣嗣子授從五位下、正五位下和
氣朝臣廣世之母也、廣世請以位讓母、上愍其志、故有此授、是日參議
從四位上兼行右衛士督但馬守藤原朝臣緒嗣、正五位下行侍從左兵
衛佐藤原朝臣嗣業等、返上先帝所賜別勅封三百戶、即令從五位下中
衛權少將兼春宮亮藤原朝臣眞夏勅曰、先帝特所賞封也、不可更納、○

はありさもは今は常の皇
子に坐せざやがて天にも
上りますべし心して
尊敬し奉るべしとなり土
に地にて天に對して云り
○内事興作、平安の奠都
を始め他の工事を指せ
り
○外攘夷狄、蝦夷を征討
して邊境を鎮定し給ひし
を云
○從五位下石川朝臣、考
異に五舊作四據上文訂
さあり
○左京大夫、下文五月壬
申左京大夫藤原朝臣大繼
見ゆ恐は誤あらむ
○四序、四季なり
○三才、天道地道人道な
り易繫辭傳下に出づ
○據龍圖、隋書經籍志に
先聖據龍圖、握鳳紀、南
而以君天下、さあり龍圖
鳳紀何れも天子たる徴の
符瑞なり
○八荒、八方荒忽極遠の
地なり賈誼過秦論に出づ
○斷業、断は字書に音鼎
鎗也、三足兩耳さあり
○通三、舊唐書音樂志に
得一流、芝罘通三御、紫
宸さ見ゆ
○徒仰弓劍、黃帝の上遷
後弓及劍のみ遺り居りし

戊申、行四七齋於佐比、鳥戶、崇福寺、是日遣右兵庫頭從五位下佐伯
王、左衛士佐從五位下百濟王教俊等、迎齋内親王於伊勢國、○己酉、遣
使奉幣於伊勢大神宮、以齋内親王歸京也、○辛亥、百官重復上啓曰、夫
令者、隨代垂制、臨時定議、依事改張、備於權宜、謹案禮家、先君崩、嗣子位
定於初喪、即位既明、无疑遵行、臣等今月十三日奉啓、率迪舊章、欲申禮
典、荼毒之始、不許所請、伏惟殿下、叡情天縱、孝心自然、哀痛攀慕、抑禮不
從、綸旨尙稱、令敷奏、每日啓、稽之禮家、當爲違失、求於人事、亦有不慥、臣
等愚情、竊懷不穩、伏望改令稱勅、使易施行、報曰、余小子未忍、即稱帝號、
然卿等數有上啓、義在難違、不果窮心、唯增摧感、是日正三位藤原朝臣
雄友、從三位藤原朝臣内麻呂爲大納言、從三位藤原朝臣乙叡、坂上大
宿禰田村麻呂、紀朝臣勝長爲中納言、從三位藤原朝臣葛野麻呂、從四
位上藤原朝臣園人爲參議、文章博士從五位下賀陽朝臣豐年爲兼陰
陽頭、從三位藤原朝臣葛野麻呂爲式部卿、正五位上三諸朝臣綿麻呂
爲播磨守、從五位下多朝臣入鹿、從五位下藤原朝臣眞雄爲近衛少將、

さいふ故事(史記封禪書及列仙傳に出づ)に據て斯く云り李白の飛龍引に鼎湖流水清且閑軒轅去時有弓劍と見ゆ

○割茶毒、茶毒は先帝を哀悼し給ふ苦痛を云

○字濟、字は字書に愛也とあり

○佐比鳥戸崇福寺、佐比寺(拾芥抄に佐井寺)は山城國紀伊郡、高戸寺(拾芥抄に法皇寺號鳥部野寺とあり)は洛東鳥部野、崇福寺(志賀寺とも云十五寺の一)近江國滋賀郡にあり

○越後介、考異に後舊作前據上文訂あり

○乙卯、同に乙卯以下十三字舊在丙辰條下今推干支改あり

○大安秋篠等寺、大安寺は大和國添上郡(今廢寺、村名なる)秋篠寺は同添下郡(今生駒郡平城村大字秋篠)にあり

○神王薨、補任寶龜十一年に傳見ゆ延暦廿五年をも參看すべし

○田原天皇、二品施基皇子、天智天皇の皇子なり

○左大舍人頭、考異に左舊脫據續日本紀一補とあり

從五位下安倍朝臣鷹野爲衛門權佐、右大辨從四位上秋篠朝臣安人爲兼左衛士督、從五位下紀朝臣百繼爲右衛士權佐、越後介如故、從四位下巨勢朝臣野足爲左兵衛督、下野守如故、從五位下紀朝臣繩麻呂爲佐、從四位下藤原朝臣仲成爲右兵衛督、兵部大輔如故、從五位下藤原朝臣山人爲主馬權助、○甲寅、從五位下安倍朝臣鷹野爲少納言、衛門權佐如故、從三位藤原朝臣乙叡爲兵部卿、中納言如故、近衛少將從五位下多朝臣入鹿爲兼武藏權介、中納言從三位坂上大宿禰田村麻呂爲兼中衛大將、○乙卯、行五七齋於大安秋篠等寺、○丙辰、少僧都大法師勝虞、大法師玄賓爲大僧都、律師大法師如實、大法師泰信爲少僧都、大法師永忠爲律師、正六位上錦部足人授外從五位下、○丁巳、攝津國住吉郡住吉大神奉授、從一位、以遣唐使祈也、侍醫外從五位下出雲連廣貞爲兼但馬權掾、外從五位下若江造家繼爲典藥、允是日右大臣從二位神王薨、詔贈正二位大臣者、田原天皇之孫、榎井親王之子也、天平神護三年授從五位下、及天宗高紹天皇登極、授從四位下、尙美

○高天彥神、神名式大和國葛上郡高天彥神社名神大月次相嘗新嘗とあり

○四時幣帛、二月新年六月十二月月次十一月新嘗祭を云

○吉野皇太后、蓋井上内親王、聖武天皇皇女光仁天皇皇后寶龜三年三月廢せられ同六年四月卒延暦十九年詔して后位を復す

○五月、疏潤天津、天津は晉書天文志に天津九星横河中一曰天津一曰天津江主四瀆津梁云々とあり皇族たるを云

○分景扶木、扶木は淮南子地形訓に扶木在陽州日之所躡(猶照也)とあり此は皇統に喩ふ景は日影、扶木は扶桑なり

○正五位上藤原朝臣繼業、考異に正舊作從據上下文訂

○從五位上百濟王、同上舊作下據上下文及類史訂あり

○天應元年有詔、天應元年二月丙午能登内親王薨去を申ふ詔(續紀下三六三頁)に見ゆ

○尙殿、後宮職員令に尙殿一人掌供奉與繳膏沐

弩摩内親王爲左大舍人頭、延暦初授正四位下、除彈正尹、十二年授從三位、拜中納言、十五年轉大納言、拜右大臣、性恭謹少文、接物淡若、雖居顯貴、克有終焉、時年七十、○己未、大和國葛上郡正四位上高天彥神預四時幣帛、緣吉野皇太后願也、○壬戌、行六七齋於崇福寺、○五月甲子朔、諱和上表曰、臣聞崇高者、天理忌其滿盈、卑下者、神道祐其謙虛、古今之攸同、聖哲之遺訓、臣諱疏潤天津、分景扶木、每以冲退爲心、悚懼爲念、今陛下龍德嗣興、鴻基紹構、萬物改旦、千齡配長、普天率土、沐浴恩波、凡厥臣子、孰不幸甚、唯臣之私情、宿懷降挹、事隨宜制、當在今辰、伏願陛下、納臣揆分之言、許捨親王之號、矜臣竭愚之志、垂同諸臣之姓、事君之道、無敢所隱、伏瀝中誠、實非外飭、无任懇款之至、謹奉表以聞、有勅不許、是日正五位下和氣朝臣廣世爲左中辨、大學頭美作守如故、從四位下吉備朝臣泉爲式部大輔、正五位上三諸朝臣綿麻呂爲侍從、播磨守如故、正五位上藤原朝臣繼業爲兵部大輔、從五位上百濟王聰哲爲越後守、從五位下安倍朝臣小笠爲介、○丁卯、勅天應元年有詔、從四位上五

燈油火燭薪炭之事さあ
 ○和朝臣家吉卒、續紀延曆二年正月戊子紀（下四〇一頁）に授女孺無位和史家吉外從五下（一）に見ゆると同人なるべし
 ○結保給之云々、保は戸令に凡戸皆五家相保一人爲長以相檢察勿造非違（二）とあるを云五家相保は後の所謂五人組制度なり結保は五家を結合せしめ之に對して正税を貸し若し逃亡者あれば五家を以て填補せしむるなり
 ○德被无方、易益卦の象傳に天施地生其益无方（三）あり
 ○化覃有截、有截は毛詩商頌長發章に海外有截箋に截齊也云々四海之外率服截爾齊也とあるに據り覃は字書に及也延也と注す
 ○至殷、殷は字書に衆也盛也とあり
 ○擬旒、旒は旒字の訛、旒は字書に冕旒以絲繩貫玉垂冕前後也とあり天子の禮冠の飾なり白虎通に垂旒者示不視邪と見ゆ擬は字書に嚴貌とあり

百枝爲二世王、而延曆四年有罪降貶、宜依先詔爲二世王、○戊辰、尙殿從四位下和朝臣家吉卒、○己巳、行七七御齋於寢殿、是日勅、今聞、頻年不登、民食惟乏、雖出舉公稻、而猶多阻飢、因茲私託民間、更事乞匭、報償之時、息利兼倍、遂使富強之輩、膏粱有餘、貧弊之家、糟糠不厭、宜賦正稅、濟彼絕乏、須差使實錄貧人、結保給之、若有亡者、令保內填、其情涉愛、憎、退弱進強、及補填未納、兼收私債者、發覺之日、必處重科、待民稍給、乃從停止、○庚午、奉讀大般若經於大極殿并東宮、是日群臣上表曰、臣等近稽之舊章、請以昇朝位、陛下不垂省納、未允翹誠、在於聖躬、實雖盡美、議諸凡厥、竊恐未安、豈有德被无方者、殉疋夫之小節、化覃有截者、略皇王之宏規哉、天下至大、庶政至殷、一日萬機、不可暫曠、伏願陛下、上念社稷之重、下從黎元之望、負宸臨朝、擬旒布政、則小大之心、允睦遠近之情、克諧國家、惟寧天下、幸甚、臣等請擇良辰、班示有司、不勝憂惶之至、謹詣闕以聞、勅、近省公卿等表、請以宗社事重、哀慟之情、不能弭忘、而再三敦逼、因依來請、其左右京并天下諸國、待大祓使到祓清、然後釋服、不得

○左京大夫、四月乙巳條に石川魚麻呂左京大夫と爲る何れか誤あらむ
 ○粟田朝臣鷹守卒、續紀天平神護二年十一月丁巳紀に始見、安房因幡甲斐上野長門肥後等國守及左兵衛佐大藏大輔主馬頭民部大輔大藏卿等を歴任す
 ○瓦葺粉壁、此文に據て當時驛館のみ瓦葺粉壁にて一般の民屋は然らざりしを知るべし
 ○散樗、散木樗櫟の略にて不才無用の義、莊子逍遙遊篇に出づ
 ○天潢之末流、字書に皇族曰天潢とありもと天潢を絶る八星の名なり史記天官書に出づ
 ○海南、延曆四年九月事に坐して伊豫に流されしを云（續紀下四四二頁注）
 ○周行、朝廷の列位を云毛詩周南卷耳章に出づ
 ○葵藿之誠、文選求通親親表に若葵藿之傾葉太陽雖不爲之廻光終向之者誠也とあるに據り君を慕ふ誠心を云葵は向日葵、藿は藿香にて共に草名なり
 ○春原朝臣、五百枝王は天智天皇皇子施基皇子の

因此飲宴作樂并著美服、○壬申、三品伊豫親王爲中務卿兼大宰帥、三品諱和爲治部卿、四品葛原親王爲大藏卿、三品諱峨爲彈正尹、左京大夫從四位下藤原朝臣大繼爲兼典藥頭、從五位下大中臣朝臣諸人爲伊勢介、○癸酉、散位從四位下粟田朝臣鷹守卒、○丁丑、勅、備後、安藝、周防、長門等國驛館、本備蕃客、瓦葺粉壁、頃年百姓疲弊、修造難堪、或蕃客入朝者、便從海路、其破損者、農閑修理、但長門國驛者、近臨海邊、爲人所見、宜特加勞、勿減前制、其新造者、待定樣造之、○己卯、從四位上五百枝王上表曰、臣稟散樗之微質、忝天潢之末流、世依寵昇、位非才授、叨榮過分、奉國無効、喜懼交并、□魂飛越、臣五百枝往年運值長險、忽放海南、自悲革命、永淪邊壤、而今猥蒙恩宥、重謁宸嚴、萬死百生、臣幸已足、況復列昔日之周行、飛故年之華蓋、扞躍之至、倍百恒情、但慮葵藿之誠、徒切、止足之道、未申、若不自新、恐贖戚族、臣誠檢舊章、諸王自願、改爲臣姓、依請聽之、伏望改此皇親、就彼臣氏、被賜春原朝臣姓、伏冀長沐霈澤、保終吉於一門、遠貽孫謀、榮宗枝於萬葉、無任懇情之至、謹詣闕庭、奉表以聞、勅

許之是日停獻諸國雜贄腹赤魚木蓮子等以息民肩也

支孫にて父は市原王なり
○停獻、獻字は類史に據て補ふ
○腹赤魚、抄龍魚部に鱧魚辨色立成云鱧(音宜波良可今案所出未詳式文用腹赤二字)さあり倭訓菜に和名抄に鱧魚をよめり新撰字鏡同じ江次第官曹事類風土記には鱧也さいへり腹黒の反なれば腹赤の贄を奏するも赤心の表示なるべしと云り
○木蓮子、抄果菰部に崔禹食經云木蓮子(和名以太比)箋注に按本草拾遺に薛荔一名木蓮さある是なりと云り

日本後紀卷第十三

(三條西家本奥書)

天文二五月命大史于恒宿禰令書寫同一校了

日本後紀卷第十四

起大同元年五月盡九月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉 勅撰

日本根子天推國高彥天皇 平城天皇

天皇諱安殿(桓武)皇統彌照天皇之長子、母曰藤原贈太皇太后(乙牟婁)寶龜五年生

於平城宮延曆四年十月、皇太子被廢、即立諱爲皇太子、及長精神聰敏、

玄鑒宏達、博綜經書、工於文藻、

大同元年五月辛巳、即位於大極殿、詔給諸社禰宜祝、及諸寺智行僧尼、

孝義人等、位一階、又五畿內鰥寡孤獨之不能自存者、給物、又免天下言、

上未納、改元大同、非禮也、國君即位、踰年而後改元者、緣臣子之心不、

忍一年而有二君也、今未踰年而改元、分先帝之殘年、成當身之嘉號、失、

慎終无改之義、違孝子之心也、稽之舊典、可謂失也、是日、叙位有差、○

壬午、追尊皇太后爲太皇太后、皇后爲皇太后、詔、彈正尹某定賜皇太

○奉勅撰、西本此三字缺

【即位前紀】日本根子天推國高彥天皇、紀略に天長元年七月甲寅(七日)平城天皇崩丙辰(九日)奉詔曰云々日本根子天推國高彥尊止稱白久止云々さあり

○平城天皇、西本日本根子云々の首に朱書せり
○天皇諱安殿、紹運錄に平城天皇諱安殿治四年母皇太后藤原乙牟婁贈太政大臣良繼女寶龜五年八月十五日降誕延曆四年十一月廿五日立太子(十二)同七年正月十五日元服(十五)同廿五年三月十八日受禪(三十一)同年五月十八日即位大同四年四月一日禪位同日尊號さあり
【大同元年】改元大同非禮也、私記に皇年代記和漢合符云本朝天子踐祚以前以禪讓而爲前代之

年臨即位是舊例也而我朝當年即位翌年改元爲流例一但禪讓之年即位改元又非無先例和銅八年九月元明天皇即位即日元正天皇即位改元爲靈龜也養老八年二月元正天皇即位聖武天皇即位改元爲神龜也天平廿一年四月聖武即位同年七月孝謙天皇即位改元爲天平勝寶也神護景雲四年八月稱德天皇崩同年十月光仁天皇即位十一月改元爲寶龜也德治三年八月後二條院崩同年十一月花園院即位々々之歲十月改元爲延慶也即位以前改元其例亦稀也又臨年不改元例天平寶字之年淡路廢帝即位不改元仁和三年宇多院即位不改元隔年爲寬平也云々

○慎終無改之義、論語學而篇に慎終追遠民德歸厚及三年無改於父之道可謂孝矣あるを云

○叙位有差、補任を參考すべし

○皇太后、原本太を大に作る西本に據て改む前後の太皇太后の太も亦同じ

○彈正尹某、原本某下に嵯峨の二字を分注す西本

弟、宮内卿藤原朝臣園人爲皇太弟傅、林宿禰沙婆爲學士、秋篠朝臣安人爲春宮大夫、○丁亥、始置六道觀察使、○己丑、勅公使之政、既立程限、私暇之期、必有日數、如聞諸國牧宰之輩、或就使入京、公務已畢、或緣事歸舍、暇日方滿、而經過宮闕、留連閭里、量彼景迹、不可不肅、又上下殊等、所掌各別、若長官出行、須佐職留守、而或有掾已上官、共離任所、付印主典、泰甚之至、一復如此、其奉使過限者、勸由申之、暇滿未來者、錄名同言、若隱忍不告者、事覺之日、准狀科附、不得阿容、○六月癸巳朔、山陽道觀察使正四位下藤原朝臣園人言、西海道年中入京雜使、其數繁多、而此道疲弊、殊於他塚、檢察其由、率緣迎送无息、不得顧私、伏望西海道府國五位已上、自今以後、自非秩滿解任者、不聽輒入京者、許之、是日勅池之爲用、必由灌溉、栗林之用、良爲得實、今諸國所有蓮池并栗林等、或決灌田之水、潤彼芙蓉、或占无實之林、寄言供御、如此之類、必妨百姓、宜遣使子細勘定之、又東宮舍人者、依令取蔭子孫及位子、儀容端正、工於書等者、補之、而頃年乖令、兼取白丁、宜改此例、一依令條、○戊戌、正三位守右

になし後人の加筆なること明なり故に除く

○園人、考異に舊脱據下文補あり

○六道觀察使、參議を以て之に任す翌二年四月參議を罷めて觀察使を置く是に於て八人とし五畿七道に各一人を置く

○泰甚之至、泰は太過也甚しきを云漢書黃霸傳に凡治道去其泰甚者耳あり

○若隱忍、若字は西本に據て補ふ

○六月、癸巳朔、考異に朔舊脱一代要記曰五月十八日辛巳據之推干支補云

○西海道年中入京云々、三代格卷七に見え入京を上都に作る

○伏望、格に望請に作る如く栗の林云

○芙蓉、抄草木部に爾雅云荷芙蓉郭璞曰芙蓉江東呼爲荷また爾雅云其子蓮也其中郭璞曰蓮謂房也ともあり

○東宮舍人者云々、軍防令に凡五位以上子孫年廿一以上見無役任者毎年京國官司勸檢云々式部隨

大臣兼行近衛大將藤原朝臣內麻呂上表曰、伏見群臣議奏、大臣食封增加千戶、所以崇優高德、歷代不易之典也、臣運遇聞泰、曲荷鴻貸、起歷等次、辱尸斯位、恩深寵盈、待灾人神、今復厚祿豐秩、一倍前數、物極則變、樂往哀來、臣之味德、不知所爲、伏請名帶二千、俟後來之賢臣、實食千戶、省素食之切責、率由懇衷、非敢詭飭、特願靈鑒、以降天從、无任慙款之至、謹奉表以聞、勅不聽、○己亥、公卿奏言、量事制宜、聖皇茂典、隨時分職、哲后良規、頃年令大宰府帶筑前國兼廢品官、庶存簡要、而今管攝多事、充用少人、伏望增置官員、得濟繁劇者、勅增加大少監大少典各一員、○辛丑、詔曰、尊祖追榮、先王之茂範、敦親贈號、曩哲之嘉猷、朕以菲薄、嗣守洪基、思欲率脩舊章、篤崇典禮、宜朕外祖父贈從一位內大臣藤原朝臣良繼、追贈正一位太政大臣、外祖母贈從一位尙藏安倍朝臣古美奈、贈正一位、又詔、藤原某朝臣追贈皇后、遣伊勢守藤原朝臣大繼等、告於皇后陵、皇后諱帶子、贈太政大臣正一位藤原朝臣百川之女也、帝在儲宮、納之爲妃、○壬寅、手詔曰、朕以庸虛、謬承先業、雖奉丕訓、猶暗政治、負重

○狀充大舍人及東宮舍人
 又同令に凡内六位以下八
 位以上嫡子年廿一以上見
 無役任者毎年京國官司
 勘檢云々儀容端正工於
 書字爲上等云々上等
 爲大舍人云々々々不足者
 通取庶子とある是位子
 なり
 ○大臣食封、祿令に太政
 大臣三千戸左右大臣二千
 戸あり
 ○鴻貸、字書に鴻は大也
 貸は寛免也とあり
 ○名帶二千、左右大臣の
 食封二千戸なるを云
 ○實食千戸、半減を請ふ
 なり
 ○素食、素は戸位素餐の
 素に同じく功無くして其
 位に居て其事を爲さず空
 く食ふなり
 ○天從、從は聽從なり
 ○慳款、字書に慳款は誠
 也と注す
 ○己亥、此條紀略五月に
 係く五月には己亥なし誤
 なり
 ○品官、官位令に見ゆる
 位階の相當ある官を云寶
 龜二年十二月筑前國司を
 廢して大宰府に屬せしむ
 守以下目以上廢官となれ

春氷、取喻方易、御朽、秋駕、比懼非難、伏惟先帝、括地宣風、統天立化、布堯
 心而撫育、垂禹泣而哀矜、謹讀延曆五年四月十一日詔下者、備諸國庸
 調支度等物、每有未納、交關國用、良由國郡司遞相怠慢、又茲政治、民多
 乖朝委、宜量其狀迹、隨事貶黜、所司宜作條例奏聞、公卿即依制旨、上一
 十六條事、自茲厥後、既經年所、空設憲章、未聞遵行、是則國郡官司不練
 之所致也、今爲行十六條、量置六道觀察使、道別一人、判官一人、主典一
 人、所以移風淳風、易俗雅俗、激揚清濁、黜陟幽明也、其事有大小、使有
 輕重、自非國由廢興、政關成敗、宜遣判官以下督察、兼復取所司清廉幹
 了、官差發檢、庶富之詞、聞諸先聖、安集之語、在於風人、凡厥使手、副朕
 意焉、又勅諸王及五位已上子孫、十歲以上、皆入大學、分業教習、依蔭出
 身、猶合上寮、經一選、大舍人、但情願、遂業者聽之、是日正三位守右
 大臣兼行近衛大將藤原朝臣內麻呂上表曰、臣瀝穎露丹、上表祈哀、叫
 闈之誠、靡遠、聽卑之意、未徵、是用跼影脩形、如真炎熾、鎖神驚魂、若履輕
 氷、臣內麻呂誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪、臣聞德薄位尊、功微賞重、古

るを云
 ○尙藏、後宮職員令に尙
 藏一人掌神靈關契供御
 衣服云々之事とあり
 ○皇后諱帶子、紀略に延
 曆十三年五月己亥皇太子
 妃諱帶子忽有病移木蓮
 子院頓逝とあり
 ○負重春水云々、文選王
 元長曲水詩序に念負重
 於春氷懷御奔馬於秋
 駕とあるに據る注に明
 君之治人若負重而履
 氷恐不勝其重懼見
 陷於氷若御奔馬於秋
 駕恐有覆敗也秋駕天子
 法駕也とあり御朽は尙書
 五子之歌篇に予臨兆民
 源乎若朽索之馭六馬と
 あるに出づ
 ○禹泣、劉向說苑君道篇
 に禹出見罪人下車問而
 泣之とあるを云
 ○延曆五年四月詔、續紀
 卷下(四五頁)及三代格
 卷七に見ゆ
 ○庶富之詞、論語子路篇
 に子適衛冉有僕子曰庶
 矣哉冉有曰既庶矣又何加
 焉曰富之曰既富矣又何
 加焉曰教之とあるを指
 せるなるべし
 ○安集之語、毛詩小雅鴻
 雁篇序に鴻雁美宣王也

人知其因濟、前哲誠其終凶、況乎累日駢時、人臣位極、超倫轢輩、寵光惚
 萃、訪諸天道、速屢之府、每興斯思、居榮爲感、雖知嚴命不可違、聖恩宜祀
 貳、而固陋之情、莫能自奪、非曰鳴謙、豈敢矯飭、伏乞曲廻鑒許、賜矜前請、
 臣之在生志願足矣、不任悚迫之至、謹重奉表以聞、手詔報曰、重省表、
 固辭益封、雖崇沖讓、未允情、何者堂高階遠、位尊祿厚、問古稽今、有因
 无替、其大臣者、望高端右、貴冠群后、禮數秩服、明載國典、又祿之所得、先
 哲不辭、況今日增戶、是復本數、明知此意、宜斷表請、○癸卯、律師永忠言、
 伏見公私齋會、預先備擬造食、或炎夏盛熱、鬱爛醜生、或正冬嚴寒、熱羹
 凍陵、遠近馳逐、糜費資財、飲食魚惡、不堪入口、元擬招福、反致譏嫌、伏請
 自今以後、一依本教、均平行食、施者心行平等、受者少欲知足、又佛法本
 意、深信肅清、設齋之日、必須飲食豐濃、不得輕尠不足、亦請頒示天下、曉
 諭百姓者、許之、○乙巳、奉爲先帝、度僧一百五十人、尼五十人、○辛亥、制、
 頃年追孝之徒、心存哀慕、事務豐厚、眩人耳目、各競求名、至於貧者、或賣
 却田宅、還滅家途、凡功德之道、信心爲本、因物多少、寧有輕重、宜誦經布

萬民離散不安其居而能勞來還定安集之至于矜寡無不得其所焉其あるに據れり
 ○風人、詩人を云風は毛詩國風の風なり
 ○諸王及五位以上子孫云々、學令に凡大學生取五位以上子孫云々爲之云々並取年十三以上十六以下聽令者爲之あるを十歳以上に改められしものなり
 ○瀝類露丹、類は款の誤なるべし瀝類露丹は誠款を瀝き丹心を披露するを云
 ○祈哀、訴衷の誤なるべきか
 ○叫開、原本叫を叩に作る西本に據て改む開は宮門なり門衛に取次きを乞ふを云
 ○聽卑之意未微、聽卑は天は卑に聽く意にて内麻呂の上表を聽納せられざるを云
 ○是用云々、恐懼措く所を知らざるを云
 ○因濟、因は岡の誤なるべし岡は岡也岡濟は成すこと無きを云
 ○惣率、原本率を華に作る類史に據て改む

施者親王、一品商布五百段已下、二品三百段已下、三品四品各二百段已下、諸王諸臣、一位五百段已下、二位三百段已下、三位二百段已下、四位一百段已下、五位五十段已下、六位已下卅段已下、宜依件差莫令相超、又世俗之間、每至七日、好事修福、既無紀極爲弊不少、宜三七日、若七七日、一度施捨、其非商布者、亦宜准此數、○閏六月己巳、勅、王臣神寺、占山河海鳴濱野林原等者、從乙亥年、暨于延曆廿年、一百廿七歲之間、或頒詔旨、或下格符、數禁占兼、頻斷獨利、加以氏氏祖墓及百姓宅邊、栽樹爲林等所許步數、具有明文、又五位已上六位已下、及僧尼神主等違犯之類、復立科法、今山陽道觀察使參議正四位下守皇太弟藤原朝臣園人言、山海之利、公私可共、而勢家專點、絕百姓活、愚吏阿容、不敢諫止、頑民之亡、莫過此甚、伏望依慶雲三年詔旨、一切停止者、今如所言、則知徒設憲章、曾無遵行、率由所司阿縱、而令百姓有妨、宜一切收入、公私共之、若有犯者、依延曆年中格、一无所有、自今已後、立爲恒例、但山岳之體、或於國爲禮、漆菓之樹、觸用亦切、事須蕃茂、並勿伐損、其菓實者、復宜相共、

○速屋之府、速屋は尙書太甲篇中に出づ召罪なりと注す
 ○祖貳、祖は祇に同じ祇は敬也貳は副益也とあり敬みて御心に副ひ奉るを云
 ○鳴謙、易謙卦六二に鳴謙貞吉とあるに出づ謙遜の意
 ○表口、恐くは表請或は表は來の誤にて來請なるべし
 ○沖讓、字書に沖は虛也と注す謙退なり
 ○端右、朝端國右の略にて朝廷の首臣の義既に注せり
 ○今日増戸云々、此文に據るに是より先令制より封戸を減せられしを是に至りて本數に復せられしなり
 ○讓生、字書に凡物腐敗而生白花者皆曰讓とあり
 ○凍陵、陵は凌に同じ字書に積氷曰凌とあり
 ○亦請、亦字類史になし
 ○閏六月己巳、此二字原本なし三代格に六月八日とあるに據て補ふ
 ○凍三代格卷十六に大同元年閏六月八日太政官符とて之を載す
 ○神寺、神社と佛寺なり格諸寺に作る
 ○乙亥年、天武天皇四年なり
 ○數禁占兼、原本禁字缺け占兼を兼占に作る禁は三代格に據て補ひ占兼は西本及格に據て改む
 ○百姓、百の字は三代格に據て補ふ
 ○爲林等、原本等を口寺とす三代格に據て改む
 ○諫止、原本陳正に作る三代格に據て改む
 ○伏望、三代格望を請に作る
 ○慶雲三年詔旨、同年三月十四日詔に氏々祖墓及百姓宅邊栽樹爲林并周二三十許歩不在禁限とあり
 ○所言、三代格言を申に作る
 ○阿縱、原本縱を從に作る西本及三代格に據て改むおもれりゆるすを云
 ○延曆年中格、延曆十七年十二月八日格なり三代格卷十六に載す
 ○菓實者、者字は三代格に據て補ふ
 ○又山城國、考異に又舊作人據類聚三代格訂とあり格には壤に作る
 ○寄語有要、原本寄語を語寄に作る西本及三代格に據て改む
 ○廢勘解由使、天長元年九月に復置、此より後常職となる

又山城國葛野郡大井山者、河水暴流、則堰堤淪沒、採材遠處、還失灌漑、因茲國司等量便、禁制河邊、无令他斫、諸國若有斯類者、不論公私、不在收限、其寄語有要、輒占无要者、事覺之日、必處重科、○丁丑、廢勘解由使、
 ○戊子、賜諸道觀察使印、

○在田郡、靈異記に安謐郡荒田村見ゆ在田の郡名は此に取れるなるべし
 ○營構者、私記に此上世新天子不營御舊宮之徵

○秋七月壬辰朔、北陸道觀察使右大辨從四位上秋篠朝臣安人爲周忌御齋會司、○乙未、勅關津之制、爲察衆違、苟有阿容、何設朝憲、今聞長門國司、勅過失理、衆庶嗷嗷、自今以後、不得更然、若有違犯、特賞重科、○戊戌、勅、今聞畿內勅旨田、或分用公水、新得開發、或元墾墾地、遂換良田、

文德天皇朱雀天皇紀亦
有左契云云下文亮
陰之後更建新宮古往今
來以爲故實云云然於今
上古より當時に至る迄新
帝の御代に必ず宮殿を新
に建造せられし事明なり
○漢代露臺云々、漢書文
帝紀贊に帝嘗欲作露臺
召匠計之直百金上曰百
金中人十家之產也吾奉
先帝宮室常恐差之何以
臺爲云云
○非一木之枝、同叔孫通
傳贊に語曰廟廟之材非
一木之枝云云あるに據れ
り
○掄揚郁烈、文選兩都賦
序に雍容掄揚とあり稱譽
を云なり
○亭毒、老子に出づ化育
の意既に注す
○齋載、中庸に出づ覆載
と云に同じ既に注す
○舛疊、漢書司馬相如傳
（上林賦）に舛疊布寫、注
に舛疊盛作也とあり
○激大雅之風、激は發也
感也雅は正也
○道融有載、有載は毛詩
商頌長發章に海外有載、
箋に載齊也云々四海之
外率服載爾齊也とあり融
は通也

加以託言勅旨、遂開私田、宜遣使勸察、若王臣家有此類、亦宜同檢、改
紀伊國安諦郡爲在田郡、以詞涉天皇諱也、○壬寅、聽以白丁百人補東
宮舍人、永以爲例、勅如聞、民部省所收戶籍、遠近紛雜、觸事多煩、宜一
依令條、庚午年并五比籍之外、依次除之、○甲辰、詔曰、此公卿奏、日月云
除、聖忌將周、國家恒例、就吉之後、遷御新宮、請預營構者、此上都先帝所
建、水陸所湊、道里惟均、故不憚靈勞、期以永逸、棟宇相望、規模合度、欲使
後世子孫、无所加益、朕忝承聖基、嗣守神器、更事興作、恐乖成規、夫漢代
露臺、尙愛十家之產、大厦層構、亦非一木之枝、朕爲民父母、不欲煩勞、思
據舊宮、禮亦宜之、卿等合知朕此意焉、於是百官奉表拜賀曰、亮陰之後、
更建新宮、古往今來、以爲故實、臣等准據舊例、預請處裁、伏奉今月十三
日勅、俯朕爲民父母、不欲煩勞、思據舊宮、禮亦宜之、臣等忝聞綸旨、載喜
載悲、誠以孝子充成父志、遂昌堂構者也、凡厥百僚、幸々甚々、臣聞、明王
軌俗、溫恭寅懷、哲后經邦、澹泊爲德、伏惟皇帝陛下、聲韜嗣禹、業劭纂文、
順稟成規、掄揚郁烈、亭毒被於萬品、燾載苞於兩儀、玄功舛疊、而激大雅

○无垠、垠は字書に界限
也とあり
○雲構非加、文選王元長
曲水詩序に虛擔雲構、注
に雲構言高與雲齊也と
あり大厦を云非加は更に
手を加へざるを云
○梓東海菴、梓は字書に
俗弄字とあり
○伐南山竹、漢書公孫賀
傳に南山之竹不足受我
辭とあり南山の竹を伐
りて其に書くも書き盡さ
れずとあり
○鳧藻、後漢書杜詩傳に
出づ上下の和睦歡悦する
を云
○中内記、職員令に中務
省中内記二人掌同大内
記とあり
○八月、惟溝軫慮、惟字
疑くは推の訛ならむ推溝
は納溝と云に同じく孟子
萬章下篇に匹夫匹婦有
不與被髮舜之澤一者若
已推而內之溝中とある
に出づ軫は楚辭に痛也と
注す
○借度、借は憐の誤なる
べし
○日本書紀、日本書紀の
文字此に初て見ゆ但し嘉
祿元年卜部兼直所寫古語
拾遺奥書所引に書の字な

之風、神用周流、以布中和之樂、道融有載、化溢无垠、猗歎偉歎、盡善盡美、
仍恐環瀛之表、无擊壤歌、浹寓之涯、有向隅歎、遂乃苞軌貢璽、事從簡寘、
文書調役、務期單疎、雲構非加、省於梓匠、露臺輟作、愛費於金直、苔砌
之荒涼、再迎鳳蓋、栢梁之寂寞、重轉鸞輿、臣等就日喰和、望霓沐霈、持東
海菴、而无喻仰德、伐南山竹、而未足書恩、无任鳧藻之至、謹詣闕奉表陳
賀以聞、○庚戌、制、蔭子孫、先勸籍、後叙位、夫五位以上、冠蓋惟貴、子孫勸
籍、事涉細碎、自今以後、宜停勸籍、但冒名被蔭、登孫爲子之類、所司不存
檢察、若有此類、所貢官人、依法科罪、○壬子、廢中内記、○庚申、置内記史
生四員、○八月癸亥、詔曰、朕以眇眇、嗣奉丕基、負天下之重任、當海内之
深責、常以履水疚懷、惟溝軫慮、勵精克己、詳永至治、而誠未動天、卑聽罔
照、陰陽僭度、霖雨爲災、靜言厥咎、在予一人、或由政道不洽、仁風未靡、何
用招此漂損害、及黎元、夫股肱之任、燮理斯存、公卿宜扶輔朕躬、匡其不
逮、共除妖祥、庶答靈心、其百姓因水流失、資產者、量加支給、所須事條、具
狀奏聞、普告遐邇、知朕意焉、○甲子、免畿内被水害百姓調徭、其正稅者、

く一本にはあり
 ○宣政詞、考異に詞舊脱
 據神祇令補
 ○供幣帛、同に帛舊脱
 據神祇令補あり
 ○功德之興云々、此勅三
 代格卷三に見ゆ
 ○資財、考異に財舊脱
 據類聚國史補あり
 ○改替綱維、下文丁亥條
 に改補三綱とあるに同
 ○或賣或耕、考異に賣或
 二字舊脱據類史補とあ
 り
 ○名傳己寺、類史傳を稱
 に作る
 ○斯類、原本斯を期に作
 る西本類史及三代格に據
 て改む
 ○在弘道者、類史三代格
 在を存に作る
 ○葛野麻呂言云々、三代
 格卷八に大同元年八月廿
 五日太政官符と載す
 ○盡類爲穀、類はカヒな
 り穂のまゝなるを云諸國
 正税帳に類幾千束とあり
 穀はモミなり穀は何何
 十斛とあり古は種子には
 類を用ひたり故に盡く穀
 と爲しては種子辨じ難し
 と云り
 ○公廩利稻、考異に稻舊

聽明年納之、七道諸國、且令賑給、○庚午、先是中臣忌部兩氏各有相訴、
 中臣氏云、忌部者、本造幣帛、不申祝詞、然則不可以忌部氏爲幣帛使、忌
 部氏云、奉幣祈禱、是忌部之職也、然則以忌部氏爲幣帛使、以中臣氏可
 預祓使、彼此相論、各有所據、是日勅命、據日本書紀、天照大神閉天磐戶
 之時、中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞坂
 樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡、下枝懸青和幣白和
 幣、相與致祈禱者、然則至祈禱事、中臣忌部並可相預、又神祇令云、其祈
 年月次祭者、中臣宣祝詞、忌部班幣帛、踐祚之日、中臣奏天神壽詞、忌部
 上神靈鏡劍、六月十二月晦日大祓者、中臣上御祓麻、東西文部上祓刀、
 讀祓詞、訖、中臣宣祓詞、常祀之外、須向諸社供幣帛者、皆取五位以上卜
 食者充之、宜常祀之外、奉幣之使、取用兩氏、必當相半、自餘之事、專依令
 條、○己卯、武藏國獻白鳥、賜獲者伊福部淨主稻五百束、○壬午、勅、夫功
 德之興、因心各別、何則或甲構堂宇、乙寧得爲己、是以大小諸寺、每有檀
 越、田畝資財、隨分施捨、累世相承、崇敬至今、如聞王臣勢家、不顧本願、而

脫據三代格補とあり
 ○收類穀、同に類舊脱
 據類史補とあり三代格
 に類穀を糙の一字に作る
 ○糙、抄稻穀類に唐韻云
 糙、漢語抄云糙米毛美與
 禰一云加知之禰米穀雜
 也とありモミと米と相雜
 れるを云
 ○伏望、三代格望請に作
 る
 ○延曆十一年十一月廿八
 日格、本文見えず大同元
 年八月廿五日格中に見ゆ
 ○或佃寺田、三代格或を
 種に作る
 ○不事燃燈、三代格に不
 燃夜灯に作る
 ○經年、考異に年舊脱
 據類史補とあり
 ○三綱、上座寺主都維那
 を云
 ○而後若有犯者、而後若
 者の四字類史三代格に據
 て補ふ
 ○知而容隱、考異に而舊
 作寺據三代格訂とあり
 ○九月、功在一箇、努力
 少きを云箇は字書に土籠
 也とありモッコを云
 ○多壞、原本壞を懷に作
 る西本に據て改む
 ○山崎津、山城國乙訓郡
 淀川の沿岸なり催馬樂譜

追放檀越、改替綱維、田園任意、或賣或耕、名傳己寺、還致損穢、若有斯類
 者、五位已上錄名奏聞、六位已下禁身進上、又其檀越子孫、惣攝田畝、專
 養妻子、不供衆僧、宜簡氏中情在弘道者充、○乙酉、參議東海道觀察使
 從三位藤原朝臣葛野麻呂言、延曆十七年格、出舉正稅、給穀收穀、立爲
 恒例者、而今奉勅、稻有早晚、各任土宜、而盡類爲穀、種子難辨、宜本者收
 穎、利者納穀、不絕本穎、廻充種子、本稻之外、不得收穎、若有過限收穎者、
 國郡官司、科違勅罪者、今或國司等、偏執此格、公廩利稻、并年中雜用、皆
 悉令糙、其收穎穀之意、本爲遠貯、而今日勞糙、明年盡用、徒有民弊、曾无
 公益、伏望依延曆十一年十一月廿八日格、年中雜用并公廩等稻、不勞
 爲糙、以省民弊者、許之、○丁亥、勅、如聞七道諸寺檀越等、或佃寺田、不納
 租米、或費燈分稻、不事燃燈、或試用錢物、經年不還、或奴婢牛馬、役用私
 家、如此之流、觸類繁多、加以寺山樹木、任意斫損、愛憎自由、改補三綱、有
 一於此、豈謂檀越、從今而後、若有犯者、科違勅罪、國司三綱衆僧、知而容
 隱、亦與同罪、是月霖雨不止、洪流汎濫、天下諸國、多被其害、○九月癸巳、

に難波の海漕もて上る云々今少し上れ山崎までにごある是なり
○難破津、類史破を波に作る

勅、水之浸損積微爲害、屬于小決、功在一篋、而無人監修、致此多壞、宜衛門衛士府專當、左右京堤溝、勤加修補。○壬子、遣使封左右京及山崎津難破津酒家、以水旱成災、穀米騰躍也。

日本後紀卷第十四

日本後紀卷第十七

起大同三年四月盡四年四月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉 勅撰

天推國高彥天皇 平城天皇

夏四月^{壬子朔}甲寅、令山陰道觀察使正四位上兼民部卿菅野朝臣眞道攝行東海^三道事、山陽道觀察使正四位下兼皇太弟傳宮內卿藤原朝臣園人攝行北陸道事、右少辨從五位下大中臣朝臣智治麻呂爲兼神祇大副。○己未、從五位下紀朝臣咋麻呂爲中務少輔、從五位下安倍朝臣眞勝爲治部少輔、陰陽頭備中守如故、從五位下淡海朝臣貞直爲雅樂頭、從五位上菅野朝臣庭主爲木工頭。○甲子、內舍人廿人准少監物賜馬料。以出納官物也。○丁卯、有二鳥集於若犬養門樹枝上、接翼交頭俱死、終日不墜、遂爲人被墜、時人以爲北陸道觀察使從四位上藤原朝臣仲成、典侍正三位藤原朝臣藥子、兄妹招尤之兆也。○庚午、外從五位下飛

○平城天皇、西本此四字なし
【大同三年】內舍人、左右親近の官中務省に屬す、令制九十九人大同三年減じて四十人とす

○少監物、中務省に屬し相當正七位下
○馬料、式部式上に馬料錢七位官二貫三百五十とあり四季に之を給ふ馬を飼養する料なり其規程は式部式に詳に見ゆ
○若犬養門、拾芥抄中末に皇嘉門若犬甘氏造之號「雅樂寮御門」西端南面二條大路あり後の皇嘉門を云
○樹枝、紀略柳樹に作る
○交頭、類史及紀略頭を頭に作る

○俱死、考異に死舊作
飛據紀略訂あり
○終日、紀略經日に作る
苑、字類抄に園圃苑苑
圍以上同あり
○驛鈴遺云々、私記に一
作置職員令日少納言三
人掌奏宣小事請進鈴
印傳符進付飛驒函鈴兼
監官印、延喜主鈴式云凡
行幸從駕、內印并驛鈴傳
符等皆納、漆籠子、主鈴與
少納言共預供奉あり
○五月、但馬國
驛、詳ならず
○左大舍人助、考異云左
人助三字舊脱據下文補
○眞直、西本直を點に作
り本朝書籍目錄員に作る
○大同類聚方、本朝書籍
目錄に大同類聚方百卷安
部眞員出雲廣貞等奉勅撰
大同三年戊子成あり現
存類聚方卷首に此文及
前後の文を載するも後人
此紀に據て加ふる所にて
補修の文字極めて杜撰な
り故に採らず
○長桑妙術、長桑は扁鵲
に醫方を傳へし奇人、史
記扁鵲傳に出づ
○湯艾之治、湯は藥湯、
艾は艾炷即ち灸治を云
○太一秘結、雷公者號

驛國造祖門爲主計助、○壬申、淡路國飢、以播磨國穀賑給、○癸酉、從四位下、田女王卒也、○乙亥、幸神泉苑、賜五位已上衣被、○辛巳、驛鈴遺在廊下者自鳴、○五月壬午朔、曲宴、賜五位已上衣被、○癸未、廢但馬國三驛、以不要也、○甲申、先是詔衛門佐從五位下兼左大舍人助相摸介安倍朝臣眞直、外從五位下侍醫兼典藥助但馬權掾出雲連廣貞等撰、大同類聚方、其功既畢、乃於朝堂拜表曰、臣聞、長桑妙術、必須湯艾之治、太一秘結、猶資鍼石之療、莫不藥力迥助、拯殘魂於陸厄、醫方所鍾、續遺命於斷、雖一貫典墳、澄心願、猶復降懷、醫家汎觀攝生、乃詔右大臣、宜令侍醫出雲連廣貞等依所出藥、撰集其方、臣等奉宣修在尋詳、愚情所及、靡敢漏、成一百卷、名曰大同類聚方、宜授始訖、謹以奉進、但凡厥經業、不詳習、年代懸遠、注紀絲錯、臣等才謝稽古、學拙知新、輒呈管窺、當夥紕繆、不足以對揚天旨、酬答聖恩、悚慙之、墜氷谷、謹拜表以聞、帝善之、○丙戌、停馬射、以天下疫病也、勅、如聞大同元年、洪水爲害、餘弊未復、去年以來、疫病流行、橫斃者衆、顧彼困厄、深懷矜愍、恩施恩德、以慰黎烝、宜大同元年被水損七分已上戶、所舉正稅未納、悉從免除、是日曲宴、○戊子、幸神泉苑、令畿內七道諸國停貢相撲人、○己丑、遣使療治左右京病民、勅、去年用百姓之間、新錢未多、宜新舊列用、暫濟民乏、○庚寅、從五位下田口朝臣息繼爲右少辨、阿波守如故、從五位下藤原朝臣安繼爲雅樂助、從五位下紀朝臣貞成爲河內守、從五位下藤原朝臣伊勢臣爲齋宮頭、○辛卯、詔曰、朕以寡昧、虔嗣丕基、履薄如傷、黔首之隱、是恤、馭奔若厲、紫宸之尊、非寧、尅己思治、勵精施政、而仁無被物、誠未感天、自從君臨、咎徵斯應、頃者天下諸國、飢餓繁興、疫癘相尋、多致夭折、朕之不德、皆及黎元、撫事責躬、怒焉疚首、或恐政刑乖越、上爽靈心、漫汗煩苛、下貽人瘼、此皆朕之過也、兆庶何辜、靜言念之、無忘監寐、詩不云乎、民亦勞止、汙可小康、其畿內七道言上飢疫、諸國者、今年之調、宜咸免除、仍國司親巡鄉邑、醫藥營救、兼令國分二寺轉讀大乘一七箇日、左右京亦宜遣使普加振贍、庶幾爲善有効、濟困窮於畝糧、脩德不虛、返遊魂於岱錄、務崇寬惠、副朕意焉、○甲午、幸神泉苑、宴

太乙黃帝之臣也善醫術
○あり太一は太乙に同じ
きか
○鍼石之療、古治病の術
鍼は針なり鍼を以て病を
刺すなり石は砭石即ち石
鍼なり古へ砭石を以て病
を攻めたり今其術絶えたり
○陸厄、厄は危の訛なり
字書に近邊欲墮曰古故
言危曰陸危あり此語
漢書食貨志に出づ
○續遺命於斷口、續は原
本缺く西本及類史に據て
補ふ斷の下原本約三字缺
くるも西本には約十四字
缺けたり
○典墳澄心願、典墳は三
墳五典、即ち經典の意な
り願字疑くは願字の訛に
あらざるか
○水谷、覆薄水、臨深谷
の略、恐懼するを云
○顧彼困厄、考異云彼舊
作被據類聚國史訂
○黎烝、文選司馬相如封
禪頌に覺悟黎烝あり
烝は爾雅釋詁に衆也と注
す
○齋宮頭、原本齋を齊に
作る西本に據て改む
○履薄如傷、薄は薄水也
傷は類史傷に作る

日本後紀卷第十七 平城天皇 大同三年 五月 一〇七

○黔首之隱、黔首は人民、隱は痛なり民の苦痛を云
 ○馭奔苦厲、説苑に子貢問治民於孔子孔子曰懐々乎如以腐索御奔馬とあるに據れり厲は岸危處曰厲とあり奔馬を馭するこの危きが如しと云なり
 ○仁無被物、無以下九字西本缺
 ○黎元、類史黎庶に作る
 ○怒焉疾首、西本疾を疾に作る毛詩小雅小辨章に我心憂傷怒焉如擣云々心之憂矣疾如疾首注に怒は思也疾は猶病也云云疾或は疾の訛ならむか
 ○政刑乖越、政事刑罰のそむき違ふを云
 ○靈心、天の心なり
 ○漫汗、類史漫汗に作る
 ○貽人瘼、考異に瘼舊作瘼類史訂あり瘼は病なり
 ○監寐、後漢書劉陶傳に出づ注に監寐猶寐寐とあり類史には寤寐に作る
 ○詩不云乎、以下の二句は毛詩大雅民勞章の句、汜は箋に幾也とあり勞止の止は語助の辭なり
 ○醫藥營救、考異に醫舊

群臣賜錢有差、○乙未、從四位上巨勢朝臣野足爲兼近江守左兵衛督左京大夫如故、從五位下紀朝臣國雄爲介、式部大輔從四位下賀陽朝臣豐年爲兼下野守、從五位下谷忌寸野主爲土佐守、從五位下紀朝臣長田麻呂爲筑前守、是日、置筑前國守介掾大少目各一員、先是令府官攝行國政、彼此相讓、心非專一、事多廢闕、因茲改焉、○丙申、播磨國獻白鷄二、○戊戌、東宮奉獻、賜五位已上衣被、○庚子、從四位下民部大輔安倍朝臣枚麻呂以年老致仕、許之、山陽道觀察使正四位下皇太弟傅兼宮内卿藤原朝臣園人奏言、當道播磨備中備後安藝周防等五箇國、去延曆四年以降、廿四年已往、庸并雜穀等未進、其數不少、良由頻年不稔、人民彫弊也、今將追辨本色、國司則或死或替、相續難成、百姓則且病且飢、運進太難、伏望未進代、一收穎稻、混合正稅、庶於公無損、於私得便、但任觀察使以來、一依舊令、辨進、許之、○壬寅、奉黑馬於丹生川上雨師神、以祈雨也、從四位上吉備朝臣泉爲左大辨、左衛士督從四位上藤原朝臣仲成爲兼右大辨、從四位下藤原朝臣護麻呂爲右大舍人頭、

作將據類史訂あり營は類史療に作る
 ○振贖、類史振を賑に作る賑振相通す
 ○岱錄、岱は泰山なり博物志に泰山一曰天孫言爲天帝孫也主召人魂東方萬物始成故知人生命之長短とあり、岱錄は猶ほ鬼録と云が如し
 ○筑前國守、類史守を司に作る恐くは非
 ○各一員、各一は考異に二字舊脫據類聚三代格補とあり
 ○心非專一、心字原本闕字とす三代格に據て補ふ
 ○廢闕、原本闕疑に作る西本に據て改む
 ○本色、本の品を云
 ○雨師神、神名式に大和國吉野郡丹生川上神社とある是なり水神を祭り雨師と稱すること此に始て見ゆ雨師は周禮大宗伯に見え春秋緯に雨師は畢也(星名)と注し一説に共工氏之子爲雨師也といひ亦雨師謂之屏翳天神使也とも云
 ○月料、毎月の食料なり太政官式に凡親王以下月料云々毎月申官出充とあり續紀寶字五年二月丙

美濃守如故、從五位下雄川王爲散位頭、從五位上藤原朝臣繼彥爲治部大輔、右京大夫從四位下藤原朝臣藤繼爲兼兵部大輔、從五位上和朝臣建男爲少輔、侍從從五位下藤原朝臣世繼爲兼宮内卿、外從五位下山田連弟分爲内掃部正、從五位下藤原朝臣弟貞爲攝津介、内匠頭從五位上平群朝臣眞常爲兼尾張守、從五位下佐伯宿禰社屋爲美濃守、從五位下志可眞廣爲介、從五位下紀朝臣長田麻呂爲大宰少貳、從五位下大中臣朝臣鯛取爲筑前守、○甲辰、雨、群臣言、今日甘雨、不可不賀、皇帝曰、朕亦有此情、群臣稱萬歲、仍飲宴終日、有司奏樂、賜物有差、○乙巳、停有品親王月料、○己酉、從六位下坂上大宿禰大野授從五位下、正四位下安倍朝臣兄雄爲畿内觀察使、從四位上藤原朝臣緒嗣爲東山道觀察使、從五位下藤原朝臣安繼爲左大舍人助、從五位下安倍朝臣眞直爲右大舍人助、右衛士佐相摸介如故、從五位上藤原朝臣道雄爲治部大輔、從五位下藤原朝臣山人爲雅樂頭、但馬介如故、從五位上藤原朝臣繼彥爲民部大輔、從四位下藤原朝臣今川爲美濃守、從

長條を參看すべし

〔六月〕

○非據、易繫辭傳下に非所據而據焉身必危とあるに據れり
○負乘之咎、易解卦の六三に負且乘致寇至、象傳に自我致戎又誰咎也とあるに據れり
○量力就列、論語季氏篇に陳力就列不能者止とあるに據れり
○亡歿、原本亡を士に作る西本に據て改む

四位上藤原朝臣緒嗣爲陸奥出羽按察使、東山道觀察使右衛士督如故、從五位下佐伯宿禰社屋爲但馬守、從五位下坂上大宿禰六野爲陸奥鎮守副將軍、○辛亥、但馬國飢、遣使賑給、○六月壬子朔、曲宴、賜五位已上衣被、從五位下文室真人正嗣爲中務少輔、豐後守如故、從五位下雄川王爲大監物、從五位下大枝朝臣永山爲大學頭、從五位下紀朝臣昨麻呂爲散位頭、外從五位下山田連弟分爲伊賀守、東山道觀察使從四位上守刑部卿兼右衛士督陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣言、伏奉去月廿八日勅、以臣遷任東山道觀察使、兼帶陸奥出羽按察使、臣以弱庸、躡□非據、負乘之咎、年月積淹、今復恩寵崇重、方任加授、無所逃責、榮悚相交、臣聞簡才官人、聖上之通範、量力就列、臣下之恒分、臣性識羸劣、久纏疾痼、戎旅之圖、未嘗所學、而委愚臣、專總邊鎮、軍機多變、兵術靡常、若萬一有躡事、意相違、即非啻微臣之死罪、還亦國家之大勞也、當今天下困疫、亡歿殆半、丁壯之餘、猶未休息、是知民窮兵疲、而守不可止、忽有不虞、何用支防、又臣前屢言、軍事難成、今當其位、益知不堪、伏願

○高丘親王、平城天皇第一皇子、大同四年四月立太子、後之を廢す
○藤原朝臣乙叡薨、續紀延曆三年五月紀に始見、少納言右衛士佐中衛中將下總守信濃守等を歷任す
○而緣山臨水、原本而を馬に作る補任に據て改む、補任緣山臨水を緣山晴水に作る
○信宿、左傳莊三年に一宿爲舍再宿爲信とあり
○瀉酒、補任瀉を傾に作る

○發中之詔、文選羊祜表に出づ中は中心の意、心を感發せしむる詔を云

陛下、曲賜鑒察、特愍臣之駑駘、免有臨時之失、不任悚懼屏營之至、謹昧死奉表以聞、觸輕宸威、罔識攸措、○甲寅、山城國久世郡地六町賜高丘親王、散位從三位藤原朝臣乙叡薨、右大臣從一位豐成之孫、右大臣贈從一位繼繩之子也、母尚侍百濟王明信被帝寵渥、乙叡以父母之故、頻歷顯要、至中納言、性頑驕好妾、而緣山臨水、多置別業、以信宿之、必備內事、推國（奉）天皇爲太子時、乙叡侍宴、瀉酒不敬、天皇含之、後遣伊豫親王事、辟連乙叡、免歸于第、自知無罪、以憂而終、時年冊八、○己未、增九大宰府并管内諸國官人歷、以爲五年、停賜交替料、○庚申、從五位下多治比真人全成爲雅樂助、從五位下笠朝臣庭麻呂爲立蕃助、正五位下百濟王聰哲爲刑部大輔、越後守如故、從五位下紀朝臣良門爲大和介、鎮守將軍從五位下百濟王教俊爲兼陸奥介、從五位下坂上大宿禰大野爲權介、從五位上藤原朝臣清主爲左馬頭、從五位上坂上大宿禰石津麻呂爲右馬頭、外從五位下道嶋宿禰御楯爲陸奥鎮守副將軍、○壬戌、西海道觀察使兼大宰帥從三位藤原朝臣繩主上表曰、伏奉發中之詔、擢臣

○食封、大納言以上及從三位以上に之を賜ふ例なるが觀察使として特に之を賜ひしなり
○卿爲方牧、原本卿下者字あり衍なり西本及類史に據て削る方牧は觀察使を云

○蕃鎮、大宰帥を云

○分憂、晉書宣帝紀に天子加帝給事中錄尚書事帝固辭天子曰吾於庶事以夜繼晷無須臾寧息此非以爲榮乃分憂耳とあるに據れり

○忠肅之懿、左傳文十八年に忠肅共懿、注に肅敬也懿美也とあり

○橘樹、私記に禁祕御抄編年記拾芥抄所謂橘樹蓋是とあり禁祕抄に南殿橘遷都已前人家橘也康保二年正月廿七日仰左右近府被移と見ゆ

○安倍朝臣弟當卒、續紀寶龜四年正月紀に始見、主稅頭少納言大藏少輔右少弁左少弁下野守等を歴任す

○擁門、詳ならず

○莫男驛、兵部式に見えず今詳ならず

○道侯驛、同じく兵部式に見えず今の智頭町大字

爲西海道觀察使兼賜食封忝聞顯命恩越恒品心魂震奮啓處無地臣聞諸道觀察使任在內官更無外澤至于賜封固其宜矣於臣身居當道饒給公廩兼亦食邑偏濫殊甚又臣性識庸虛一無足取況乎奉使經歲政達未聞伏願奉返使封少免素飡區區丹愿伏待矜允謹遣少典正七位下臣山田造益人奉表以聞詔報曰忽省來表獨辭使封執志謙退聲溢時聽但遠出外州人之所苦卿爲方牧兼居蕃鎮思欲分憂同康景化忠肅之懿優賞斯期宜得此意無煩重表○甲子禁中有一株橘樹彫枯經日生意既盡忽生花葉楚楚可愛因茲右近衛府奉獻宴飲賜物有差散位從四位下安倍朝臣弟當卒正五位上勳五等船守之孫美作守從五位上意比麻呂之男也寶龜四年叙從五位下延曆廿年授從四位下清慎作性夙夜在公不過擁門無事資產家風也○壬申省因幡國八上郡莫男驛智頭郡道侯驛馬各二匹以不緣大略乘用希也東山道觀察使從四位上守刑部卿兼右衛士督陸奧出羽按察使臣藤原朝臣緒嗣言臣染疾已還年月久矣幸沐天地覆燾之恩遂荷聖明昌泰之運

智頭宿なるべしと云
○鴻私、鴻恩と云に同じ唐章懷太子請修書表に出づ
○平反所由、辭源に輕重酌中曰平盡翻舊案曰反謂廉察冤獄而出其罪也とあり平反の文字は漢書傳不疑傳に出づ
○方任、地方官の任務

○葛野河、類史河を川に作る古の京都は東西に分れ西の京は葛野川に近くして同川汎濫すれば其害を受けし故に特に其防禦に力を用ひられしなり

○御長真人、西本なし考異に四字舊脱據上下文訂とあり
○用印之事云々、公式令に内印五位以上位記及下諸司公文則印外印六位以下位記及太政官文案則印諸司印(謂省臺寮司等各皆有印也)上官公文及案移牒則印とあり
○右大舍人頭、考異に右舊脱據上文補とあり

臣至今日實賴鴻私臣聞定刑名決疑讞者刑官之職掌也然則罪之輕重人之死生平反所由最合留意又禁衛宮掖檢校隊仗者衛府之守局也然則以時巡檢臨事陳設若有闕失罪更寄誰是故快課拙常慮其難況今以庸愚當出遠鎮每思方任未遑內官豈帶宿衛遙臨邊要伏望解辭文武兩職且避賢路且專劣懷斯臣之中識匪敢外飾無任丹款懇切之至謹昧死奉表陳情以聞是日令有品親王并諸司把笏者進役夫各有差爲防葛野河也從五位下葛井宿禰豐繼爲右京亮從五位下大中臣朝臣魚取爲大和介從五位下紀朝臣百繼爲上野權介右衛士佐如故從五位下紀朝臣良門爲越後守○乙亥從五位下和朝臣男成爲大監物從五位下磯野王爲圖書頭駿河守如故從五位下永原朝臣最弟麻呂爲諸陵頭從五位下中臣丸朝臣豐國爲大炊頭從五位下雄川王爲正親正從五位下御長真人仲嗣爲左兵庫頭勅用印之事應據令格宜諸國觀察使印一從停止若事可行下准諸司請印○丙子內匠助從五位下安倍朝臣益成爲兼常陸介右大舍人頭從四位下藤原

○從五位下大中臣朝臣、同に下舊作上據下文訂あり
○民部卿、原本民を式に作る西本及補任に據て改む
○七月、畝野牧、攝津志河邊郡に東西畝野村あり是なるべし

○七夕、陰曆七月七日を云天河の東に織女あり此夜河西の牽牛耶と會す此傳ふ荆楚歲時記に見ゆ
○從五位上多治比真人、考異に上舊作下據上下文訂あり
○從五位下小野朝臣、同に從舊作正據上下文訂あり
○掃部□、□恐くは頭字なるべし

朝臣縵麻呂爲兼美濃守從四位下藤原朝臣今川爲越前守○己卯從五位下小野朝臣眞野爲少納言正四位上菅野朝臣眞道爲左大辨山陰道觀察使如故從五位下田口朝臣息繼爲左少辨阿波守如故神祇大副從五位下大中臣朝臣智治麻呂爲兼右少辨從五位下藤原朝臣承之爲大監物正四下藤原朝臣園人爲民部卿山陽道觀察使東宮傳如故從四位上吉備朝臣泉爲刑部卿○秋七月辛巳朔日有蝕之○甲申勅夫鎮將之任寄功邊戍不虞之護不可暫闕今聞鎮守將軍從五位下兼陸奧介百濟王教俊遠離鎮所常在國府儻有非常何濟機要邊將之道豈合如此自今以後莫令更然廢攝津國河邊郡畝野牧爲牧馬逸出損害民稼○丁亥幸神泉苑觀相撲令文人賦七夕詩○己丑從五位上多治比真人八千足爲少納言正五位下安倍朝臣鷹野爲內藏頭右近衛少將武藏守如故從五位下小野朝臣眞野爲木工助從五位上藤原朝臣眞雄爲主殿頭兼備前守右近衛少將如故從五位下紀朝臣岡繼爲掃部□正五位下布勢朝臣尾張麻呂爲攝津守右衛士佐從五

○土佐守、原本左を佐に作る西本に據て改む
○八屯之士、文選西京賦に衛尉八屯警夜巡畫注に衛尉帥吏士周宮外於四方四角立八屯士とあり屯は字書に聚也勅兵而守曰屯と見ゆ
○七華之卒、三代格華を奉に作る文選王元長曲水詩序に七華連鑑注に善日周穆王傳曰天子賜七華之士郭幾曰萃聚也とあり周代の禁衛軍なりと云
○奸宄、原本宄を究に作る三代格に據て改む宄は字書に姦也寇盜由内爲姦起外爲宄と見ゆ
○正始、三國の魏主芳、及北魏の世宗宣武帝の代の年號なれど吏員を減する事考ふる所なし
○建武、後漢書光武紀建武六年六月詔に省減吏員縣國不足置長吏可併合者上奏の由を命じ因て四百餘縣、吏職減損十置其一と見ゆるを云るか
○思從減省、原本從を隨に作る三代格に據て改む
○内膳司食長上一人、考異に八字舊脱據類聚國

位下紀朝臣百繼爲兼越前介從五位下大宅真人淨成爲土佐守○辛卯曲宴賜侍臣衣被○癸巳禁茹麥苗○乙未從五位下多治比真人全成爲大監物從五位下藤原朝臣承之爲縫殿助從五位上石川朝臣繼人爲立蕃頭從五位上藤原朝臣岡繼爲刑部大輔從五位下讚岐公千繼爲少輔備前權介如故從五位下藤原朝臣淨岡爲典藥頭是日詔曰八屯之士本斷窺覷七華之卒義在禦侮然則雖鉤陳所當事資不虞而變通之理不必守株今者巨猾無聞奸宄不興多置禁兵空備警衛靜而忖度孔無爲也正始之減吏員建武之省國邑蓋如此故也其七衛府雜任已下員伍稠疊思從減省卿等詳議定數奏聞○丙申勅陸奧鎮守官人遷代之期未有年限宜自今以後一同國司其醫師以八考爲限○庚子停內藏寮御履長上一人內膳司食長上一人料理長上一人藥師寺木工長上二人東大寺別勅長上一人金銀銅鐵長上一人西大寺木工長上二人法華寺一人秋篠寺一人○辛丑曲宴賜觀察使已上衾四位已上衣是日令內親王及命婦進堀

史補あり食長上及料理長上は内膳司膳部册人掌造御食さある内の人なり
 ○廢衛門云々、三代格之を廿日に係く廢合の理由は職員令集解に大同三年七月廿日官奏云々謹按令條禁衛宮掖以時巡檢斯衛士府之職也今衛門所掌復不異於此徒設官員事乖忙劇伏請一從廢省其諸門禁衛出入禮儀及門籍門勝等事同令衛士府主之然鞞負爲名年紀積久今廢彼混此雖不改文字號曰左右鞞負府之見えたり
 ○主帥、職員令に載せず
 ○門部、衛門府に門部二百人に見ゆる是なり
 ○門籍門勝、義解に載人名爲籍載物數爲勝さあり
 ○鞞負府、鞞負の名は天孫降臨の時大伴氏の祖天之押日命鞞を負て奉仕せしに因り
 ○八月加少屬一員云々、三代格其官奏を七月二十六日に係く
 ○佑一員使部二人、使部は十人中二人を減す
 ○元長官、官字は類史及

葛野川役夫各有差○壬寅廢衛門併左右衛士府廢衛士府主帥各六十人置門部各一百人其諸門禁衛出入禮儀及門籍門勝等事令衛士府主之仍號曰左右鞞負府其左右近衛及左右兵衛等府近衛兵衛元各四百人今定各三百人使部元各卅人今定各十人從五位下紀朝臣百繼爲左衛士權佐越前介如故從五位下安倍朝臣眞直爲右衛士佐相模介如故○丁未幸大堰賜五位已上衣被○八月庚戌朔曲宴賜五位已上衣被加太政官少納言一員併左右大舍人寮爲一、加少屬一員加內藏寮少允一員其隼人司依今年正月廿日詔書既從廢省併衛門府而衛門府併左右衛士府仍更置此司隸兵部省但廢佑一員使部二人加大藏省大丞大錄大膳職少進少屬各一員○壬子從四位下三諸朝臣綿麻呂爲大舍人頭右兵衛督播磨守如故從五位下藤原朝臣安繼爲助正五位下御長眞人廣岳爲宮內大輔勅齋宮寮之炊部司元長官一人而今改置長官主典宜准舍人藏部等司官位散位從四位下葛野王卒三品藤田親王之第四男時年卅

三代格に據て補ふ
 ○葛野王卒、延曆廿三年四月壬子紀に始見、主馬頭常陸守等を歴任す
 ○時年卅也、類史時上に卒字あり
 ○雜條、雜役なり賦役令に凡令條外雜條者每人均使摠不得過六十日義解に凡調庸之外國中諸事不論大小摠爲雜條其役法者准上條次丁減正丁之半中男減次丁之半也と見ゆ
 ○差役、木工寮に於て其工事に丁を雇ひて使役するを云賦役令に凡雇役丁者本司預計當年所作色目多少申官録付主計覆審支配七月卅日以前奏訖自十月一日至二月卅日内均分上役一番不得過五十日若月者不得過卅日云々あり
 ○貢調庸期限、賦役令に詳なり
 ○積習實亦、亦は久の詔なるべし
 ○齋内親王、大原内親王、帝第三女、大同元年十一月卜定
 ○九月大内人云々、兩宮儀式帳に大内人各三人

也○乙卯令諸國進條帳爲諸國雜條差役各殊也○庚申外從五位下難波連廣成爲內藥正○乙丑野狐窟朝堂院中庭常棲焉經十餘日而不見○庚午勅凡貢調庸期限已明至有違闕科條亦具而諸國司等不遵憲章多致闕怠積習實亦頓難懲肅宜後令條期各七箇月特莫効罪不得以此更爲合期○辛未幸神泉苑飲宴極歡賜五位已上綿各有差正五位下御長眞人廣岳爲左中辨從五位下大伴宿禰彌繼爲中務少輔從五位下小野朝臣眞野爲大監物從五位下藤原朝臣承之爲大藏少輔從五位下文室眞人正嗣爲齋宮頭豐後守如故從四位下紀朝臣廣濱爲美濃守右京大夫如故從五位下和朝臣雄成爲豐前從五位下紀朝臣百繼爲左衛士佐越前介如故○癸酉廢監物主典○乙亥齋內親王禊於葛野川即移入野宮○丙子夜左右兵庫鉦鼓自鳴○九月辛巳勅伊勢大神并度會二宮大内人各三員元是白丁自今以後宜預外考并把笏○癸未齋內親王向伊勢○甲申從五位下安倍朝臣眞直爲少納言右衛士佐相模介如故天文博士外從五位下志斐連國守爲

さあり大神宮式には各四人さす後一人づゝを増加せるなり
 ○大白、金星を云抄天地部に兼名苑云大白星一名長庚(此間由布都々々)暮見於西方爲長庚耳さあり
 ○招提寺、十五大寺の一、大和國添下郡都迹村字五條にあり
 ○荒陵寺、攝津志に東生郡四天王寺、天王寺村山號荒陵一名三津寺又名難波大寺さあり四天王寺を云
 ○妙見寺、拾芥抄下本に在王城四方又號靈巖寺歟さあり
 ○神通寺、大和志葛上郡神通寺村あり此地にありしなるべし
 ○穀倉院、拾芥抄中末に二條南朱雀西在大學西、納畿内諸國銅錢無主位職田及没官田大等稻等諸庄物云々さあり
 ○伊賀爾布久云々、如何に吹く風にあればか大嶋の尾花の末を吹結びたるなり大嶋は神泉苑の池中の嶋にて大さは尊稱なり依齋の説に其曰大者以御苑尊之也云云神泉

兼陰陽博士、從五位下中科宿禰雄庭爲主計頭、外從五位下犬上朝臣望成爲助、外從五位下飛驒國造祖門爲主稅助、從五位上多治比真人八千足爲大藏大輔、正五位下百濟王教德爲宮内大輔、從五位上高橋朝臣祖麻呂爲大膳大夫、安藝守如故、從五位下大原真人眞福爲備後守、○庚寅、大白晝見、○乙未、勅權入食封、限立令條、比年所行、甚違先典、其招提寺封五十戶、荒陵寺五十戶、妙見寺一百戶、神通寺廿戶、宜且納穀倉院、禁私養鷹、其特聽養者、賜公驗焉、○戊戌、幸神泉苑、有勅、令從五位下平群朝臣賀是麻呂作和歌、曰、伊賀爾布久、賀是爾阿禮婆可、於保志万乃、乎波奈能須惠乎、布岐牟須悲太留、皇帝歎悅、即授從五位上、勅、去五月詔書曰、言上飢疫諸國者、今年之調、宜咸免除者、然則遭疫國內、理須咸免、詔旨分明、不足致疑、今聞、或國司等、免見病之輩、徵未病之民、愚吏之失、還致民憂、宜早下知、莫令更然、其浪人調、并中男作物、亦准於此、○己亥、詔曰、官多則政驥、人少則事替、故省併量宜、委寄期要、昔諸司百寮、有閑有劇、是以資俸賞賜、或厚或薄、今官既從改、賞何依舊、宜要

苑は本朝文粹に禁苑之其一也さあり方八町ありて苑中に丘あり野あり池あり瀧ありて幽邃の地なり九月中旬に行幸あり賀是麻呂をして季秋の實景を詠しめ給ひしなり
 ○歎悦、類史歎を歡に作る
 ○飢疫、西本疫を病に作る
 ○要劇、官に繁閑あれば特に劇務に當る人に之を給す
 ○時服、春夏秋冬の四時に給ふ故に時服云諸司の長上番上に分ち上日を計算して二季に給ふ十二月より五月までを夏時服とし六月より十一月までを冬時服とす
 ○普給衆司、西本普を並に作る
 ○不四得六、田租の十分の四を免じて六を官に納むるを云
 ○河内等國、口は准字なるべし
 ○十月、左衛士坊、西本士坊の二字判明せず
 ○能登郡、今の鹿嶋郡
 ○越蘇、倭名抄に越蘇郷あり是なり兵部式に越蘇驛見ゆるは更に之を置か

劇馬料時服公廩悉革前例、普給衆司、詳爲條例、具以奏聞、○庚子、勅、去大同元年十一月六日格云、頻年不稔、民弊特甚、非有輕租、何得自存、伊賀、紀伊、淡路、三箇國田租、始自今年六箇年、收不四得六、亦今年三月十九日格云、收備後、安藝、周防等國田租、不四得六、有疑、通計宜、每戶立率、免四收六、莫用通計之法、○乙巳、大和國言、此國水田一萬七千五百餘町、河内、和泉兩國田一萬七千餘町、以此比彼、多少無異、而班田使員、已倍兩國、伏請、河内等國、省使員數、除民之弊、許之、仍省次官一人、判官二人、主典二人、○冬、十月己酉朔、宴五位已上、賜綿有差、從五位下佐伯王爲大監物、從五位下多治比真人全成爲縫殿助、大外記從五位下豐宗宿禰廣人爲兼主稅頭、山陰道觀察使判官、陰陽助如故、○乙卯、遊獵北野、布勢内親王奉獻、飲宴極日、有司奏樂、賜五位以上衣被、○丙辰、左衛士坊失火、燒百八十家、賜物有差、○丁卯、廢能登國能登郡越蘇、穴水、鳳至郡三井、大市、待野、珠洲等六箇驛、以不要也、東山道觀察使左近衛中將正四位下行春宮大夫安倍朝臣兄雄卒、從五位上粳虫之孫、

れしなるべし越蘇は後世江曾と書けり
 ○穴水、今の穴水町なり
 ○鳳至郡、抄國郡部に鳳至(不布志)とあり字類抄にフゲシと訓り今も亦同
 ○三井、三州志に三井郷見ゆ
 ○大市、詳ならず郡の西南仁岸阿岸二郷の地なるべし地理志料に云り
 ○待野、倭名抄に待野郷あり後に町野莊と稱す
 ○珠洲、珠洲郡珠洲郷なり後正院郷と稱す按に延暦廿四年紀に珠洲郡の名見えたれば珠洲の上に珠洲郡の三字脱ちたるか
 ○安倍朝臣兄雄卒、大同元年二月庚戌紀に始見、中衛少將内膳權正畿内觀察使等を歴任す
 ○耿介、志節ありて人ご苟合せざるを云
 ○座茵、紀略一欄に作る
 ○大津、輿地志略に志賀郡の境區にあり日本廣邑三十六のその一にして近江二湊(大津八幡)の第一なりと云
 ○大嘗散齋、山槐記に元曆元年八月十一日條に抑大嘗會潔齋元三月也而大

无位道守之子也、乏文堪武、性好犬、高直有耿介之節、所歷之職、以公廉稱、伊豫親王無罪而廢、當上盛怒、群臣莫敢諫者、兄雄抗辭固爭、雖不能得、論者義之、○庚午、群鳥集朝堂院東一殿、啄剥座茵、○乙亥、行幸近江國大津、修禊、以御大嘗也、○丁丑、制、稽於前例、大嘗散齋三月也、自今以後、以一月爲限、○十一月辛巳、從四位上秋篠朝臣安人爲右大辨、左大辨、正四位上菅野朝臣眞道爲兼大藏卿、從五位下谷忌寸野主爲內掃部正、左兵衛督從四位上巨勢朝臣野足爲兼春宮大夫、近江守如故、是夜有盜入內藏寮府、爲人所圍、時屬大嘗、恐其自殺、遣使告諭、投昏出去、○戊子、勅、如聞大嘗會之雜樂伎人等、專乖朝憲、以唐物爲飭、令之不行、往古所譏、宜重加禁斷、不得許容、○辛卯、奉幣帛於伊勢大神宮、以行大嘗事也、是夜、御朝堂院、行大嘗之事、○壬辰、於豐樂殿宴五位已上、二國奏風俗歌舞、賜五位已上物、及二國獻物班給諸司、○癸巳、宴飲終日、賜五位以上衣衾、○甲午、奏雜舞并大歌五節舞等、賜由貴主基兩國國郡司役夫物、各有差、是日、從五位下葛井王授從五位上、正六位上新

同三年改爲二月仍被載延喜式了と見え此事平戶記(仁治三年)にも見ゆ
 (十一月)以唐物爲飭、大嘗祭は純粹なる古風の祭祀にして其粧飾にも唐物を用ふべきにあらず然るに標山等に支那風の飾をなし弊風甚かりし故に此勅ありしなり
 ○御朝堂院行大嘗之事、大極殿の前庭龍尾壇上に大嘗宮を設けて祭祀を行はせ給ひしなり
 ○二國、悠紀主基の二國なり
 ○大歌、續紀天應元年十一月己巳の條(下三八一頁)に注す
 ○五節舞、上に注す
 ○兩國國郡司、考異に下國舊脱據類史補さあり
 ○賜五位已上措衣、類史賜の上に又字あり
 ○姉繼、考異に繼舊脱據類史補さあり

城王從五位下、從四位下三諸朝臣眞屋麻呂、藤原朝臣大繼從四位上、正五位上藤原朝臣繼業、正五位下安倍朝臣鷹野從四位下、從五位上高橋朝臣祖麻呂、藤原朝臣繼彥、藤原朝臣道雄、紀朝臣田上、藤原朝臣眞雄、正五位下、從五位下永原朝臣叡弟麻呂、大伴宿禰人益、石川朝臣繼人、三嶋真人年嗣、百濟王元勝、多治比真人今麻呂、紀朝臣繩麻呂、讚岐公千繼、藤原朝臣山人、安倍朝臣眞勝、大中臣朝臣智治麻呂、從五位上、正六位上大中臣朝臣弟守、紀朝臣越永、安倍朝臣寬麻呂、藤原朝臣弟葛、多朝臣人長、安倍朝臣清繼、齋部宿禰廣成從五位下、外從五位下秦宿禰都伎麻呂、外從五位上、正六位上名草直道主、外從五位下、賜五位已上措衣、○丙申、從四位上藤原朝臣緒嗣、吉備朝臣泉授正四位下、正四位上五百井女王、藤原朝臣勒子從三位、從四位下藤原朝臣藥子、正四位下、无位紀朝臣田村子從四位下、從五位上三善宿禰姉繼、无位伊勢朝臣繼子、正五位下、无位藤原朝臣佐禰子、從五位上、无位坂上大宿禰井手子、大中臣朝臣百子、藤原朝臣高子、藤原朝臣岡子、正六位上

○廣濱、西本濱を清に作る

栗田朝臣仲繼從五位下、從七位上尾張連眞縵外從五位下、○甲辰、從五位下大中臣朝臣常麻呂爲神祇大副、從五位下藤原朝臣弟葛爲陰陽助、正五位上大野朝臣直雄爲兵部大輔、從五位下谷忌寸野主爲主殿助、從五位下新城王爲內掃部正、從四位下藤原朝臣繼業爲左京大夫兼大和守、侍從如故、從四位下紀朝臣廣濱爲右京大夫、美濃守如故、從五位上藤原朝臣鷹養爲造、西寺長官、從五位下安倍朝臣清繼爲下野介、從五位上大中臣朝臣智治麻呂爲丹波守、左兵衛佐、從五位下藤原朝臣貞本爲兼但馬介、內藏助如故、式部少輔、從五位下御室朝臣今嗣爲兼出雲介、從五位下安倍朝臣清足爲美作介、從五位下大中臣朝臣弟守爲備前介、從五位下紀朝臣越永爲讚岐介、雅樂頭、從五位上藤原朝臣山人爲兼伊豫守、從五位上多治比真人今麻呂爲大宰少貳、從五位下巨勢朝臣諸成爲右兵庫頭、○丁未、右衛士坊失火、燒七十八家、賜物有差、○十二月戊申朔、曲宴奏樂、五位以上賜衣被、○辛亥、外從五位下日下部連高道爲造、酒正、從五位下伊勢朝臣繼麻呂爲園池正、助

〔十二月〕

○定額隼人、隼人式に凡番上隼人廿人有闕者取五畿内及近江丹波紀伊等國隼人幹了者申省補之不在給時服及糧之限とあり

○永原朝臣、姓氏錄に見えず永原は近江國野洲郡の地名なり是に據れるか六月乙亥紀に永原朝臣策弟麻呂見ゆ同姓なるべし

○丘山非重、莊子に丘山積卑而爲高と見ゆ

○奥郡、陸前國黒川郡以北を云
○作梗、字書に梗は塞也害也とあり
○韜略、軍略の意にて六韜三略の約語、崔日用並に羅隱の詩等に出づ
○朝廷之威、原本廷を庭に作る西本に據て改む

教外從五位下名草直道主爲兼越中權掾、○壬子、勅定額隼人、若有闕者、宜以京畿隼人、隨闕便補之、但衣服糧料、莫同舊人、特准衛士給之、其女者不在補限、○甲寅、大雪、宴飲終日、五位已上賜綿有差、○丙辰、從五位上藤原朝臣子伊太比、從五位上藤原朝臣惠子、賜姓永原朝臣、○甲子、東山道觀察使正四位下兼行右衛士督陸奧出羽按察使藤原朝臣緒嗣言、臣以空虛謬叨非據、司帶兩使、封食二百、兼復預武禁、寄備宿衛、荷恩則丘山非重、議勞則涓塵未効、心□神飛、罔知所厝、臣聞、擇才官人、聖上之宏規、量力取進、臣下之恒分、故名器無濫、授受惟宜、臣前數言、陸奧之國、事難成熟、至于今日、用臣委彼、退慮前言、益知不堪、加以今聞、國中患疫、民庶死盡、鎮守之兵、無人差發、又狂賊無病、強勇如常、降者之徒、叛端既見、因茲與郡庶民、出走數度、儻乘隙作梗、何以支擬、臣生年未幾、眼精稍暗、復患脚氣、發動無期、此病歲積、兼乏韜略、若不許賤臣、猶任其事、縱令萬一有失、非只臣身之伏誅、還紊天下之大事、然則上損朝廷之威、下敗先人之名、伏願皇帝陛下、更簡良材、以代愚臣、方隅之鎮、速寄

○封職、食封官職なり
○熟國、陸奥出羽の如く皇化に従はざる夷族ある國に對して人民のよく皇化になれたる國を云
○製錦之誠、製錦は左傳襄卅一年に子有美錦不使人學製焉大官大邑身之所庇也而使學者製焉其爲美錦不亦多乎あるに出づ製は裁也注す未熟の者に地方の政を委ぬるは美錦を裁方を辨へぬ者に裁たしむるが如しさいふなり此にては地方の政を預るを云

〔大同四年〕

○正月七日十六日兩節會、白馬節會と踏歌節會なり

○從五位下大伴宿禰、考異に下舊作上據類史訂あり

其人、臣生長京華、未閑宣風、望請咸返進所帶封職、被任熟國長官、且問百姓之苦、且療一身之病、雖製錦之誠、慙於前古、特願天鑒、紆光曲賜、矜允、無任兢懼、慙懇之至、謹奉表以聞、經黷嚴辰、伏深戰越、有勅不許、○戊辰、從六位下息長丹生真人文繼授從五位下、外從七位下日置臣登主外從五位下、无位笠朝臣道成從五位下、道成、皇太弟乳母也、特有此叙、○丙子、免伊賀國大同元年正稅未納一萬九千束、以水害殊甚、百姓彫弊也、

四年春正月戊寅朔、廢朝、風寒異常也、宴五位已上於前殿、賜物有差、正三位藤原朝臣內麻呂授從二位、○己卯、正四位下藤原朝臣藥子授從三位、○甲申、宴待臣賜衣被、○丁亥、令諸國停獻、正月七日十六日兩節會珍味、以煩民也、○壬辰、有犬登大極殿西樓上、吠、鳥數百群翔其上、○癸巳、春宮亮從五位下藤原朝臣冬嗣爲兼侍從、齋宮頭從五位下文室真人正嗣爲兼上總守、從五位下息長丹生真人文繼爲介、左近衛少將從五位下大伴宿禰和武多麻呂爲兼常陸權介、從五位下百濟王教俊

○名神、臨時祭式に載する名神祭に預り給ふ諸神なり

○三諸朝臣、紹運錄に二品長親王三世孫綿麻呂延曆十四年賜三緒(恐くは諸の誤)朝臣大同四年改賜三山朝臣同六月改三山姓賜文室真人なり

○二月、倭漢惣歴帝譜圖、當時此の如き譜圖ありて世に洽く流布せしなるべし故に之を沒收して姓氏の混亂を防がせ給ひしなり

○大原内親王、紹運錄に桓武天皇々女齋宮爲給ひ貞觀九年十月九日薨、母伊勢繼子あり
○中紫朝服、衣服令に諸臣禮服一位深紫衣三位以上淺紫衣朝服衣色同禮

爲下野守、從五位下谷忌寸野主爲豐後介、從五位下佐伯宿禰耳麻呂爲陸奥鎮守將軍、○乙未、令天下諸國爲名神、寫大般若經一部、奉讀供養、安置國分寺、若无國分寺者、於定額寺、○戊戌、曲宴奏樂、賜四位已上被、從四位上三諸朝臣眞屋麻呂、從四位下三諸朝臣綿麻呂等賜姓三山朝臣、○庚子、從五位下息長丹生真人文繼爲內藥正、上總介如故、從五位下多治比真人全成爲上總守、陰陽博士外從五位下志斐連國守爲兼因幡權掾、從五位下豐宗宿禰廣人爲肥後介、主稅頭大外記如故、從五位下文室真人正嗣爲豐後守、起從五位下安倍朝臣清繼復本官、○二月丁未朔、曲宴、賜四位已上被、○辛亥、勅倭漢惣歴帝譜圖、天御中主尊、標爲始祖、至如魯王、吳王、高麗王、漢高祖命等、接其後裔、倭漢雜糅、敢垢天宗、愚民迷執、輒謂實錄、宜諸司官人等所藏皆進、若有挾情隱匿、乖旨不進者、事覺之日、必處重科、○甲寅、山城國乙訓郡地六町賜大原内親王、○丁巳、宴五位已上、賜布有差、有勅聽右大臣從二位藤原朝臣內麻呂著中紫朝服、○己未、從五位上大中臣朝臣智治麻呂爲神

服さあり其中間の色を著せしめ給ひしなり

○清岳、三年七月乙未紀淨岡に作る

○佐渡、西本佐度に作る
○閏二月給要劇錢云々、三代格卷六に載す
○普給、原本普を善に作る三代格に據て改む
○每人給米二升、三代格に據るに人下恐くは日字を脱す原本升を舛に作る格に據て改む字書に舛背也云
○上日、出勤の日を云

○安部朝臣鷹野卒、大同元年二月甲辰紀に治部少輔と爲す見え下總守右衛門權佐少納言内藏頭等を歴任す
○時嬖臣激帝、時字は西本に據て補ふ嬖は左右の近習者なり
○大杖、獄令に杖皆削去節目ハシシ長三尺五寸訊囚及常行杖大頭徑四分小頭三分あり
○三月狼籍、籍は當に藉に作るべし

祇大副、從五位下藤原朝臣冬嗣爲右少辨、侍從春宮亮如故、從五位下安倍朝臣兄麻呂爲大監物、從五位下巨勢朝臣諸成爲圖書助、從五位下文屋真人正嗣爲陰陽頭、豐後守如故、從五位上安倍朝臣眞勝爲大學頭、備中守如故、從五位上百濟王元勝爲大判事、從五位下伊勢朝臣繼麻呂爲主殿助、從五位下水上真人河繼爲典藥頭、從五位下藤原朝臣伊勢人爲齋宮頭、正五位下坂田宿禰奈豆麻呂爲造東寺長官、從五位下藤原朝臣清岳爲筑後守、從五位下安倍朝臣眞直爲左近衛少將、侍從少納言如故、從五位下大中臣朝臣常麻呂爲右衛士佐、從五位下佐伯王爲右兵庫頭、○己巳、加少納言一員、中監物二員、少監物二員、○庚午、置佐渡、隱岐兩國掾各一員、○壬申、皇帝不豫、○閏二月庚辰、勅前例特簡劇官、給要劇錢、准其官位、多少有差、仍革前例、官無閑劇、皆令普給、但米價已貴、懸倍、往年依舊給錢、事乖隨時、加以食料之儲、豈有多少之異、改張前例、四位已下初位已上、每人給米二升、但觀察使不預此例、夫奉公之道、清慎爲先、無功之賞、廉吏所耻、宜細勘上日、依實申送、務從

正直、不得疎畧、○乙酉、令天下諸國進膺力人、○庚寅、廢減供御并年中雜用、諸司官人已下月料、○癸巳、屈清行僧廿人於内裏讀經、○丁酉、制越前國氣比神、豐前國八幡大菩薩宮司等、遷替之日、准國司與解由、○辛丑、始遷志摩國國分二寺僧尼安置伊勢國國分寺、○甲辰、外從五位下山田連弟分爲伊賀守、從四位下安部朝臣鷹野卒、鷹野者、從五位下猪名麻呂之子也、有仁慈之性、多所汲引、侍從中臣王連伊豫親王之事、經拷不服、時嬖臣激帝令加大杖、王背崩爛而死、○三月丁未、前上總介石川朝臣道成、大掾千葉國造大私部直善人、並授本位、道成從五位下、善人外從五位下、在任之日、賊汗狼籍、並追位記、矜有其老舊之勞、故付復焉、○癸丑、外從五位下犬上朝臣望成爲日向守、○甲寅、雷雨雹、○丙辰、從五位下大中臣朝臣常麻呂爲兵部少輔、右衛士佐如故、從五位上和朝臣建男爲駿河守、圖書頭從五位下磯野王爲兼武藏守、從五位上多治比真人八千足爲下總守、外從五位下難波連廣名爲丹波掾、○己未、始置左右兵庫史生各二員、内藥司二員、造兵司二員、鼓吹

○大藏省八員、考異に五字舊脱據類史補さあり
 ○坂本親王、桓武天皇々子なり
 ○丙寅、職員令集解に此符を載せて廿八日さす
 ○歌舞師四人、職員令に歌師四人、備師四人さあり
 ○笛師二人、令同じ
 ○唐樂師十二人、令同じ
 ○橫笛師二人、唐樂の橫笛師なり
 ○高麗樂師四人、令同じ
 ○橫笛箏篋莫目舞、橫笛は高麗笛(百濟樂師の下に横笛さあるは百濟の笛)箏篋は抄調度部音樂具に本朝格云箏篋師一人(箏篋俗云空古今案箏字未詳)また之と相並て箏篋を擧げたるが箋注の説に箏篋は堅篋と稱し箏篋は臥箏篋と稱するものなり云(續紀實龜八年三月戊辰紀を參看すべし)莫目舞は同じく抄に莫目本朝格云莫卒師一人(卒或作目俗云万玖毛)さあり
 ○百濟樂師四人、令同じ
 ○新羅樂師二人、令四人
 ○度羅樂師二人、令にな
 ○伎樂師二人、令一人、

司二員、隼人司二員、囚獄司二員、織部司二員、内膳司二員、主水司二員、加左右辨官各四員、内藏寮二員、陰陽寮二員、兵部省四員、大藏省八員、大膳職四員、主殿寮二員、左右馬寮各二員、減内記二員、内匠寮二員、散位寮二員、雅樂寮一員、木工寮四員、園池司一員、彈正臺二員、東西市司各一員、○庚申、定賜諸司史生以下雜色人以上、時服并月料之法、○辛酉、山城國獻白鼠、○癸亥、長岡京地四町賜四品坂本親王、○丙寅、定雅樂寮雜樂師、歌舞師四人、笛師二人、唐樂師十二人、橫笛師二人、高麗樂師四人、橫笛箏篋莫目舞等師也、百濟樂師四人、橫笛箏篋莫目舞等師也、新羅樂師二人、琴舞等師也、度羅樂師二人、鼓舞等師也、伎樂師二人、林邑樂師二人、○戊辰、山城國葛野郡地八町賜大原内親王、是日、東山道觀察使正四位下兼行右衛士督陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣、爲入邊任、辭見内裏、召昇殿上、令典侍從五位上永原朝臣子伊太比賜衣一襲被等、○己巳、緣修宮殿、欲暫御於辨官廳、而役夫一人自辨官南門墜死、仍停焉、○乙亥、從三位坂上大宿禰田村麻呂、藤原朝臣葛野麻呂、

義解に謂吳樂さあり
 ○林邑樂師二人、令にな
 ○入邊任、按察使さして典羽に赴くを云
 ○從五位上永原朝臣、考異に上舊作下據上文訂さあり
 (四月)京下、類史下な中に作る
 ○風病、醫心方三に黃帝大素經云風者百病之長也至其變化爲他病也さあり奇魂一には今俗にいふ癘さみえたり風の病には非る也さ云り
 ○清眞心、眞或は直の誤ならむか然らばキヨキナホキコ、ロさ訓むべし
 ○後太上天皇、嵯峨天皇に坐す
 ○因攸寄顔、寄顔は原本缺字さす西本に據て補ふ
 ○皇階、皇位に同じ
 ○半武、武は歩武の武、字書に六尺爲歩半歩爲武さあり俗にいふ一足の處でさ云意なり
 ○濫庶緒於一簣、所謂九仞の功を一簣に缺く意なり
 ○丁丑、私記に玄道按文正元年清原氏勅例曰天皇大同四年四月戊子即位

並授正三位、正四位上菅野朝臣眞道、正四位下藤原朝臣園人、並從三位、○夏四月丙子朔、讀經宮中、又遣使於京下諸寺誦經、天皇自從去春寢膳不安、遂禪位於皇太弟、詔曰、現神等大八洲所知、倭根子天皇我詔旨、良未止、勅御命乎、親王等王等臣等百官乃人等天下公民衆、聞食止、宣、朕躬劣弱、且洪業爾、不耐已止乎、本自思畏、利賜許止、暫毛不息、加以朕躬元來風病、爾苦都々、身體不安、且經日累月、且方、機缺懈奴、今所念久、此位避天、一日片時、毛御體欲養止奈毛、所念須、故是以皇太弟止、定賜某親王爾、天下政、波、授賜布、諸衆此狀乎、悟、清眞、心乎、毛知、此皇子乎、輔導、天下百姓、乎、可令撫育、止、勅天皇御命乎、衆、聞食止、宣、後太上天皇涕泣固辭、乃上表陳讓曰、臣幽昧自天、教訓無染、逸遊率性、機務未涉、陛下獎飭、忝茲儲貳、顧惟重託、因攸寄顔、頃者聖體乖和、淹除日月、醫藥無驗、責在臣躬、今忽遜神器、傳之孱蒙、事殊恒制、聞命兢惕、若登此皇階、當彼大寶、人神之聖既缺、中外之心又沮、冀日復嘗藥、祈天遠壽、佇昇平於半武、濫庶績於一簣、無任懇迫之至、謹奉表以聞、天皇不許、○丁丑、天皇避御於東宮、

於大極殿辛丑參河國爲
 悠紀美作國爲主基中原
 氏勳文後紀纂亦同則辛丑
 爲是さあり
 ○一物、禮記文王世子に
 行一物而三善皆得者唯
 世子而已其齒於學之謂
 也、疏に物猶事也謂與
 國人齒讓之一事而三善
 者謂衆知父子衆知君
 臣衆知長幼是其三善さ
 あり
 ○三朝、古へ天子に三朝
 あり燕朝内朝外朝是なり
 ○鄙衷、原本表字缺く西
 本に據て補ふ
 ○檮昧、字書に無知貌さ
 あり
 ○穆下有効、尙書金縢に
 我其爲王穆卜、傳に穆は
 敬也さあり
 ○齒曹、原本曹を胃に作
 る西本に據て改む
 ○事乖釋重、釋重は重位
 を釋く意即ち讓位の實に
 乖けりさなり
 ○太上天皇之旨、天字は
 類史に據て補ふ

上未敢當命、○戊寅上復抗表曰、臣聞天下神器不可輕傳、皇業大寶非
 聖不踐、抗表冒請、庶蒙優容、丹款不孚、マコトナラ立鑿悠邈、俯仰焦惶、心魂靡厝、臣
 學慙一物、勤缺三朝、生長深宮、素闇稼穡、常欲靜忝宸位、周施聖訓、頌王
 澤於泰平、觀至治之鬱起、而陛下不察鄙衷、強授鼎祚、臣之檮昧、何堪之
 有也、但以君唱臣和、上下之分、綸詔忽降、敢不對揚、苟欲遂志、還懼稽命、
 臣冀咨詢公卿、擁攝萬機之務、穆卜有効、當待翌日之瘳、然後臨學齒曹、
 □道終年在、臣至願實爲欣幸、無任悚戰之至、謹重詣闕、奉表以聞、詔不
 許、天皇遂傳位、避病於數處、五遷之後、宮于平城、而事乖釋重、政猶煩出、
 尙侍從三位藤原朝臣藥子常侍帷房、矯託百端、太上天皇平城甚愛、不知其
 奸、遷都平城、非是太上天皇之旨、天皇慮其亂階、擯於宮外、官位悉免焉、
 太上天皇大怒、遣使發畿内并紀伊國兵、與藥子同輿、自川口道向於東
 國、士卒逃去者衆、知事不可遂、廻輿旋宮、落髮爲沙門、

日本後紀卷第十七

(三條西家本奥書)

天文元臘廿八書寫了

日本後紀卷第二十

起弘仁元年九月盡十二月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉 勅撰

太上天皇

嵯峨

九月戊戌朔、遣使畿内、班民口田、勅大和國田租地子稻永充平城宮
 雜用料、○癸卯、依太上天皇命、擬遷都於平城、正三位坂上大宿禰田村
 麻呂、從四位下藤原朝臣冬嗣、從四位下紀朝臣田上等爲造宮使、○甲
 辰、播磨國言、據格、可以勳位人差點、□兒、而國內勳位、或死或逃、見在之
 徒、□老疾、不堪防守、伏望差白丁補其闕、□之、○丁未、緣遷都事、人心
 騷動、仍遣使鎮固伊勢、近江、美濃等三國府、并故關、正四位下巨勢朝臣
 野足、從五位下佐伯宿禰永繼爲伊勢使、正五位下御長真人廣岳、從五
 位下小野朝臣岑守、坂上大宿禰廣野爲近江使、正五位上大野朝臣直
 雄爲美濃使、繫右兵衛督從四位上藤原朝臣仲成於右兵衛府、詔曰、

〔弘仁元年〕坂上大宿禰
 原本禰を稱に作る誤なれ
 ば改む
 ○差點、□兒、□は健字な
 るべし健兒はチカラビト
 さいひ又コムニ云後
 コムテイ云り倭訓彙に
 武家の足輕の類也さいひ
 貞丈雜記に健兒所は中間
 の居る所也云諸國に之
 を置き其數少きも二十人
 多きは二百人あり國司に
 屬して國庫其他の守衛に
 任ず故に弓馬に練習せる
 壯丁を採れり
 ○□老疾、□□は多是
 の二字なるべし
 ○□之、□は許字なるべ
 きか西本には二字空白さ
 す
 ○緣遷都事云々、大同四
 年四月戊寅紀に尙侍藥子
 常侍帷房、矯託百端太
 上天皇甚愛不知其奸、遷
 都平城、非是太上天皇之
 旨、さある如く遷都の事

は藥子の奸計に出で騷亂の階さならむことを恐れて人心恟々たりしなり
 ○國府、國衙所在の地を云諸國必ず國府あり現今も地名として存するもの多し
 ○故關、當時は三關既に廢せられて其舊趾存す故に故關と云
 ○從四位上藤原朝臣仲成、考異に上舊作下據上文及類史紀略訂さあり
 ○詔曰、尙侍藤原藥子同仲成を處置し給ふ詔なり
 ○趁逐、原本逐を遂に作る西本及下文に據て改む
 ○據、原本據に作る西本及類史に據て改む
 ○御坐、原本坐を座に作る西本及類史に據て改む
 ○二所朝廷、太上天皇と天皇とを申奉る
 ○先帝、平城天皇
 ○萬代宮、萬代不易の意にて永世此に都し給ふなり
 ○先帝乃親王夫人乎云々、親王は高岳、巨勢、阿保の三親王並に内親王御四方坐しき、凌侮り奉れる事實は詳ならざれど種々に苦しめ奉りしなる

天皇詔旨 良麻止 勅御命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止
 宣尙侍正三位藤原朝臣藥子者、挂畏 柏原朝廷乃 御時、東宮坊宣旨
 止爲 氏仕賜比支、而其爲性 能不能所乎 知食氏、退賜比 去賜氏支、然物乎 百
 方趁逐 氏、太上天皇 爾近支 奉流、今太上天皇乃 讓國給 閑流 大慈 深志 乎
 不知之 氏、己 我威權 乎 擅爲 止之 氏、非 御言事 乎 御言止 云 都々、褒貶 許止 任心 氏
 曾无所 恐懼、如此 惡事 種種 在 止 毛、太上天皇 爾親仕 奉 爾 依 氏、思忍 都々
 御坐、然猶 不 飽足 止之 氏、二所 朝廷 乎 母 言 隔 氏、遂 爾 波 大亂 可起、又 先帝 乃
 萬代宮 止 定賜 閑流 平安京 乎、棄賜 比 停賜 氏之 平城 古京 爾 遷 左 牟 止 奏 勸 氏
 天下 乎 擾亂 百姓 乎 亡弊 又 其 兄 仲成 己 我 妹 乃 不能 所 乎 波 不 教 正 之 氏、還
 恃其 勢 氏、以 虛詐 事、先帝 乃 親王 夫人 乎 凌侮 氏、棄家 乘路 氏 東 西 辛
 苦 世 之 牟、如此 罪惡 不可 數 盡 理、乃 任 爾 勸賜 比 罪 奈 閑賜 布 閑 久 有 止 毛、所 思
 行有 依 氏、輕賜 比 宥賜 比 氏、藥子 者 位 官 解 氏 自 宮 中 退 賜 比、仲成 者 佐 渡
 國權 守 退 止 宣 天皇 詔 旨 乎 衆 聞 食 止 宣、又 遣 使 告 于 柏原 陵 曰、天皇

○又遣使、考異に使舊脫據類史二補さあり
 ○而其爲性云々、而以下去賜氏支に至る十九字は考異に舊脫據類史二補さあり但し類史には而字なし
 ○奏勸氏、類史奏を奉に作る紀略は此に同じ奏は奏上し勸は勸め奉るを云
 ○續日本紀所載云々、崇道天皇即ち早良太子藤原種繼と隙あり延暦四年人をして之を殺さしめ給ひしかば桓武天皇怒りて太子を廢し淡路に流し給ひし事實を續日本紀に詳に記載せしを崇ありしかば後に其記事悉く削除せしめ給ひしを仲成藥子等が更に其記事本如く無禮に挿入せしめたるは無禮なれば復前の如くに改正し削除せしめられたりさなり仲成が削除せし記事本如くに加へしは種繼は其父なればなり
 ○雄友授本位、大納言正三位藤原雄友伊與親王の事に坐し大同二年五月十一日伊豫國に流さる外舅たりしに依てなり

御命坐、挂 畏 支 柏原大朝廷 爾 申賜 閑 止 申 久、内侍 尙侍 正三位 藤原朝臣 藥子 者、初 太上 天皇 乃 東宮 止 坐 之時、爾 東宮 宣旨 止 爲 氏 仕賜 比 支、而其 爲性 乃 不能 所 乎 知食 氏、退賜 比 去賜 氏 支、然物 乎 百方 趁逐 氏、太上 天皇 爾 近支 奉 氏、非 御言 事 乎 御言 止 云 都々、褒 貶 任 意 氏、曾 无所 恐懼、又 萬代 宮 止 定賜 之 平安 京 乎 毛、棄賜 比 停賜 氏之 平城 古京 爾 遷 左 牟 止 奏 勸 氏、天下 乎 擾亂 百姓 乎 亡弊、又 其 兄 仲成、恃 己 妹 勢 氏、以 虛詐 事、親王 夫人 乎 凌侮 氏、棄家 乘路 氏 東 西 辛 苦 世 之 牟、如此 罪惡 不可 數 盡 因 茲 藥子 者 官位 解 氏、自 宮 中 退 賜、仲成 者 佐 渡 國 權 守 退 賜 比、都、又 續 日本 紀 所 載、乃 崇道 天皇 與 贈 太政 大臣 藤原 朝臣 不好 之 事、皆 悉 破却 賜 氏 支、而 更 依 人 言 氏、破却 之 事 如 本 記 成、此 毛 亦 无 禮 之 事、奈 利、今 如 前 改 正 之 狀、差 參 議 正 四位 下 藤原 朝臣 緒 嗣、畏 彌 畏 牟 申賜 久 止 奏、是 日、宮 中 戒 嚴、藤原 朝 臣 雄 友 授 本 位 正 三位、正 五位 下 御 長 眞 人 廣 岳、坂 田 宿 禰 奈 氏 麻 呂、石 川 朝 臣 清 直、多 治 比 眞 人 今 麻 呂 從 四位 下、正 六位 上 弟 村 王、高 瀨 王、廣

根朝臣諸勝、紀朝臣末成、坂上大宿禰廣野、藤原朝臣廣敏、多治比真人育治、安倍朝臣雄能麻呂、安倍長田朝臣節麻呂、從五位下、從四位上秋篠朝臣安人爲參議兼右衛士督、左大辨如故、正五位下藤原朝臣道雄爲左中辨、權右中辨正五位下田口朝臣息繼爲眞、阿波守如故、正五位下小野朝臣野主爲權右中辨、左近衛少將從五位下良岑朝臣安世爲兼左少辨、丹波介如故、從五位下藤原朝臣福當麻呂爲右少辨、右近衛少將從五位下藤原朝臣三守爲兼內藏頭、美作權介如故、正五位下御室朝臣今嗣爲大學頭、從四位下坂田宿禰奈氏麻呂爲大和守、從四位下藤原朝臣繼彥爲山城守、從五位下廣根朝臣諸勝爲介、從四位下紀朝臣田上爲尾張守、從五位下藤原朝臣山人爲駿河守、正四位下藤原朝臣眞夏爲伊豆權守、從五位上大伴宿禰和武多麻呂爲武藏權介、正五位下藤原朝臣貞繼爲近江守、式部少輔從五位下小野朝臣岑守爲兼介、從五位下多治比真人育治爲美濃介、從五位下藤原朝臣貞本爲飛驒權守、從五位下登美真人藤津爲越前介、從五位上大中臣朝臣常

○從四位下紀朝臣、考異に四舊作五據上下文訂

○從五位上大伴宿禰、同上舊作下據上下文訂

○安倍朝臣男笠、下文男を雄に作る
 ○川口道、他に見えず川は木津川なるべし下文に添上郡越田村に至るさあるに據るに奈良より木津に出で山城近江を経て東國に入らむと給ひしならむ
 ○宿衛之兵、紀略兵を者に作る
 ○幕將同行、同に幕を翼に作る
 ○宇治山崎兩橋、宇治橋は宇治川に架く山城國宇治郡にあり山崎橋は淀川に架く同乙訓郡にあり
 ○與渡市津、延曆廿三年七月紀に幸與等津延喜主稅式に與渡津とあり市は與渡の市なり

麻呂爲備前權守、從五位下安倍朝臣清繼爲安藝權守、從四位下多朝臣入鹿爲讚岐守、從四位下藤原朝臣眞雄爲伊豫守、從五位下藤原朝臣安繼爲薩摩權守、正五位上大野朝臣直雄爲左近衛少將、春宮大夫從四位上藤原朝臣藤嗣爲兼右近衛中將、從五位下紀朝臣百繼爲少將、下野介如故、從五位下安倍朝臣雄能麻呂爲右衛士佐、從五位下佐伯宿禰永繼爲左兵衛佐、參議正四位下藤原朝臣緒嗣爲右兵衛督、從五位下坂上大宿禰廣野爲佐、從五位下安倍朝臣男笠爲左馬頭、○戊申、正四位下藤原朝臣眞夏、從四位下文室朝臣綿麻呂等被召自平城宮來、禁綿麻呂於左衛士府、大外記外從五位下上毛野朝臣穎人從平城急來言、太上天皇今日早朝取川口道入於東國、凡其諸司并宿衛之兵、悉皆從焉、于時遣大納言正三位坂上大宿禰田村麻呂等、率輕銳卒、從美濃道邀之、田村麻呂奏請、綿麻呂武藝之人、頻經邊戰、募將同行、即授正四位上拜參議、以遣之、歡喜踊躍、即駕兵馬、又置宇治山崎兩橋、與渡市津頓兵、是夜、令左近衛將監紀朝臣清成、右近衛將曹住吉朝臣豐

○狼抗、字書に狼戾之意
 あり其性剛復なるを云
 ○使酒、酒の酔に乗じて
 氣を使ふを云
 ○昭穆无次、昭穆の次第
 を無視して順みざる意長
 者をも憚らざるなり
 ○聖職、字書に聖は曳也
 厥は踏也とあり
 ○佐味親王、桓武天皇皇
 子母夫人多治比真宗參議
 長野の女
 ○越田村、靈異記攷證下
 に越田池古今六帖池部歌
 詠之吉川氏曰奈良之西
 有法蓮寺村、村西有田字
 曰越之前、曰池内、是蓋
 越田池之跡とあり越田村
 も此地なるべし

繼等射殺仲成於禁所、仲成者參議正三位宇合之曾孫、贈太政大臣正
 一位種繼之長子也、性狼抗使酒、或昭穆无次、忤於心不憚擊蹶、及乎女
 弟藥子專朝、假威益驕、王公宿德、多見凌辱、民部大輔笠朝臣江人之女
 適仲成也、其姨頗有色、仲成見而悅之、嫌其不和、欲以力强、女脫奔佐味
 親王、仲成入王及母夫人家認之、龜言逆行、甚失人道、及遭害、僉以爲自
 取之矣、外從五位下上毛野朝臣顯人授從五位上、賞歸順之功也、○
 己酉、太上天皇至大和國添上郡越田村、即聞甲兵遮前、不知所行、中納
 言藤原朝臣葛野麻呂、左馬頭藤原朝臣眞雄等先未然雖固諫、猶不納、
 催駕發進焉、天皇遂知勢蹙、乃旋宮剃髮入道、藤原朝臣藥子自殺、藥
 子贈太政大臣種繼之女、中納言藤原朝臣繩主之妻也、有三男二女、長
 女太上天皇爲太子時、以選入宮、其後藥子以東宮宣旨、出入臥内、天皇
 私焉、皇統彌照、天皇慮姪之傷義、即令驅逐、天皇之嗣位、徵爲尙侍、巧求
 愛媚、恩寵隆渥、所言之事、无不聽容、百司衆務、吐納自由、威福之盛、熏灼
 四方、屬倉卒之際、與天皇同輦、知衆惡之歸己、遂仰藥而死、○庚戌、詔曰、

○然多入鹿、下文に多朝
 臣入鹿とあり

○(注)淳和、此二字西本
 及類史になし後人の注な
 れば無さを可さす

○磯野王、考異に磯舊
 作義據上文及類史訂こ
 あり

天皇詔旨、良麻止勅大命、衆聞食止宣、太上天皇平伊勢爾行幸、世志米多
 流諸人等、法之隨爾罪賜、布倍久有止毛、所念有爾依豆奈毛、免賜比宥賜、布又
 中納言藤原朝臣葛野麻呂、波、惡行之首藤原藥子、加姆媾之中、奈禮波、重
 罪有倍志、然多入鹿等申久、雖言不納、止毛、諫爭已止、懇至止申、爾依豆奈毛、
 罪奈倍賜、比勸賜波、須、又藤原朝臣眞雄、波、身命平棄忘豆諫爭、多留事、衆人
 與利、爾有爾依豆奈毛、譽賜比勤賜、比冠位上賜、比治賜波、久止宣、天皇大命
 平衆、聞食止宣、是日、廢皇太子、立中務卿諱和爲皇太弟、詔曰、現神止大
 八洲所知、須倭根子天皇詔旨、良麻止勅御命、平親王等王等臣等百官人
 等天下公民衆、聞食止宣、食國之法、止定賜、比行賜、留、因法隨爾、中務
 卿諱平立而皇太弟、止定賜、布、故此之狀、悟豆、百官人等仕奉止宣、天皇勅
 命、平衆、聞賜止宣、從四位下藤原朝臣眞雄、授正四位下、○壬子、從五位
 上磯野王爲伊豆權守、從五位上大中臣朝臣智治、麻呂爲武藏介、正五
 位上菅野朝臣庭主爲安房權守、從四位下紀朝臣田上爲佐渡權守、正

○壹岐權守、西本岐を伎に作る

五位下藤原朝臣弟貞爲丹後守、正四位下藤原朝臣眞夏爲備中權守、從五位下當麻真人鱸麻呂爲淡路權守、從五位上大中臣朝臣常麻呂爲伊豫守、從五位下田口王爲土佐權守、從五位下紀朝臣良門爲肥前權介、從五位上大伴宿禰和武多麻呂爲日向權守、從五位下御室朝臣是嗣爲大隅權守、從五位下眞菅王爲壹岐權守、○癸丑、從五位下大中臣朝臣諸人爲神祇大副、左近衛中將正四位下巨勢朝臣野足爲兼中務大輔、從五位下安倍朝臣宅麻呂爲大舍人助、從五位下弟村王爲圖書頭、從五位下小野朝臣岑守爲內藏頭、式部少輔近江介如故、從五位下藤原朝臣眞書爲縫殿頭、從五位下伊勢朝臣德繼爲助、左衛士督從四位下藤原朝臣冬嗣爲兼式部大輔、美作守如故、從五位下多治比真人船主爲雅樂助、從五位下紀朝臣南麻呂爲民部少輔、從五位下藤原朝臣友人爲兵部少輔、參議正四位上文室朝臣綿麻呂爲大藏卿兼陸奥出羽按察使、從五位上池田朝臣春野爲大輔、從五位下三國真人氏人爲木工頭、正三位藤原朝臣雄友爲彈正尹、從五位下高瀨王爲弼、從

○兼攝津守、兼字は西本に據て補ふ
○直世王、原本直を眞に作る西本及下文に據て改む

○愛笠、續後紀天長十年六月甲子條愛笠に作る但し楓本西本尾本等には笠さあり

五位下秋篠朝臣全繼爲造西寺次官、右近衛中將從四位上藤原朝臣藤嗣爲兼攝津守、從四位下御長真人廣岳爲伊勢守、內匠頭從五位下直世王爲兼相摸守、參議正四位下藤原朝臣緒嗣爲兼美濃守、右兵衛督如故、左兵衛佐從五位下佐伯宿禰長繼爲兼丹波介、左近衛少將從五位下良岑朝臣安世爲兼但馬介、左少辨如故、中務少輔從五位下藤原朝臣清繩爲兼出雲介、從四位下賀陽朝臣豐年爲播磨守、○甲寅、越前介從五位下阿倍朝臣清繼、權少掾百濟王愛笠等聞、太上天皇幸伊勢國、舉兵應之、捕新任介從五位下登美真人藤津不受替、遣民部少輔從五位下紀朝臣南麻呂等勘問、服罪、清繼已下原死處、遠流、侍從從四位下大庭王爲兼大舍人頭、陰陽博士外從五位下志斐連國守爲兼石見權掾、天文博士如故、大法師永忠爲少僧都、大法師長惠爲律師、○乙卯、權右中辨正五位下小野朝臣野主爲眞、從五位下大野朝臣眞菅爲權右少辨、從五位下文室真人弟直爲大藏少輔、大納言正三位藤原朝臣園人爲兼東宮傅、民部卿如故、左大辨從四位上秋篠朝臣安人爲

○右衛士督、考異に衛士舊作「兵衛」據「上下文訂さあり」
 ○照臨四海于茲二周、大同四年四月戊子受禪即位
 ○有年、豐年を云
 ○宗廟之靈、皇祖皇宗の神靈を云
 ○社稷之祐、天神地祇の祐助を云
 ○阿保親王爲大宰權帥、親王は平城天皇皇子、廢太子と同一の事情に因れり
 ○諸國出舉官稻云々、三代格卷十四に載す紀の文よりは詳細なり宜しく參看すべし
 ○率十束收利三束、稻十束を出舉して利三束を徵收するなり是延曆十四年閏七月の制なり大同初年以來之を改めて五束せしむ十四年の制に復せられしなり
 ○大臣身帶二位者云々、深紫は令制一位の服色なり又二位以下淺紫を着せしを改めて中紫せらるる衣服令を參看すべし
 ○紀朝臣岡繼、原本岡を國に作る類史及下文弘仁二年五月丁未條に據て改む

兼越後守、右衛士督如故、從四位下多朝臣入鹿爲安藝守、從四位上春原朝臣五百枝爲讚岐守、○丙辰、詔曰、飛鳥以前、未有年號之目、難波御宇、始顯大化之稱、爾來因循歷世、至今是用、皇王開國承家、莫不登極稱元、隨時施號也、朕以眇虛嗣守丕業、照臨四海、于茲二周、雖日月淹除、而未施新號、方今時屬豐稔、人頌有年、實賴宗廟之靈、社稷之祐、非朕之寡德、所能可致也、念與天下、嘉斯休祥、宜改大同五年爲弘仁元年、布告遐邇、知朕意焉、大法師脩圓爲律師、從五位下佐伯王爲大監物、從五位下伊勢朝臣德繼爲縫殿頭、從五位上稻城王爲大膳大夫、從五位下藤原朝臣眞書爲亮、從五位下安倍朝臣犬養爲尾張守、四品阿保親王爲大宰權帥、○己未、大法師脩哲爲律師、○庚申、制、諸國出舉官稻、率十束收利三束、但陸奥出羽二國、不在此限、○壬戌、制、大臣身帶二位者、聽着中紫、今宜改着深紫、又諸王二位已下五位已上、及諸臣二位三位者、依令條、着淺紫、今改着中紫、又去大同二年制、四窠已上不得服用者、今聽五位已上服用、正六位上紀朝臣岡繼、伊勢朝臣繼麻呂授從五位下、

○雁高宿禰、考異に雁舊作「鷹」據「下文及類史訂さあり」西本には鷹に作る即雁の字
 ○從五位下田中朝臣、同に下舊作「上據」下文訂さあり
 ○從四位上秋篠朝臣、同上舊作「下據」上文訂さあり
 ○日者虛傳、陰陽師等説く所の拘忌の説を斥けむと奏せしなり日者は字書に謂推算星命者と注す
 ○歲對歲位之説、曆林問答に子歲者大歲位、子也對午也とあり歲星のある位置を歲位といひ之と相對する方位にあるを歲對と云
 ○天恩發於五辰、甲子より癸亥に至る六十日の中に甲子より戊辰に至り、己卯より癸未に至り、甲午より戊戌に至り、己酉より癸丑に至る各五日を天の恩澤を降す日なりと陰陽家にて説けるを云
 ○將軍行於四仲、拾芥抄下末に大將軍大白之精天之客太一紫微宮方角之神不居四孟常行四仲、以上四方三歲一移百事不

正六位上雁高宿禰氏成外從五位下、正五位下永原朝臣子伊太比從四位下、正六位上池田朝臣幡子從五位下、○甲子、正五位上大野朝臣直雄授從四位下、正六位上佐伯宿禰金山從五位下、從五位上藤原朝臣鷹養爲民部大輔、從五位下田中朝臣清人爲造、西寺長官、右兵衛佐從五位下佐伯宿禰長繼爲兼下總介、從五位下藤原朝臣眞川爲左衛士佐、參議正四位下藤原朝臣緒嗣爲兼右衛士督、美濃守如故、從四位下大野朝臣直雄爲左兵衛督、從五位上藤原朝臣道繼爲佐、左大辨從四位上秋篠朝臣安人爲兼右兵衛督、越後守如故、從五位下佐伯宿禰金山爲右兵庫頭、○乙丑、公卿奏言、謹案大同二年九月廿八日詔書、傳日者虛傳、干妨輻湊、占人妄告、万忌森羅、又大會小會之言、歲對歲位之説、天恩發於五辰、將軍行於四仲、斯等並出堪輿雜志、非舉正之典、宜據賢聖格言、一除曆注者、臣等商量、曆注之興、歷代行用、男女嘉會、人倫之大也、農夫稼穡、國家之基也、伏望因順物情、依舊具注、又去大同二年八月十九日下彈正臺例云、雜石腰帶、畫飭大刀、及素木鞍橋、獨射犴葦

可犯云々とあり
 ○堪輿雜誌、漢書藝文志に堪輿金匱の書あり五行家に屬す師古注に許慎云堪輿地道也とあり一説に神名造(圖宅)書者とも云り支那にて相地者を堪輿家と贈す西本志を忌に作る
 ○男女嘉會、嫁迎御取等の日の吉凶を載するを云
 ○農夫稼穡、草木蔬穀等の下種の時期を始め農稼に必要な事項を詳に載するを云
 ○素木鞍橋、抄鞍馬具に楊氏漢語抄云鞍橋(久良保爾)云鞍瓦、西宮記には鞍骨と書けり
 ○獨射狩、抄毛群部に獨狩唐韻云狩(今按和名未詳但本朝式云葦鹿皮獨狩皮云々狩音如、簡此名所由亦未詳)胡地野犬名也
 ○葦鹿、抄毛群部に葦鹿本朝式云葦鹿皮(和名阿之賀見)于陸奥出羽交易雜物中、矣本文未詳)箋注に按本草拾遺云海獺大如、犬脚下有皮如人肝、一毛着水不濡是可、以充葦鹿也とあり
 ○獺、字彙に與、獨同說文鼠形飛走且乳之鳥毛紫赤

鹿獺^{ムサシ}羆皮等、一切禁斷者、臣等商量、雜石易得、造賣多人、至于着用、亦復難損、銅鈔具者、以漆塗成、動易剝落、今難易各異、價直是同、爲弊一也、又毛皮之類、不聽犯用、鞍具之要、唯須^{ヒキ}鞞文、是以无賴之徒、竊斃^{ヒキ}牛馬、爲弊二也、又節會之義、蕃客之朝、歲時不絕、必須^{ヒキ}飭刀、今惣被斷、恐損國威、伏望雜石及毛皮等、悉聽用之、畫飭刀者、除節會蕃客之外、將加禁制、鞍橋者、除桑棗之外、不論素漆、隨心通用、庶隨民便、蒙得其所、並許之、散事從四位下川邊女王卒、○丙寅^{廿九}、渤海國遣使獻方物、其王啓云、南容等廻、遠辱書問、悲切三考、慰及羆孤、捧讀之時、無任哀感、伏承先帝、仙馭昇遐、太上天皇、怡神閑館、萬機之重、早識所歸、孟秋尙熱、伏惟天皇、起居萬福、卽此元瑜蒙免、天皇繼登寶位、置命惟新、歡洽兆民之心、賴及一方之外、在於文好、休感攸同、事貴及時、不可淹滯、重差和部少卿兼和幹苑使開國子高南容等奉啓、用申慶賀之禮、兼上土物、具在別錄、况南容等、再駕窮艚、旋涉大水、放還之路、恐動不虞、伏望遠降、彼使、押領同來、實謂當仁、伏惟照諒、封域遙隔、拜賀未由、

似蝙蝠一名鼯鼠一名飛生、抄毛群部に鼯鼠(和名毛美俗云无佐々比)とあり
 ○鈔、字書に帶具或以金或以犀爲之猶今之帶鈕版見唐書とあり
 ○鞞文、字書に革之蹙也とありヒキハダは蝦蟇膚の意
 ○川邊女王卒、續紀實龜二年七月乙未紀に三嶋王之女河邊王とあると同人なるべし
 ○羆孤、貌は小弱なり孤は孤兒の意左傳僖九年に出づ
 ○先帝、桓武天皇に坐す
 ○太上天皇、平城天皇に坐す、大同四年四月一日御讓位
 ○未由、未は原本末に作る西本に據て改む
 ○十月、從五位上御室朝臣、考異に上舊作下據類史訂とあり
 ○勇山、録河内神別に勇山連神饒速日命三世孫出雲醜大使主命之後也とあり
 ○勇山は豐前國下毛郡諫山郷に據れるなるべし
 ○松崎川、山城國愛宕郡高野川西美會呂池東にあリ靈所七瀬の一なり

○冬十月己巳、從五位下名草直道主爲大學博士、越中權掾如故、侍從從四位上藤原朝臣繼業爲兵部大輔、近江守如故、從五位下田中朝臣清人爲左京亮、內藥正外從五位下若江造家繼爲兼尾張權介、侍醫如故、左近衛中將正四位下巨勢朝臣野足爲兼備中守、中務大輔如故、從五位下藤原朝臣眞川爲安藝守、從五位下石川朝臣道成爲周防守、從四位下多朝臣入鹿爲讚岐權守、從五位上安曇宿禰廣吉爲伊豫權介、從五位上御室朝臣是嗣爲筑後權介、從五位上御室朝臣氏繼爲薩摩權守、從五位下登美真人藤津授從五位上、○甲戌、從五位下廣根朝臣諸勝爲攝津介、○己卯、正六位上采女朝臣枚麻呂授從五位下、○丙戌、從五位下文屋真人弟直爲少納言、從五位下藤原朝臣眞書爲大藏少輔、外從五位下縵連家繼爲大膳亮、從五位下伊勢朝臣德成爲上野權介、○戊子、河內國人從七位下勇山國嶋、正七位下家繼、正八位上眞繼、從八位下文繼等賜姓連、○甲午、禊於松崎川、緣大嘗會事也、陸奧國言、渡嶋狄二百餘人來着部下氣仙郡、非當國所管、令之歸去、狄等云、

○渡嶋狄、書紀下齊明天皇四年四月紀に見ゆ北海道即ち渡嶋なり
 ○十一月豐樂院、大同三年十一月壬辰紀に見ゆ
 ○悠紀主基兩國、參河美作なり下文甲子條に見ゆ
 ○土風歌舞、悠紀主基兩國風俗の歌舞なり
 ○大歌、大同三年十一月甲午紀に見ゆ

○雄笠、上文男笠に作る

○豐野真人仲成、考異に仲舊脱據類史補あり
 ○賀祜麻呂、原本祜を祜に作る西本及類史に據て改む下同じ

○山主、考異に山舊脱據類史補あり

時是寒節、海路難越、願候來春、欲歸本郷者、許之、留住之間、宜給衣糧、○十一月甲寅、雷、○乙卯、行大嘗於朝堂院、○丙辰、御豐樂院、悠紀主基兩國獻翫好雜物、奏土風歌舞、五位已上賜衣被、○戊午、宴五位已上、奏雅樂并大歌、從四位下大庭王授從四位上、從五位下弟野王、作良王從五位上、正六位上貞代王、御井王從五位下、從四位下橘朝臣安麻呂、藤原朝臣冬嗣從四位上、正五位下藤原朝臣貞繼從四位下、從五位上紀朝臣繩麻呂正五位下、從五位下田中朝臣淨人、大中臣朝臣諸人、佐伯宿禰鷹成、安倍朝臣雄笠、甘南備真人諸野、安倍朝臣淨足、藤原朝臣三守從五位上、外正五位下秦宿禰都伎麻呂、正六位上長岡朝臣岡成、豐野真人仲成、畝火真人菟原、藤原朝臣賀祜麻呂、多治比真人繼益、藤原朝臣文山、坂上大宿禰真弓、橘朝臣永繼、藤原朝臣葛成、小野朝臣諸野、從六位下藤原朝臣濱主、安倍朝臣弟雄、正六位上縣犬養宿禰清繼、佐伯宿禰弟成、忌部宿禰比良麻呂從五位下、正六位上林朝臣山主、志賀忌寸周興、賀茂縣主立長、藏人根主外從五位下、宴訖、賜祿有差、○己未、正

○十二月、芹川野、山州名跡志に芹河在、城南宮南五町許、民居凡方一町、爲村名、是なり
 ○櫻日廟、二十二社式に香椎宮筑前國糟屋郡式外、神功武内八幡住吉、或書曰加襲宮者昔仲比古天皇(仲哀)之后息長足比咩神(神功)及大臣武内宿禰命今夜(誤字か)此行宮謀伐新羅、從爾已來便爲廟堂、后宮在東、東廟在、西あり
 ○賽靜亂之禱、葉子の亂を云
 ○吉野陵、春日宮天皇(應基皇子)の妃贈皇太后椽姫吉隱陵を云、大和國磯城郡初瀬町大字角柄にあり
 ○客作兒、原本客を客に作る西本及類史に據て改む抄人倫部に楊氏漢語抄云客作兒(都久乃比々止)箋注に按都久乃比止償人之義謂受價勞力償之也、私記に支道按古本訓云安比都久里相作之義あり
 ○賜祿有差、類史祿を物に作る
 ○詔曰、三代格卷四に載す
 ○鈎陣、鈎字原本缺く三

四位下橘朝臣諱皇太后多治比真人高子授從三位、无位廣長女王從五位上、正六位上藤野女王、无位繼子女王從五位下、從五位下藤原朝臣松子正五位下、无位藤原朝臣緒夏、坂上大宿禰御井子從五位上、无位藤原朝臣葛子、橘朝臣安万子、三善宿禰弟姉、三國真人眞主從五位下、○辛酉、正六位上朝野宿禰道守、丹波史鳥守授外從五位下、○甲子、免參河美作兩國田租、以供奉大嘗也、○十二月庚午、從六位上林宿禰東人爲送渤海客使、大初位下上毛野公繼益爲錄事、○甲戌、外正六位上上毛野公賀美麻呂授外從五位下、○己卯、遊獵于芹川野、賜五位已上衣被、○壬午、遣參議正四位下巨勢朝臣野足奉幣帛於八幡大神宮、日廟賽靜亂之禱也、○甲申、遣僧七口讀經於吉野陵、○丙戌、鑄錢司用乘銅鑄進新錢一千冊貫、因茲鑄錢長官從五位上三嶋真人年嗣授正五位下、次官從五位下大枝朝臣繼吉從五位上、自餘六位已下客作兒已上叙位賜祿有差、○癸巳、詔曰、天文垂象、鈎陣列衛於紫微、地理分區、金石効用於緇錄、除兇禁暴、七德照其威、靜亂禦侮、四海服其武、弧矢之

代格に據て補ふ鈎陣は共に星の名六星あり紫微垣内に在りて最も北極に近し

○金石、武器を云周禮秋官職金に凡國有大故一而用金石則掌其金注に用金石者作槍雷椎桴之屬(昔謂守城禦捍之具)とあり

○細録、書籍の意、細は帛の淺黄なる者古人寫本多く之を用ふ武器の有用なる事は歴史に見えたりとあり

○七德、武の七德即ち禁暴、戢兵、保大、定功、安民、和衆、豐財を云左傳宣十二年に出づ

○孤矢、孤は木弓なり易繫辭傳に弦レ木爲レ弧とあり

○匪獨茲日、匪字は三代格に據て補ふ

○何以應卒、原本卒を乖に作る三代格に據て改む卒は急也速也、速急に應じ難しとあり

日本後紀卷第二十

日本後紀卷第廿一

起弘仁二年正月盡閏十二月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉 勅撰

太上天皇 嵯峨

二年春正月丙申朔、皇帝御大極殿臨軒、皇太弟文武百官藩客朝賀、如常儀。○庚子、制上殿舍人一百廿人、復舊名爲内豎。○壬寅、宴五位已上并藩客、賜祿有差。○丙午、於陸奥國置和我、葺縫、斯波三郡。從五位下大野朝臣眞菅爲右少辨、從五位下秋篠朝臣全嗣爲治部少輔、從五位下藤原朝臣眞書爲雅樂頭、從五位下橘朝臣永繼爲民部少輔、從五位上大枝朝臣永山爲大判事、從五位下淡海眞人有成爲大藏少輔、左兵衛督從四位下大野朝臣直雄爲兼左京大夫、正五位下三嶋眞人年繼爲造、西寺長官、從五位下藤原朝臣文山爲次官、鑄錢長官、從五位上大枝朝臣繼吉爲兼山城介、從五位下紀朝臣南麻呂爲河内守、正五位下

○太上天皇嵯峨、西本此六字なし
〔弘仁二年〕臨軒、字書に天子不御正座而御平臺謂之臨軒とあり
○藩客、類史紀略藩を蕃に作る藩蕃と通ず
○内豎、原本豎を豎に作る紀略に據て改む
○和我葺縫斯波三郡、按に和我葺縫は民部式及倭名抄には見えず伊呂波字類抄拾芥抄以下の諸書に見ゆされば弘仁二年に置れて延喜式時代には廢せられ後更に置れしにや或は此時權に置れ後に眞郡とせられしなるべしとも云和我は今二郡に分ち東和賀西和賀と云葺縫は種貫と稱す斯波は民部式には見えざれど神名式に見ゆ是より先志波村志波城の名は既に見えしが此に至て郡とせらる今は紫波郡と書けり

○高道連、録河内諸蕃に高道連漢高祖男齊悼惠王肥之後也あり
 ○角弓、抄征戰具に角弓爾雅注云弭亡耳反都能由美今之角弓也あり神功紀出雲風土記にも見ゆ
 ○渤海使、考異に渤海使據類史補あり紀略にも此二字あり
 ○干録、録は祿なるべし干祿は食祿を干むるを云論語爲政篇に出づ
 ○委質、宮仕へするを云左傳僖廿三年に出づ
 ○儲闈、文選沈約彈事に升采儲闈注に儲闈東宮也あり
 ○夙夜軒陞、軒陞は宮禁を云朝夕宮中に仕奉れりなり
 ○簪纓、簪は首弁連冠於髮者、纓は冠系所以結冠之組と注し何れも貴者の冠飾なり故に身分貴き者な云
 ○疲駘、駘は字書に駘馬也謂駕車之馬在兩旁者又一説左曰駘右曰駘あり
 ○止足、老子に知足不辱知止不殆あり分を知りて其に満足するを云

藤原朝臣道雄爲紀伊守三○戊申、河内國人從八位上玉作鯛釣賜姓高道連十七○壬子、御豐樂院觀射、藩客賜角弓射焉二十○乙卯、遣大納言正三位坂上大宿禰田村麻呂、中納言正三位藤原朝臣葛野麻呂、參議從三位菅野朝臣眞道等、饗渤海使於朝集院、賜祿有差廿一○丙辰、參議從三位宮內卿兼常陸守菅野朝臣眞道上表致仕曰、臣聞晨行暮息、身事之恒分、壯仕老休、禮制之通範、所以崇名事主、保身終命也、臣本庸品、才用無取、涉學謝於甲科、干録朝於下士、徒以早因多幸、委質先朝、爰自儲闈、洎臨宸極、夙夜軒陞、緜歷歲序、遂乃曲蒙アジハル獎濫廁簪纓、兼文武之崇班、帶中外之厚秩、以至今日、累沐天恩、顧惟尸素、伏深戰慄、但臣歷事三朝、齒登七十、痾隨年積、志與身衰、雖疲駘駘、非無顧戀之心、而漏盡夜行、恐乖止足之誠、伏願歸骸舊里、收迹蓬廬、養疾以存餘生、杜門而待終日、無任慊懇之至、謹詣闕奉表以聞、許之、但常陸守如故廿二○丁巳、渤海國使高南容歸、蕃賜其王書曰、天皇敬問渤海國王、南容入賀、省啓具之、惟王資質宏茂、性度弘深、敦惠輯中、盡恭奉外、代居北涯、與國脩好、沃日滄溟、企乃

○沃日滄溟、文選海賦に蕩雲沃日、注に日光滄溟於中、故沃之ありあり大海の形容なり
 ○葦能亂之、葦は一葦即ち小舟の意、毛詩衛風河廣章に誰謂河廣一葦抗之ありあり亂は爾雅釋水に正絕流曰亂、注に横流而濟之也ありあり天に接する波浪をも小舟を以て能く渡り來れりなり
 ○晝琛、原本晝琛は珍寶なり珍寶を貢獻するを云○度承容圖、原本度承處に作る西本に據て改む
 ○善隣、左傳隱六年に親仁善隣國之寶也ありあり隣國と好む修むるを云
 ○事大、孟子に惟智者爲能以小事大ありあり大國に事ふるを云
 ○睿志、類史志を心に作る睿志は睿々の志即ち忠貞の心を云
 ○産子授從三位、考異に三舊作二今從紀略ありあり産子は嵯峨天皇の夫人明日香親王桓武皇子母紀若子贈左大臣船守女
 ○坂本親王、同に同皇子母川上貞奴あり

到矣、接天波浪、葦能亂之、晝琛効精、慶賀具禮、眷彼情歎、嘉賞何止、朕嗣膺景命、虔承容圖、尅己以臨寰區、丕顯以撫兆庶、德未懷邇、化曷覃遐、王念濬善隣、心切事大、弗難劬勞、聿脩先業、況南容荐至、使命不墮、船舶窮危、睿志增勵、雖靡來請、豈能忍之、仍換駕船、副使押送、同附少物、至宜領之、春寒、惟王平安、指此遺書、旨不多及廿三○戊午、正四位上藤原朝臣産子授從三位廿四○己未、无品明日香親王、坂本親王、授四品廿五○甲子、從四位上藤原朝臣冬嗣爲參議、餘官如故、從七位下菅原朝臣清人、正六位上朝野宿禰鹿取、授從五位下、從六位下勇山連文繼外從五位下、正五位下小野朝臣野主爲左中辨、從五位上藤原朝臣伊勢人爲右中辨、從五位上登美真人藤津爲治部大輔、從五位下橋朝臣永嗣爲越前介、從五位上藤原朝臣藤成爲播磨介、山城國乙訓郡白田一町、賜從四位下百濟王教法是日、勅占野開田之徒、就國請地之日、不顯町段、遠包四至、損公妨民、莫甚於此、自今以後、宜勸町段、勿依四至、又陸奥出羽兩國、土地曠遠、民居稀少、百姓浪人、隨便開墾、國司巡檢、隨卽收公、是以

○白田、西本島の一字に作る。
 ○百濟王教法、桓武天皇の女御。
 ○占野開田之徒云々、三代格卷十六に弘仁二年二月三日太政官符應、占田地依町段敷事見ゆ但陸奥出羽兩國以下を同正月廿九日太政官符不可收百姓惡田事(陸奥出羽)として別に載す。
 ○請地、三代格請を受に作る。
 (二月)據令條凡祭祀者云々、三代格卷一に載す令條は神祇令を指す。
 ○官散齋日、考異に散齋脫今據令及類聚三代格補さあり散齋は致齋に對して云アライミなり。
 ○夫散齋之内、三代格夫其に作る。
 ○不作音樂、神祇令義解に謂不作絲竹歌舞之類也さあり。
 ○穢惡之事、同義解に謂穢惡者不淨之物さあり。
 ○頒告、考異に頒舊缺據三代格補さあり西本須に作るは頒の訛れるなり。
 ○宮人、考異に宮舊作官據類史訂さあり西本

人民散走、無有靜心、宜兩國開田、雖无公驗、不得收公。○二月丁卯、授外從五位下志斐連國守從五位下、緣陰陽之道勝於傍人也。○庚午、山城國乙訓郡藥園一町賜施藥院。○辛未、勅據令條、凡祭祀者、所司預申、官散齋日、平旦、頒告諸司、夫散齋之内、不得弔喪、問疾、食、不判刑、殺、不決罰罪人、不作音樂、不預穢惡之事、今至散齋之日、乃頒告諸司、則諸司惰事、或犯禁忌、宜改令條、自今以後、散齋前一日、頒告諸司。○癸酉、勅諸國之夷、唯仰公糧、宜其男女皆悉給糧、但不得及孫。○乙亥、分縫殿寮宮人卅人、配大藏省、以縫作幄幔等類也。○丙子、遊獵于北野、五位已上賜衣被。○戊寅、外從五位下朝野宿禰道守爲大炊助、從五位下藤原朝臣賀祐麻呂爲右京亮、從五位下葛井宿禰豐繼爲造、東寺次官、外從五位下山田連弟分爲河内介、外從五位下勇山連文繼爲相摸權掾、紀傳博士如故。○己卯、詔曰、應變設教、爲政之要樞、商時制宜、濟民之本務、朕還淳返朴之風、未覃下土、興滅繼絕之思、常切中襟、夫郡領者、難波朝廷、始置其職、有勞之人、世序其官、逮乎延曆年中、偏取才良、永廢譜第、今省大

及格亦宮に作る宮人は女子の宮仕へする人の總稱なり此は縫女を云り。
 ○紀傳博士、類史百七に大同三年二月丙辰滅大學生直講博士一員置紀傳博士さあり原本紀を記に作る類史に據て改む下同じ。
 ○應變設教云々、此郡司採用に關する詔は三代格卷七に載す。
 ○延曆年中、延曆十七年三月廿九日なり類史十九及三代格卷七に載す。
 ○庸材之賤下、原本材を才に作る西本及三代格に據て改む。
 ○改爲大國、大寶の制國司を置く分ちて大及上中の四等さす民部式所載大國凡十三上國三十五中國十一下國九なり。
 ○年中、中の字は三代格に據て補ふ。
 ○常陸國去京遙遠云々、此勅三代格卷十四に載す。
 ○郡發稻、賦役令義解に割置田租以充雜用是爲郡稻也下條云諸國貢獻物者皆以官物買充亦是郡稻也凡官稻之源出自田租即分爲三一日郡大稅二日租穀三日郡

納言正三位藤原朝臣園人奏云、有勞之胤、奕世相承、郡中百姓、長幼託心、臨事成務、實異他人、而偏取藝業、永絕譜第、用庸材之賤下、處門地之勞上、爲政則物情不從、聽訟則決斷無伏、於公難濟、於私多愁、伏請郡司之擬、先盡譜第、遂無其人、後及藝業者、實得其理、宜依來奏。○庚辰、遷御於西宮、大宰府官、并所管國司、聽公廨四分之一、年漕于京、遙授之官半分焉。上野國元上國、今改爲大國。○壬午、勅常陸國、去京遙遠、貢調脚夫、路糧多費、去靈龜年中、守從四位上石川朝臣難波麻呂、始置稻五万束、每年出舉、以利充糧、名曰郡發稻、其用度者、載帳言上、而所司勘出不聽、出舉、宜令依舊。參議正四位下行右衛士督兼美濃守藤原朝臣緒嗣言、臣材無足、取器實空虛、病患染躬、久積日月、是以前日抗表、悉辭所居之官、今陛下無遺微臣、復參朝議、聖恩不測、徒踴高天、臣比者沉滯惡瘡、療治無驗、似損不損、終至大漸、劇職事重、懼切曠日、伏望解罷所帶、養疾私門、上除朝廷空位之譏、下遂愚臣避賢之願、不任丹款懇迫之至、謹臥病拜表以聞、不許。○癸未、皇太弟遷於東宮。○乙酉、外從五位下勇

稻也。ある是なり。
 ○載帳、三代格載を附に作る。
 ○所司勘出、原本所を諸に作る。西本及類史に據て改む。
 ○大漸、病の進み重るを云。此語尙書顧命篇に出で天子に用ふるを普通とす。れど文選(褚淵碑文)列子(力命篇)等に常人に用ひし例あり。此も其の一なり。
 ○鼓峯、四天王寺、筑前國御笠郡(今筑紫郡)に入る。にあり。續風土記に四王院のある所より南の方まです。て山の峰を大城山といふ。其頂を鼓の峯といふ。よ。日本後紀に見えたり。さ。あり。四天王寺は四王寺とも大野山寺とも又大山寺ともいふ。寶龜五年三月創立す。
 (三月)丙申朔、按に下文に四月甲午朔御大極殿視朔あり之に據れば乙未朔にて丙申は二日なり。朔字恐くは行なるべし。
 ○常磐、原本磐を盤に作る。西本及類史紀略に據て改む。
 ○秋篠朝臣、録右京神別秋篠朝臣土師朝臣同祖乾

山連文繼爲大學助、紀傳博士相摸權掾如故。從五位下柿本朝臣弟兄爲肥前守。○庚寅、於大宰府鼓峯四天王寺造釋迦佛像。○癸巳、皇太弟奉獻宴飲極歡而罷。五位已上賜衣被。○三月丙申朔、河內國人從七位下土師宿禰常磐賜姓秋篠朝臣。山城國人正六位上土師宿禰百枝菅原朝臣。○庚子、安房國人正六位下大伴直勝麻呂賜姓大伴登美宿禰。○癸卯、武藏國人正六位下小子宿禰身成貫于左京。○乙巳、始令諸國進俘囚計帳。○戊申、勅左右近衛兵衛等、劍帶同色。彼此難辨、改舊色。右近衛用緋繩纒、右兵衛用青褐纒。賜大外記從五位上上毛野朝臣額人度一人。○壬子、停攝津國川邊郡摺戶十烟、豐嶋郡二烟爲平民。○甲寅、勅陸奥出羽按察使正四位上文室朝臣綿麻呂、陸奥守從五位上佐伯宿禰清岑、介從五位下坂上大宿禰鷹養、鎮守將軍從五位下佐伯宿禰耳麻呂、副將軍外從五位下物部匣瑳連足繼等曰、去二月五日奏、請發陸奥出羽兩國兵合二萬六千人、征爾薩體、幣伊二村者、依數差發、早致襲討、事期殄滅、不得勞軍以遺後煩。又得三月九日奏、知減軍士一

飯根命七世孫大保度連之後也。あり。土師菅原秋篠大枝四氏は何れも同祖なり。
 ○大伴直、神龜元年二月(續紀上一八四頁)に大伴直南淵麻呂同國持同宮足等見ゆ同族なるべし。登美宿禰は下總國印幡郡登美郷(倭名抄版本には言美さあり。村岡氏地理志料に據る)に據れるなるべし。
 ○緋繩纒、繩は字書に粗細也。あり。纒は絞染なり。
 ○青褐纒、カチは節用集に紺地と書けり。藍染なり。
 ○摺戶、山藍紫根忍草など布帛に摺付くることを職業とする民を云。
 ○爾薩體、陸奥國二戸郡仁佐平村あり。即ち爾薩體村にて馬淵川水城の全體の名なり。下文爾を貳に作る。
 ○幣伊、陸中國閉伊郡是なり。幣は西本幣に作る。
 ○伴渠、詳ならず。
 ○鄭令復生、鄭令は西門豹なり。史記滑稽列傳に西門豹爲鄭令。云々。發民鑿十二渠引河水灌民田。云々。至今皆得水利。さあり。
 ○阿牟公、景行紀四年に

万人將軍等憂國之情中心是深、然而搜窮巢窟、衆力是資、故依先奏、不勞減定、將軍等宜知之、勦力同意、相共畢功。于時出羽守從五位下大伴宿禰今人、謀發勇敢、俘囚三百餘人、出賊不意、侵雪襲伐、殺戮爾薩體、餘孽六十餘人、功冠一時、名傳不朽也。又今人前任備口守之時、與掾正六位上河原連廣法、謀穿山破磐、以開大渠、百姓難以慮、始嗷々不止、成功之後、多蒙其利、追以稱嘆、是謂伴渠、縱鄭令復生、不能加也。○己未、阿牟公人足授外從五位下、人足者、大安寺僧泰仙也、以工術聞、令造漏刻、積年乃成、帝嘉其巧思、還俗叙位、雖機巧可奇、而隻辰易差、遂不爲用。○辛酉、出雲國造外從七位下出雲臣旅人授外從五位下、緣神賀事也。○夏四月甲子朔、御大極殿視朔也。○丙寅、內宴奏妓。○丁卯、陸奥國人外正六位下志太連宮持、俘吉彌侯部小金授外從五位下、褒勇敢也。○戊辰、四品明日香親王爲彈正尹、侍醫從五位下出雲連廣貞爲兼內藥正、但馬權掾如故、從五位下藤原朝臣文山爲玄蕃頭、正三位藤原朝臣雄友爲宮內卿、從五位下御井王爲正親正、造西寺次官從五位下秦宿禰都

日向襲津彦皇子是阿牟君之始祖也あり
 ○漏刻、時計なり三才圖會に漏刻盛水於桶量所漏水知時刻其巧其精矣天智帝十年始作漏刻一擲時辰之鐘焉あり齊明紀六年(紀下二八頁)を參看すべし
 ○隻辰、一辰と云ふに同じ辰は時なり
 ○緣神賀事、臨時祭式に國造奏神壽詞玉六十八枚金銀裝横刀一口鏡一面倭文二端白眼鵝毛馬一疋白鶴二翼御費五十昇右國造賜負幸物還國潔齋一年訖即國司率國造諸祝部并子弟等入朝即於京外便處修飾獻物神祇官長自監視下吉日申官奏聞宣示所司又後齋一年更入朝奏神壽詞如初儀太政官式及式にも見え任國造儀は儀式に見ゆ
 (四月)視朔、告朔又は視告朔云毎月朔天皇大極殿に御して諸司の進奏せる公文を視給ふ朝儀なり延喜の頃に至りては四孟月にのみ之を行へり告朔の事天武天皇五年九月丙寅紀に始て見え視朔の文字は左傳傳五年に出づ

伎麻呂爲兼伯耆權介從五位下大中臣朝臣鯛取爲筑後守○己巳幸神泉苑賜親王已下及諸衛人綿各有差○甲戌勅河內國稅分錢三百貫便充當國限三箇年出舉收利爲造堤料又彼國課丁少數無人差役其散位々子留省之徒不直本司常在鄉里者宜限三年補國中雜任計其上日行事與考言上又割公解息利充堤所食料其代者廻給隨便國三年以後復舊焉○乙亥幸神泉苑右京人正六位上高田首清足等七人賜姓田村臣○丙子山城國紀伊郡田二町賜從四位下伊勢朝臣繼子○丁丑勅苜麥爲苴禁制久矣今聞京邑百姓未秋之前沽之給急計其所得倍於收實利苟在民何勞禁制自今以後永聽賣買○戊寅近江國乘田廿八町賜中務省○庚辰正四位上文室朝臣綿麻呂爲征夷將軍從五位下大伴宿禰今人佐伯宿禰耳麻呂坂上大宿禰鷹養爲副○辛巳幸神泉苑侍臣已上賜衣被○壬午勅征夷將軍等曰夷狄干紀爲日已久雖加征伐未盡誅鋤今依來請今將出兵其軍監軍曹等且簡用且奏上但犯軍法禁身請裁隊長已下依法決斷國之安危在此一舉

○奏妓、私記に恐脫樂字と云り
 ○陸奥國人、考異に國舊缺據例補とあり
 ○志太連、續紀養老七年三月戊子條に常陸國信田郡人物部國依改賜信太連姓と見ゆ
 ○造堤料、河内國堤防料は主稅式上に正稅一萬束とあり其額少きを以て稅分錢を出舉して併て造堤料に充るなり
 ○散位々子、六位七位の人の子を云陸子(五位以上の人の子)に對して云り
 ○留省、考課令に凡貢人皆本部長官貢送太政官大學舉人員狀申太政官與諸國貢人一同試訖訖得第者奏聞留省武部とあり貢人及舉人を考試し及第者を奏問して武部省に留むるを云此外に帳内貢人にも留省といふ事あり
 ○高田首、録右京諸蕃に高田首高麗國人多高子使主之後也とあり
 ○田村臣、田村は大和國にありそれに據れるか
 ○苴、苴に同じ玉篇に苴同芻芻刈草也飼牛馬之草とあり

將軍勉之○乙酉公卿奏依去大同二年詔書七道諸國調物權從輕減欲待人殷即復恒式而於民未聞繼業於公有乏支用更別買求還致勞擾伏望改彼權制復厥恒典冀得百姓守常國用有足許之廢陸奥國海道十驛更於通常陸道置長有高野二驛爲告機急也○丙戌宮内卿正三位藤原朝臣雄友薨雄友者參議兵部卿從三位乙麻呂之孫右大臣贈從一位是公之第二子也延曆二年授從五位下爲美作守遷兵部少輔位至正五位上除左衛士權督俄而爲眞六年授從四位下歷左京大夫兼播磨守九年爲參議兼大藏卿十五年授正四位下十六年任大宰帥十七年授從三位拜中納言廿三年授正三位大同初拜大納言雄友性溫和不安喜怒姿儀可觀音韻清朗至於賀正宣命推之爲師伊豫親王之遭害也以舅流于伊豫國弘仁元年免罪授本位拜宮内卿薨于位時年五十九詔贈大納言○丁亥從六位下笠朝臣梁麻呂授從五位下正七位下當宗忌寸家主外從五位下從五位上紀朝臣梶繼爲玄蕃頭從五位下笠朝臣梁麻呂爲民部少輔從

○乘田、餘れる田を云田令義解に公田者乘田也云々凡乘田限一年賣云云
 ○今將出兵、今字或は誤か
 ○且奏上、原本且を具に作る西本に據て改む
 ○大同二年詔書、類史八十に大同二年十二月乙丑詔曰宜百姓所輸調庸雜物推改常法今須一丁輸絹若繩長一丈闊二尺四丁成正其餘准此云々將待一人給家足一復於恒典云々あり
 ○長有高野、兵部式に陸奥國驛馬長有高野各二疋さあり當時常陸國に屬せしが後陸奥國に入りしに因れり高野は今岩代國東白川郡棚倉にして長有は常陸國久慈郡下宮なるべし云々
 ○藤原朝臣雄友、雄友の任官叙位年月補任延曆九年に見ゆ
 ○贈從一位是公、考異に贈舊作賜據例訂さあり
 ○位至正五位上、原本位字任に作るを改む
 ○初拜大納言、大同元年四月十八日
 ○不妄喜怒、妄字は西本に據て補ふ

五位下尾張連粟人為主稅頭從五位下御長真人仲繼為刑部少輔從五位下小野朝臣諸野為典藥助外從五位下當宗忌寸家主為伊賀守從五位下朝野宿禰鹿取為左衛士佐○己丑阿波國人百濟部廣濱等一百人賜姓百濟公○庚寅幸神泉苑右近衛府奉獻侍臣賜衣被是日遣渤海國使正六位上林宿禰東人等辭見賜衣被○五月戊戌御馬埒殿觀馬射○辛丑勅諸國所進春米庸米去大同三四兩年遭旱不得悉進若隨色辨備恐致民苦今官庫之貯頗有盈餘宜任土所生賀與調物進成輕貨但畿內者混合正稅○癸卯勅征夷將軍正四位上文屋朝臣綿麻呂等曰塞下之俘其數稍多出軍之後慮生野心將軍等勤加綏撫勿致驚擾威惠兼施稱于朝制許之從五位上高階真人遠成為主計頭從五位下小野朝臣眞野為齋宮頭○乙巳幸神泉苑帝自茲以後每至假日避暑於此○丁未制夫飛驒工者貢進之年課役俱免至于逃亡而不役何異調庸之未進自今以後檢返抄拘解由一同調庸從四位上藤原朝臣繼業為神祇伯侍從近江守如故從四

○推之為師、原本師を帥に作る類史に據て改む
 ○流于伊豫國、大同二年五月十一日
 ○百濟公、錄左京諸蕃に百濟公百濟國都墓王三十世孫汶淵王之後也、同和泉諸蕃には酒王之後也さあり
 ○五月賀、賀さ同じ玉篇に賀は易財也さあり
 ○許之、二字恐くは衍なり
 ○假日、假は暇なり休暇なり
 ○飛驒工、原本驛を驛に作る類史に據て改む
 ○課役俱免、賦役令に凡斐陀國庸調俱免每里點匠丁十人每四丁給一丁一人式部式に凡飛驒國每年貢匠丁一百人其返抄准諸國調庸例さあり
 ○賀祜麻呂、原本祜を祜に作る類史に據て改む
 ○徵音、猶德音云が如し毛詩大雅思齊章に出づ
 ○少選、須臾なり
 ○批挑、字書に批は凡數多而分次運送者謂之批挑は擇取之也さあり
 ○國家之忌及大歲、國家は天皇を指奉れり嵯峨天皇は延曆五年丙寅九月御

位下藤原朝臣縵麻呂為大舍人頭從五位上大中臣朝臣智治麻呂為治部大輔從五位上登美真人藤津為兵部大輔從四位上春原朝臣五百枝為宮內卿右近衛中將從四位上藤原朝臣藤嗣為兼右京大夫攝津守如故從五位下紀朝臣岡繼為亮從五位下藤原朝臣賀祜麻呂為武藏介從五位下藤原朝臣友人為讚岐守○己酉賜玄寶法師書曰眞俗殊趣禮接自疎渴仰德音不捨少選屬夏景燦條炎風扇物想禪場被服與時宜改聊附法服一具至宜領之○壬子勅征夷將軍正四位上兼陸奧出羽按察使文室朝臣綿麻呂等曰將軍等去二月五日奏狀稱來六月上旬兩國軍士分頭發入其糒鹽器仗等先已貯備不可更勞者以此觀之緣軍資物皆已批挑而本月十二日來奏稱軍士食料并雜物等且仰國司令儲備及繩幕且用縫作又出羽守大伴宿禰今人巡行管內簡閱軍士者是知征戰之具猶有寥落前從來奏事何相乖加以國家之忌及大歲同在東方兵家所避不可抵觸宜緣軍庶事今年備畢來年六月發入又檢去延曆十三年例征軍十萬軍監十六人軍曹五十八人廿

降誕あらせらる弘仁二年辛卯は天皇の御爲に忌むべき年なりとなり大歳は十二年に一周し卯年には卯方即ち東方にあり兵家にて避くる所なりとなり

○自存、考異に存舊作在據例訂あり

○延曆十九年例、類史八十三に十一月詔曰云々其今年不登言上之國宜免田租と見えたるのみにて其他は詳ならず

○坂上大宿禰田村麻呂薨、傳は田邑麻呂傳記に詳なり

○帶方、後漢末に樂浪郡の南部を割きて帶方郡とす今の朝鮮京畿道及忠清道の地なり ○年五十四、此四字類史紀略及田村麻呂傳に據て補ふ ○戊午信濃國獻白鳥、此八字類史及紀略に據て補ふ

年、征軍四万、軍監五人、軍曹卅二人、今將軍等、准承前例、所定卅七人、權用十五人者、今所興征軍一万九千五百餘人、然則四万之日、軍吏不滿五十、今日二万、何超六十、仍折衷所定、軍監十人、軍曹廿人、宜精選堪戰者、充用言上、○癸丑、勅天下諸國、昔遭疾疫、續以旱灾、百姓彫弊、于今未復、興言念此、深疾于懷、宜簡鰥寡孤獨及貧窮老疾不能自存者、早加賑給、但給法者、准延曆十九年例、○甲寅、勅農人喫魚酒、禁制惟久、而國司寬縱、無情糺斷、今須遣使重加督察、宜令國司在前禁止、若有輒喫并與者、即禁其身、使到之日、付行決罰、不得慣常寬容、○丙辰、大納言正三位兼右近衛大將兵部卿坂上大宿禰田村麻呂薨、正四位上犬養之孫、從三位苅田麻呂之子也、其先阿智使主、後漢靈帝之曾孫也、漢祚遷魏、避國帶方、譽田天皇之代、率部落內附、家世尙武、調鷹相馬、子孫傳業、相次不絕、田村麻呂、赤面黃鬚、勇力過人、有將帥之量、帝壯之、延曆廿三年拜征夷大將軍、以功叙從三位、但往還之間、從者無限、人馬難給、累路多費、大同五年轉大納言、兼右近衛大將、頗將邊兵、每出有功、寬容待士、能得

〔六月〕

死力、薨于粟田別業、贈從二位、時年五十四、○戊午、信濃國獻白鳥、○六月癸亥朔、正四位下巨勢朝臣野足授從三位、從五位下直世王從五位上、從四位上春原朝臣五百枝正四位下、從五位上藤原朝臣道繼正五位下、從五位下紀朝臣百繼、良岑朝臣安世從五位上、正六位上藤原朝臣清本、藤原朝臣總繼、紀朝臣和氣麻呂、多治比真人弟笠、石川朝臣弟助、大伴宿禰山道從五位下、正六位上廣井宿禰真成外從五位下、從五位上直世王爲中務大輔、相摸守如故、從五位下藤原朝臣總繼爲少輔、從五位下石上朝臣美奈麻呂爲兵部少輔、從四位下大野朝臣直雄爲左近衛中將、左京大夫如故、參議從三位巨勢朝臣野足爲右近衛大將、參議左大辨從四位上秋篠朝臣安人爲兼左兵衛督、越後守如故、參議右大辨從四位下紀朝臣廣濱爲兼右兵衛督、從五位下藤原朝臣清繩爲佐、出雲介如故、○乙丑、令諸國進武藝人年卅已下、補左右近衛、是日、奉幣於伊勢大神宮、○戊辰、大僧都傳燈大法師位勝悟卒、法師俗姓凡直、阿波國板野郡人也、法師初爲尊應大德弟子、是則芳野神叡大德

○勝悟卒、元亨釋書二にも傳見ゆ ○神叡、同卷十六に傳あり

○入室、高弟を云
○非空非有之宗、諸法の實相は有にもあらず空にもあらず中道なりと説く宗旨を云
○時議、原本議を儀に作る西本に據て改む

○十三大寺、東大寺以下十五大寺の中より二寺を除けるなるべし
○七月、藤原朝臣眞雄卒、延暦廿二年正月庚子紀に始て見ゆ

○朱鈞、鈞は鈞車の略ならむか禮記明堂位に鈞車夏后氏之路也、注に鈞有曲輿一者也とあり天子の御車を云

之入室也、道業清高、洞明經戒、姿儀不凡、言語可愛、至於非空非有之宗、當時推而相讓、護命、慈寶、泰演等英傑、皆自其門而出焉、聖朝嘉尚、授以僧統、時議稱任得其人、緇徒之中、濫行不聞、政迹之所致也、薪盡火滅、嗚呼哀哉、春秋八十、○庚午、正六位上清原真人夏野授從五位下、○戊寅、從五位下高階真人遠成爲民部少輔、從五位下尾張連粟人爲主計頭、從五位下笠朝臣梁麻呂爲豐後介、○辛巳、十三大寺僧尼年八十已上者、各賜絁二匹布四端、○丁亥、主殿寮釜殿自倒、○秋七月乙未、出羽國鎮兵賜復三年、以在邊成家業絕亡也、○己亥、幸神泉苑、觀相撲、○庚子、備前守正四位下藤原朝臣眞雄卒、左京大夫正四位下鷹取之男、左大臣正二位魚名之孫也、勇力過人、頗有武藝、爲推國天皇之近臣、延暦廿二年叙從五位下、任近江權介、廿五年授從五位上、歷近衛少將、大同三年授正五位下、同年□從四位下、遷左馬頭、自守清廉、不論人短、身帶弓劍、常侍朱鈞、屬天皇遷御平城、分局追從、既而一女進謀、天皇擬入于伊勢、眞雄遮輿而伏、忘死固爭、蓋魏臣斷鞅之志乎、可謂歲寒而知松柏之

○魏臣斷鞅之志乎、故事未だ考へず

○綿麻呂等、考異に等舊脱據例補とあり
○省今月四日奏狀、原本省を看に作る例に據て改む下同
○彼村夷俘、夷字西本に據て補ふ
○臨討、西本類史討を伐に作る
○詳議、原本詳を評に作る西本に據て改む
○速谷神、神名式に安藝國佐伯郡速谷神社名神大月次新嘗、今同郡平良村大字上平良にあり國幣中社に列す
○伊都岐嶋神、同式に同國同郡伊都岐嶋神社名神大、今同郡殿嶋町にあり國幣中社に列す

後凋者也、今上嘉其忠情、特授正四位下、拜備前守、在任而卒、時年卅五、
○甲辰、幸神泉苑、陪侍之人、賜錢有差、○乙巳、勅聞平城宮諸衛官人等出入任意、不勤宿衛、宜直彼參議加督察焉、○丙午、勅征夷將軍正四位上兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂等曰、省今月四日奏狀、具知以俘軍一千人、委吉彌侯部於夜志閑等、可襲伐弊伊村、彼村夷俘、黨類居多、若以偏軍臨討、恐失機事、仍欲發兩國俘軍各一千、來八九月之間、左右張翼、前後奮、宜與副將軍及兩國司等、再三詳議、具狀奏上、國之大事、不可輕畧、○丁未、大極殿龍尾道上有雲氣、狀如烟、須臾竭滅、○己酉、安藝國佐伯郡速谷神、伊都岐嶋神、並預名神例、兼四時幣、○乙卯、侍從從五位下藤原朝臣世嗣爲兼右少辨、從五位下多治比真人弟笠爲中務少輔、正五位下石川朝臣河主爲內匠頭、從五位下豐野真人仲成爲主稅頭、從五位上田中朝臣淨人爲大藏少輔、從五位下清原真人夏野爲宮内少輔、從五位下淡海真人有成爲左京亮、從五位下藤原朝臣總繼爲相摸介、從五位下大野朝臣眞菅爲下總守、從五位下藤原朝